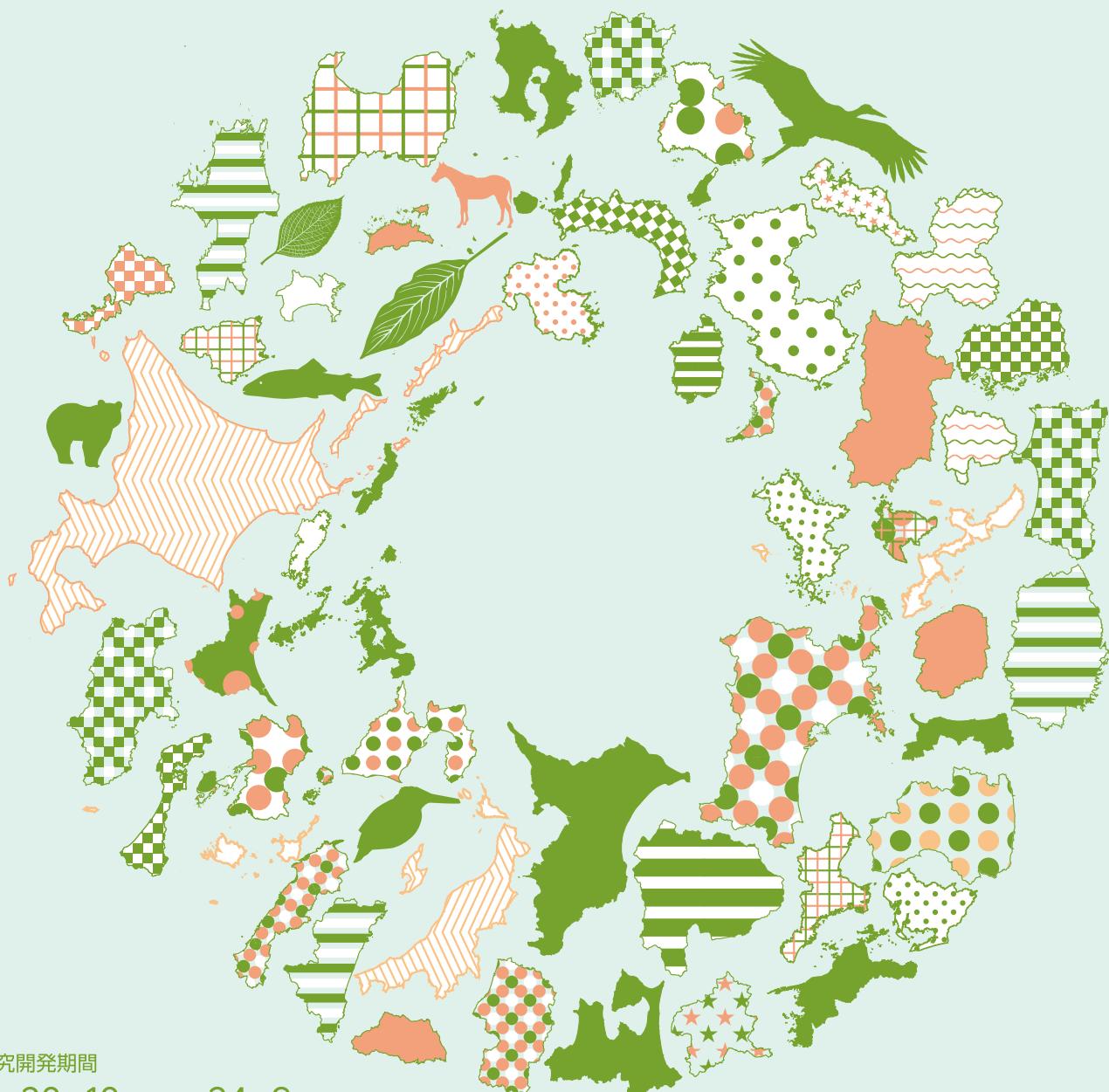


独立行政法人 科学技術振興機構・社会技術研究開発センター
「科学技術と人間」研究開発領域
研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」
研究開発プロジェクト

「地域主導型科学者コミュニティの創生」

研究開発実施終了報告書



研究開発期間

平成20年10月～平成24年9月

研究代表者氏名 佐藤 哲

所属 役職 総合地球環境学研究所・教授

目次

1. 研究開発プロジェクト	2
2. 研究開発実施の要約	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. 実施項目・内容	2
2-3. 主な結果・成果	3
2-4. 研究開発実施体制	5
3. 研究開発実施の具体的な内容	5
3-1. 研究開発目標	5
3-2. 実施項目	6
3-3. 研究開発結果・成果	8
3-3-1. フィールド研究会を通じた事例収集と参与型観察	8
3-3-2. 地域環境学ネットワーク	12
3-3-3. 地域と科学者の協働のガイドライン	17
3-3-4. ワーキンググループ	23
3-3-5. 参加型評価システム	26
3-3-6. レジデント型研究インターンシップ	32
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況	37
3-5. プロジェクトを終了して	37
4. 研究開発実施体制	38
4-1. 体制	38
4-2. 研究開発実施者	39
4-3. 研究開発の協力者・関与者	41
5. 成果の発信やアウトリーチ活動など	46
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	46
5-2. 論文発表	50
5-3. 口頭発表	50
5-4. 新聞報道・投稿、受賞等	51
5-5. 特許出願	52
資料 1 地域環境学ネットワーク設立記念シンポジウムプログラム	53
資料 2 地域環境学ネットワーク規約	61
資料 3 ひよこ組能登フィールド研究会報告書	65

1. 研究開発プロジェクト

- (1) 研究開発領域：科学技術と人間
- (2) 領域総括 : 村上 陽一郎
- (3) 研究代表者 : 佐藤 哲
- (4) 研究開発プロジェクト名：「地域主導型科学者コミュニティの創生」
- (5) 研究開発期間： 平成 20 年 10 月～平成 24 年 9 月

2. 研究開発実施の要約

2-1. 研究開発目標

地域社会の環境問題解決への取組の中で、ステークホルダーとの相互作用を通じて科学者が問題解決型に変容しつつある実態を把握し、その知見を基礎として全国の科学者とステークホルダーが参加する「地域環境学ネットワーク」を設立する。ステークホルダーと科学者の協働のガイドラインを基盤に、ステークホルダーが参加する研究評価を取り入れたウェブジャーナルの構築、多様な地域課題に対応したワーキンググループの活動、若手レジデント型研究者の育成に向けたレジデント型研究インターンシップの試行を通じて、科学者コミュニティの変容を促し、地域社会が直面する環境課題の解決に直結した、領域融合的な問題解決型研究を根付かせるための基盤を構築する。

2-2. 実施項目・内容

1. 全国各地のレジデント型研究者、トランスレーター、これら地域の知識生産者と協働する訪問型研究者、地域のステークホルダーが参加する「地域環境学ネットワーク」を構築する。
2. 「地域と科学者の協働のガイドライン」を構築・公開する。
3. 協働のガイドラインを基礎として、地域の環境課題解決のための問題解決型研究をステークホルダーが参加して評価する参加型研究評価システムを構築する。具体的には、ウェブジャーナル「地域環境の未来」を構築・運用する
4. 地域環境学ネットワーク内に多様な地域課題に対応するワーキンググループを設置して、活動の活性化を促す。
5. 地域密着型の問題解決に直結した研究を志す若手研究者の育成のために、レジデント型研究者を目指す大学院性を対象に「レジデント型研究インターンシップ」を実施する
6. これらの活動をさらに進展させて、科学者コミュニティの中に地域社会が直面する多様な課題の解決に貢献する問題解決型研究を根付かせるための基盤を構築する。

2-3. 主な結果・成果

地域社会の環境問題解決への取組の中で、地域社会に常駐するレジデント型研究機関・訪問型研究者・ステークホルダーの相互作用を通じて、科学者が問題解決型に変容しつつある実態を把握し、科学者とステークホルダーが参加する「地域環境学ネットワーク」を形成して、ステークホルダーと科学者の協働のガイドラインと、ステークホルダーが参加する科学的研究の評価手法を構築することを主な目的として研究開発を行った。

この目的を達成するために、地域環境学ネットワークの設立と協働のガイドライン、参加型評価システムの構築に向けて、全国各地のレジデント型研究機関およびその活動地において、8回のフィールド研究会、4回の公開シンポジウムを開催し、プロジェクトおよび地域環境ネットワークのウェブサイトを構築・整備して、理念と成果の共有、および成果の公開を行った。研究開発の設計にあたっては、便宜的に科学知と在来知（土着的知識、生活知）というシンプルな二分法を採用してきた。しかし、地域のステークホルダーが持つ知識の構造の複雑さを正面からとらえることが重要であることが明らかになった。実際にステークホルダーは科学知を含む多種多様な知識を自らの必要に応じて取捨選択し、取り込み、飼いならして活用しており、古典的な意味での在来知を切り分けて扱うことはできない。多様な知識が渾然一体となり、相互作用しながらダイナミックに変容している実態の認識に基づいて、新しい「地域環境知」の概念を提唱し、その中の科学の位置づけを再検討してきた。また、このような多様な知識のあり方の中で、特に地域環境あるいは自然資源の持続可能な管理の文脈で、一次産業の生業などの現場において、生活の必要から生まれる高度な専門性が重要な役割を果たしていることが明らかになった。沖縄県恩納村漁協の事例では、漁業活動の発展のために漁協が中心となってモズク、ウミブドウなどの養殖技術やサンゴ礁再生技術などを開発し、一部は産業として確立するに至っている。ステークホルダーが自ら資源管理に不可欠な地域環境知を高度な専門性をもって生産する事例は、レジデント型研究機関としての機能をステークホルダー自身が持つことが可能であることを示している。このようにして、地域社会に地域環境知をもたらす主体は、専門的な科学者や市民調査の主体だけにとどまらず、はるかに多様であることが再認識された。知識生産の主体の多様性の認識は、地域企業の位置づけの見直しにもつながった。福島県を中心に活動する地域工務店は、森林管理から木材の加工流通、国産材による住宅建設を通じて、環境に配慮した家に住むという新しいライフスタイルを提案する地域のオピニオンリーダーとしての役割を果たしている。徳島県では、地域企業グループが大学研究者、行政、地域の多様なステークホルダーと協働して生態系の広域調査や環境保全活動に取り組んでいる。このような事例から、地域企業は科学者とステークホルダーの協働の中で予想以上に重要な役割を果たしていることが確認された。

地域環境問題の解決に顕著な成果をあげている全国各地の事例について、訪問調査と情報収集を実施し、これらの中から地域環境学ネットワークの設立発起人を募った。また、主要な設立発起人を招いてグループリーダー会議とブレインストーミングを行い、ネットワークのデザインとガイドラインのあり方について議論した。ネットワークの組織と運営のあり方を精査して規約を作成すると同時に、地域環境学ネットワークのウェブサイトを開設して、広く理念と意義の浸透をはかった。これらの成果をもとに、42名の設立発起人の参加を得て、平成22年3月31日に地域環境学ネットワークを正式に設立した。ネットワークには全国からさまざまなレジデント型研究者、訪問型研究者、知識のトランスレーター、生業の中での知識生産主体、行政の中の研究者、地域企業、地域のステークホルダーを組織化する地域リーダーなどが参加している。地域環境学ネットワークの構築と拡大によって、各地の先進的な事例に関する情報共有と相互評価・研鑽を通じて、科学者・専門家とステークホルダーの相互作用を通じた変容を促すことが可能な、重層的かつ多面的な組織体制を実現できた。協働のガイドラインと参加型評価システムの設計に向けて、ネットワーク設立発起人に対するアンケート調査などを通じて理念の整備が進展した。「問題

解決型の科学研究」、「科学者と地域の協働」の視点からガイドラインの原案を検討し、参加型評価システムの設計を進めた。

地域環境学ネットワーク設立のプロセスで、各地で行われている問題解決型研究の主体やあり方が予想をはるかに超えるほどに複雑で多様であることが判明し、そもそも私たちが目指す地域社会の課題に直結した科学研究のありかたの定義を根本的に見直すことを迫られた。地域社会における知識生産と活用の最前線に位置するきわめて多様な知識生産主体の機能と地域への関わり方は、個々人の個性や地域性、知識ユーザーの特性、環境課題の性質などによって大きく異なっている。多様な個別事例から抽出した知見を、地域環境知の生産と流通を核とした地域社会の順応的ガバナンスの実現のための、一般性の高いガイドラインへと集約するプロセスの検討を進めた。平成22年3月に「地域と科学者の協働のガイドライン（第1版）」が完成し、専用ウェブサイトを構築して公開した。ガイドラインは、科学者とステークホルダーの協働を進めるための「(A)問題解決のネットワークづくりのための17条」と問題解決に役立つ科学を推進するための「(B)知識を生み出し活用するための17条」から成り、その内容の改善のためにウェブ上でコメント募集を試みた。平成22年9月には、大阪学院大学において地域環境学ネットワーク設立シンポジウム「地域の環境保全と持続可能な発展に役立つ科学を求めて」を開催し、2日間にわたって15名のスピーカーによる講演とパネルディスカッションを行った。このような活動を通じて地域環境学ネットワークの意義と活動の周知をはかった結果、地域環境学ネットワークは順調に拡大、充実し、プロジェクト終了時点で全国から127名の多様な分野にまたがる会員が参加している。

「地域と科学者の協働のガイドライン」を基礎に、ステークホルダーが参加する査読システムを備えたウェブジャーナル「地域環境の未来」を設計し、プロジェクトメンバーを中心とした編集委員会を組織して12月に原稿募集を開始した。また、地域環境学ネットワーク内に関心や研究内容を共有する7ワーキンググループ（里海・里山・自然エネルギー・野生動物管理・社会技術・エコツーリズム・若手「ひよこ組」）を形成し、それぞれが自律的な活動を開始している。特筆すべきは地域環境学ネットワークの若手が中心となった「ひよこ組」の活動である。これは、地域社会の現場でレジデント型研究者としてのキャリアを歩み始めた若手が、それぞれの悩みや直面する困難を解決するため、相互に学びあう機会を求めて自主的に構築したワーキンググループであり、きわめて活発かつ有機的な交流が開始されている。ひよこ組の活動が母体となり、地域に密着して問題解決型研究を推進する若手研究者育成のために、大学院生を対象としたレジデント型研究機関における「レジデント型研究インターンシップ」を試行した。石垣島白保のWWFサンゴ礁保護研究センター、長崎県対馬市、福島県天栄村湯本地区において、3名の大学院生が地域の現場でレジデント型研究の見習い修行を楽しんだ。

研究開発の過程で多くのメンバーが、多様な形でネットワークの資源を活用し、研究や活動を進化させていくようすを見ることができた。もちろん、このネットワークに集まる人々は、もともと地域の解題解決に直結する研究や知識構造に対する関心が高い。しかし、ネットワークの活動を通じて、多くの参加者が自分の専門分野や関心以外の領域で、地域課題と向き合うために役立つ多様な知識技術に対する視野を拡大し、いわば地域に役立つ「引き出し」を増やしていくプロセスが起こった。個々の研究者、ステークホルダーが多様な引き出しを身に着け、問題解決の現場における多面的かつ柔軟な対応をとることができるように進化していったのである。また、レジデント型研究を志す若手研究者、大学院生にとっては地域環境学ネットワークが大きな刺激となった。2011年から試行した「レジデント型研究インターンシップ」の仕組みは、大学院におけるインターンシップに新しい選択肢を提供することによって、レジデント型研究を推進できる人材の育成につながるだろう。これらの成果を土台として、地域の環境課題解決に直結する地域環境知の生産と流通が、どのようにして人々の意思決定や行動の変容を促すか、さらにはそれがどのようにして環境問題の解決と持続可能な社会の構築につながっていくかについて、さらに詳細な分析を行っていくことが大きな課題として残されている。

4年間の研究開発によって、地域環境の課題の解決に直結した問題解決型研究を推進する科学者とステークホルダーの協働のためのプラットフォームと人的基盤が構築され、若手研究者の育成のため仕組みが整った。地域環境学ネットワークを持続可能な形で運営しつつ、社会生態システムの変化に対応したダイナミックな進化を促していきたい。地域環境知の知識の生産と流通を核として、地域からのボトムアップで地球環境問題の解決に挑むための順応的ガバナンス構築に向けて、さらなる挑戦を続けていく。

2-4. 研究開発実施体制

(1) 地域環境学ネットワークの形成を通じた科学者コミュニティの変容グループ
グループリーダー：佐藤 哲（総合地球環境学研究所、教授）

地域環境学ネットワーク形成とステークホルダーと科学者の協働のガイドライン策定と参加型研究評価システム構築を通じた、地域環境学ネットワークの拡大と深化による科学者の変容

(2) レジデント型研究機関を中心とした科学者の変容の実態把握グループ

グループリーダー：鎌田 磨人（徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部、教授）

レジデント型研究機関の役割の再検討、レジデント型博物館による地域環境へのアプローチの分析などを通じた、持続可能な地域づくりのための実効性ある知識生産の分析

(3) ステークホルダーと科学者の相互作用と協働の実態把握グループ

グループリーダー：家中 茂（鳥取大学地域学部、准教授）

ステークホルダーの生活戦略をめぐる相互作用、および在来の知識技術と外来の知識・制度の相互作用を通じたステークホルダーと科学者の協働のあり方の分析

3. 研究開発実施の具体的な内容

3-1. 研究開発目標

地域環境問題に関する科学的に妥当な解決策が提案されても、地域社会のステークホルダーによって受け入れられず活用されない、という問題がしばしばおこっている。これは、ステークホルダーの理解不足という問題ではなく、もしかすると科学的な知識生産が地域に固有の問題構造や在来の価値観、意思決定システムなどとかけ離れた状態で行われているためにおこっているのかもしれない。全国各地の生態系保全、自然資源管理、自然再生など、生態系サービスの保全と活用への取り組みの中で活躍するレジデント型研究者、訪問型研究者などが、多様なステークホルダーなどとの相互作用を通じて、問題解決型に変容しつつある実態を、各地の事例における参与型観察、訪問調査などによって把握した。その成果を基礎として、全国の多様な知識生産主体と地域のステークホルダーが参加する「地域環境学ネットワーク」を構築し、ステークホルダーと科学者の協働のガイドライン、ステークホルダーが参加する科学的研究の参加型評価手法などを整備して、地域社会による主体的な問題解決への貢献を使命とする科学者コミュニティを創生し、環境問題の地域からの解決に直結した科学を推進する社会的な仕組みの構築を目指した。また、研究開発過程で地域に密着した問題解決型科学の担い手を育成する必要性、並びに若手研究者・

大学院生の中のレジデント型研究というキャリアパスへの関心の高まりが認識されたため、若手レジデント型研究者の育成を、23年度から研究開発の目標に新たに加えた。

3-2. 実施項目

(1) 事例収集と分析

地域社会の中に常駐して研究活動を行う「レジデント型研究機関」の研究者の多くは、地域社会の自然環境にかかわる課題の解決に直結した研究に先進的に取り組んできた。ダイナミックに変動する複雑な地域環境の保全や再生のためには、地域のステークホルダーや、大都市などに研究の拠点を置き地域を訪問して研究を行う「訪問型研究者」、市民調査の実施者、地域企業や農林水産業従事者、地域行政やNPOなど、さまざまな知識生産主体と協働して、地域の環境問題解決に直結した学際的・領域融合的な研究を行い、その成果を活かした多様な主体の協働による取り組みを推進する必要がある。また、複雑なシステムの不確実性に対処するために、活動の成果をモニタリングして、その結果に応じて活動を改善していく順応管理のプロセスが不可欠である。地域の環境問題の解決をめざすさまざまな研究者とステークホルダーの協働によって実現されている領域融合的な研究と、多様な主体の協働による問題解決への取り組みの中の順応管理プロセスの実態を全国各地における参与型観察と事例研究によって収集分析し、科学者とステークホルダーの協働のあり方、問題解決型の科学のあり方について、地域ネットワークのダイナミズムに関する分析を行った。そこで得られた知見をもとに、各地の多様な事例の分析をベースにして、「地域環境学ネットワーク」の構築と「協働のガイドライン」「参加型評価システム」の構築に向けて、理念の整備とネットワークの設計を行った。

(2) 地域環境学ネットワークの設立と運営

これらの多面的な事例分析に基づいて、「地域環境学ネットワーク」を設立し、運営を開始した。「地域環境学ネットワーク」は、多様な地域の環境問題に取り組む地域社会のステークホルダーと科学者がお互いに学びあい育てあう、全国的なネットワークである。各地で活動する地域内のネットワークや、特定の環境課題の解決を目指す他の全国・広域ネットワークの活動を相互につなぎ、それらの活動で中心的な役割を果たす人々が集まって交流する上位ネットワークと位置付けることができる。したがって、全国各地で先進的な活動を行っているステークホルダー、レジデント型研究者・訪問型研究者は、地域環境学ネットワークの重要な構成メンバーである。

地域環境学ネットワークに参加することによって、各地のステークホルダーはさまざまな分野の専門家との協働を通じて、自らの活動に役立つ研究成果にアクセスすることができる。科学者は、全国の多様な問題解決型研究・地域研究の事例や人材との交流を通して、研究展開に役立つさまざまなリソースを得て、領域融合的な問題解決型研究を推進すると同時に、新たな研究分野を開拓することができる。このようなステークホルダーと科学者の交流を通じて、各地で問題解決型の研究と多様な主体の協働が活性化することをサポートするのが、「地域環境学ネットワーク」の重要な機能である。

(3) 「地域と科学者の協働のガイドライン」

地域環境学ネットワークにおける多様な事例の分析を基礎として議論を重ね、「地域と科学者の協働のガイドライン」を設計、構築した。地域からのボトムアップで環境問題の解決と持続可能な社会の構築を実現するために、地域社会に生きるステークホルダーが、地域の環境保全と持続可能な発展のために活用できる科学と、それを活用する社会のしくみが求められている。しかし、科学者が日々生みだしている科学的知識は、地域に暮らす人々が生み出し、受け継いできた

知識のあり様や、地域社会がものごとを決める時のやり方と、必ずしも調和するものとは限らない。協働のガイドラインは、地域環境学ネットワークを構成する地域のステークホルダーと科学者が、それぞれの地域で直面する課題を解決するために創り上げてきた多様な協働の工夫を持ちより、まとめたものであり、地域の問題解決に必要となる多様な知識を生み出し、活用するための指針とヒントを提供することを意図している。地域のステークホルダーと科学者が協働して課題に取り組む際の留意点を確認し、お互いの状況を振り返って問題解決を進めていくために活用される指針である。

ガイドラインは、科学者とステークホルダーの協働を進めるための「(A)問題解決の仕組みづくりのための 17 条」と、問題解決に役立つ科学を推進するための「(B)知識を生み出し活用するための 17 条」から成る。(A)では主に知識を活かして問題解決に具体的に取り組む方が、活動の現場で使用できる指針となるものを、(B)では主に問題解決に役立つ知識技術を生み出そうとする知識生産者の方々に、地域から学びながら進化していく新しい科学のあり方を提案する。もちろん両者の区別は厳密なものではなく、相互に密接に関連するものである。

(4)ワーキンググループ

これまでの研究開発を通じて、地域環境学ネットワーク会員の中に関心や研究・活動分野を共有する複数のグループ構造が内発的に形成されてきた。この構造を活かしてネットワーク内での多様な交流と協働活動を活性化することを目指して、平成 23 年 7 月に開催した地域環境学ネットワーク第 2 回総会において、研究開発メンバーをオーガナイザーとして複数のワーキンググループを形成することが決定された。プロジェクト終了時までに 7 ワーキンググループ（里海・里山・自然エネルギー・野生動物管理・社会技術・エコツーリズム・若手「ひよこ組」）が形成されている。

それぞれのワーキンググループは、共有されている問題関心にしたがって地域環境学ネットワーク会員からメンバーを募り、自律的に活動することが期待されている。地域環境学ネットワーク事務局はワーキンググループの活動をサポートすると同時に、その成果をウェブサイトなどを通じて広く公開することで、ネットワークの拡大と深化を促す。ワーキンググループはすでに多面的な活動を開始している。プロジェクト終了までに、里海・水産資源管理ワーキンググループが平成 24 年 1 月に九州大学において、9 名の講演者を募ってワーキンググループ主催の研究会「地域主体の里海づくり」を開催した。その要旨集はウェブサイトに公開されている。若手ワーキンググループ「ひよこ組」は、平成 24 年 2 月に、能登地域での「能登半島里山里海自然学校（現・おらっちゃんの里山里海）」や「里山マイスター養成プログラム」などの取り組みから、豊かな自然と文化を活かした生業や活動を生み出し発展させるプロセスについて学ぶことを目的として第 1 回フィールド研究会を実施した。社会技術ワーキンググループは、里山ワーキンググループと協働して、平成 24 年 8 月に広島県芸北町において、ステークホルダーを交えた社会技術に関するセミナーと研究会、およびフィールド調査を実施した。さらに、野生動物管理ワーキンググループは「International Network for Local Scientists of Wildlife Management」の形成に向けて動き始めている。このように、課題別・関心別のワーキンググループの形成が、地域環境学ネットワークの新しい活動の萌芽を生み出している。

(5)参加型評価システム

「地域と科学者の協働のガイドライン」に照らして、地域環境問題の解決に直結する問題解決型研究の成果を、科学者だけでなくステークホルダーも参加して評価するための「参加型評価システム」の構築に向けて、理念の整備を行った。ワーキンググループのオーガナイザーを中心としてウェブジャーナル「地域環境の未来」の編集委員会を構築し、広範なネットワークメンバーとの議論を進めて諸規定と査読基準の整備を進めた。12 月にステークホルダー参加型のウェブジャ

一ナルのサイトを構築して原稿募集を開始した。しかし、研究評価システムのもう一方の柱として検討してきた地域活動の顕彰制度に関しては、プロジェクトメンバーおよび領域アドバイザーから多くの異論が噴出したことから、24年度においては現状の設計による顕彰制度の性急な導入は見送ることとした。

ウェブジャーナル「地域環境の未来」は、地域の多様なステークホルダーが主役となった環境保全と持続可能な地域づくりへの取り組みをサポートできる科学を評価し、その成果を公開していくものである。それぞれの地域に固有の条件に対応し、地域のステークホルダーの納得や合意形成に役立ち、利害や関心が異なる多様な人々が共有できる指針やアイデア、技術を提供し、ステークホルダー自身による持続可能な地域づくりへの取り組みに貢献することを目指して実施された研究成果を、ステークホルダー参加型査読をおこなって評価し、公開するものである。このような地域環境の課題の解決に直結する知識技術に関する論文、地域の方々の意思決定や具体的な活動に役立つさまざまな分野の知見についての解説、そして、このような知識技術を活用した地域における活動の報告を掲載する。

(6) レジデント型研究インターンシップ

レジデント型研究者とは、地域に暮らす一人の市民として、地域の問題解決や環境保全を目指す研究・実践に取り組む研究者・専門家である。レジデント型研究者をめざす大学院生や若手研究者が、レジデント型研究の基本姿勢や地域とのかかわり方などを学び、協働のための基礎力を育成することを目的として、レジデント型研究インターンシップを設計した。これは、計画段階で「短期滞在型研究」として提案していた取り組みを、若手研究者がレジデント型研究の実態を体験するインターンシップとして再定義したものである。多くの受け入れ機関、大学院との協議を進めた結果、第1号として平成23年度に首都大学東京の4年生（大学院進学予定）が石垣島白保のWWFサンゴ礁保護研究センターにおいて短期滞在型研究を実施することができた。その後さらに2名の学生がレジデント型研究者のもとに滞在してインターンシップを実施し、専門家・科学者として地域のステークホルダーとの協働のためのさまざまな実践的アプローチについて学ぶことができた。これは参加者にとっても受け入れ機関にとっても大きなインパクトがあり、地域社会が直面する環境問題の解決に直結した研究を志す若手の育成と、将来の科学者コミュニティ全体の変容に大きく貢献できる取り組みと考えることができた。今後は関連分野の大学院との連携を強化して、研究開発終了後におけるこの取り組みの継続を図っていく予定である。

3-3. 研究開発結果・成果

3-3-1. フィールド研究会を通じた事例収集と参与型観察

プロジェクトに参加する研究者がそれぞれのフィールドにおいて地域のステークホルダーと協働した参与型研究を行い、参加研究者とステークホルダーが各自のフィールドを相互に訪問してその知見を統合し、レジデント型研究機関が果たしている役割、訪問型研究者や市民調査の実施者を含む多様な知識生産の主体とステークホルダーの相互作用の実態、科学者コミュニティの変容のプロセスを明らかにする。そこで得られる知見を基礎に、レジデント型研究機関を中心とした科学者と地域社会のステークホルダーの生産的な相互作用と科学者コミュニティの変容を促すために、地域社会のステークホルダー、レジデント型研究者、訪問型研究者、市民調査の実施者など、知識の生産と活用にかかわる多様な主体で構成される「地域環境学ネットワーク」を設立する。個々のフィールドにおける参与型研究の成果を共有し、多様な地域における科学者とステークホルダーの生産的な協働の事例を収集するために、各地のレジデント型研究機関、およびそ

の活動地において、一連のフィールド研究会を実施した。また、平成23年度からは、研究成果を地域のステークホルダーと共有し、そのフィードバックを得て研究開発を改善していくために、研究会と合わせて公開シンポジウムを実施した。その成果に基づき、ネットワークの中で科学者コミュニティの変容の実態把握を継続しながら、ステークホルダーと科学者の協働のガイドラインと研究成果の評価手法を検討した。ネットワークの活動をウェブページやメディアを通じて広く発信し、ネットワークで共有された情報を活用して地域に固有の科学と社会の相互作用が活性化され、地域の現状に則した問題解決に貢献する知識生産が行われることを促す。これによって、ステークホルダーと協働した環境問題解決のための地域環境研究を推進する新しい科学者コミュニティが形成され、地域に固有の研究と活動の成果が正当に評価されることによって、科学者コミュニティの変容が持続することを保証する。

①平成20年度

地域環境の未来にかかる意思決定の主体はあくまでも地域の多様なステークホルダーであるという認識に立ち、ステークホルダーが活用しやすい知識・制度の構造についての分析を進めるために、11月に長野県上田市の長野大学において研究会を開催した。「AUN長野大学恵みの森再生プロジェクト」における、問題解決型の研究が生産する知識セットのあり方を検討する試みの成果を分析した。AUN長野大学恵みの森再生プロジェクトが試みている里山再生ツールキットは、森林の生態系サービスの活用による地域社会の持続可能な発展のために、科学的に妥当で持続可能な、多様なオプションを開発・提供しようとするもので、生態系に配慮した多様なオプションを提供し続けるという科学者の役割を提案するものである。

全国の潜在的なレジデント型研究機関のリストアップを行い、十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キヨロロ、釧路湿原および奄美野生生物保護センター、西海区水産研究所石垣支所、金沢大学などの訪問調査を実施し、AMSL阿嘉島臨界研究所、豊田市矢作川研究所などについて情報収集を行った。個別の環境課題にかかる既存のネットワークに関しては、森を持つ大学ネットワーク、里山里海サブ・グローバルアセスメント、棚田ネットワーク、全国アマモサミット、全国草原再生ネットワークなどとの情報交換を行い、連携に向けた基盤を構築した。各地で地域のステークホルダーと訪問型研究者の生産的な協働についての事例を収集し、特に福島県天栄村における東北大学による「EIMY」、各地の沿岸域における九州大学の「里海創生社会システムの構築」、佐賀県鹿島市におけるWWFジャパンによる干潟保全などについて情報を蓄積した。

②平成21年度

徳島県上勝町（7月）と沖縄県石垣市（9月）においてフィールド研究会を実施した。研究会では、「科学者および地域のステークホルダーの変容を生起させる相互作用的な意思決定過程とネットワーク構造」をテーマに、各地での事例報告をもとにネットワーク構造についての議論を深めた。特に上勝町における多様なステークホルダーと研究者の協働の実態と、意見やビジョンの差異を維持しながら協働を進めていくためのネットワーク構造に関する分析から、それぞれの地域におけるネットワークの活動の重要性と、ネットワークの生成と維持発展におけるハブとなる人材が果たす役割の重要性が明らかになった。石垣島白保における研究会では、行政組織の中の研究者による知識生産と活用、在来知と科学的の相互作用、ステークホルダーによるエコツーリズムの活用などについて議論を深めた。レジデント型研究機関であるWWFサンゴ礁保護研究センターが果してきた役割の分析を通じて、地域に定住するレジデント型研究者・専門家がダイナミックな地域の変化を促すカタリスト（触媒）としての機能を果たしていることが明らかになった。また、これらのフィールド研究会に各地で精力的に活動するレジデント型研究者やステークホルダーの参画を得て、新たな事例を収集した。越後松之山「森の学校」キヨロロなどの地域博

物館、AMSL 阿嘉島臨海研究所、沖縄県水産海洋研究センター石垣支所などの多様なレジデント型研究機関の活動から、地域に密着した研究を行う知識生産主体の多様性と、柔軟な知識生産と流通・活用の実態が浮かびあがった。

地域環境学ネットワークの発足に向けて、各地で地域環境問題の解決に取り組む多様な科学者、専門家、知識生産主体、ステークホルダーを厳選し、設立発起人としての参画を呼び掛けた。平成 22 年 2 月には地域環境学ネットワークの設立発起人へのアンケート調査を実施し、3 月には東京において主要な設立発起人を招いてグループリーダー会議とブレインストーミングを開催して、地域環境学ネットワークのありかたとビジョンについて議論を行った。

③平成 22 年度

個々のフィールドにおける参与型研究の成果を共有し、多様な地域における科学者とステークホルダーの協働と、地域内ネットワークのダイナミックな動きの多様な事例を収集するために、鹿児島県奄美市（6 月）と兵庫県豊岡市（2 月）においてフィールド研究会を実施した。奄美市においては、地域の環境保全や知識生産にかかる具体的な活動を展開しているレジデント型研究者、NPO 団体メンバー、エコツアーアイニシアチブ実施者、環境省自然保護官などの方々を招いて少人数の濃密なワークショップを実施し、地域のステークホルダーが主体となって推進している環境・景観保護の取り組みの活動実体と、そこで駆使されている知識を再検討するなかから、外部のアクターである研究者コミュニティの貢献の可能性を模索する議論を行った。これを通じて、多様な立場、考え方をもつステークホルダーと科学者・専門家のネットワークが、意見や考え方の差異を維持しつつ協働している実態と、その中の求心力をもたらす地域文化の重要性が浮かび上がった。コウノトリの野生復帰を核とした持続可能な地域づくりの先進事例として知られる兵庫県豊岡市においては、レジデント型研究機関である兵庫県立コウノトリの郷公園、豊岡市、コウノトリ育む農法を推進する農業者、湿地再生を進める NPO 法人などの方々とフィールドを歩き、コウノトリの野生復帰が多様なステークホルダーの参加と協働を促し、地域内ネットワークのダイナミックな動きを駆動している実態を把握した。その中で、レジデント型研究者に加えて、行政や農業者など、多様な人々がコウノトリにかかる知識生産を行い、生産された知識が流通し活用されていることが明らかになり、科学者・専門家以外の多様な知識生産主体の重要性が確認できた。

地域環境学ネットワーク設立記念シンポジウムを 9 月に大阪府吹田市で開催し、地域環境学ネットワークに関する情報発信と認知度の向上をはかった（資料）。地域環境学ネットワークの設立発起人の中から各地で顕著な活動成果を挙げている多様な方々による講演と議論を行うとともに、ネットワーク会員によるポスターセッションを実施した。また、同時に開催した地域環境学ネットワークの設立総会において、研究開発実施者に加えて、ネットワークに参集した各地からの多様な会員からのインプットを得て、協働のガイドラインと参加型評価システムの構築に向けた論点の整理と議論を行った。シンポジウムでの講演とパネルディスカッション、およびポスターセッションの発表については、資料と動画をウェブサイトで公開し、地域環境ネットワークの活動について広範な情報発信を行った。また、兵庫県豊岡市では、フィールド研究会と同時に、地域環境学ネットワーク公開シンポジウム「自然再生を通じた地域再生—経済と文化の視点から」を開催した。各地で地域環境にかかる活動を行うゲストを招き、地域のステークホルダーと共に活発な議論と意見交換を行った。8 月に開催された「科学技術と社会の相互作用」プログラムの国際シンポジウム「Science in Society - a challenge in Japan」においては、米国 Mote Marine Laboratory の Michael Crosby 博士をコメントーターとして招聘し、研究代表者による講演と議論を通じて、地域環境学ネットワークの理念と活動についてひろく国内外に周知した。また、Crosby 博士が主導してきた政策決定者と科学者の協働に向けた「New Paradigm」についての議論を深め、多様なステークホルダーと科学者をつなぐ「双方向的トランスレーター」の重要性についての理解を共有して、今後の協働にむけての基礎を構築した。

④平成 23 年度

地域環境学ネットワークが順調に拡大、充実する中で、そこに集まった多様なリソースを活用して、地域のステークホルダーの視点から見た科学や国際的な制度、仕組みの意義についての検討を深めるために、7月に熊本県阿蘇市および熊本市においてフィールド研究会および公開シンポジウム「地域が国際的な制度を活かすために」を開催した。地域の自然と暮らしをより豊かなものにするために、地域のステークホルダーが国際的な制度をいかに使いこなすかという課題についての分析を進めた。ユネスコ世界自然遺産などの国際的制度が、地域固有の自然や文化を保存・活用するために日本各地で導入されている。地域社会にとっては適切な自然環境保全や観光資源化など、様々なメリットが期待されるが、一方で外からやってくる制度を地域にあてはめようとして、地域社会の関心とは異なる画一的な基準や枠組みが持ち込まれるならば、地域社会にとっては混乱、困惑が生じる場合もある。シンポジウムでは、地域に暮らす人々が地域の自然と文化をよりよく理解し、主体的に持続可能な地域づくりをすすめるために、国際的な制度や枠組みを活用しうる可能性と課題について議論を深めた。

10月には沖縄県座間味村および那覇市においてフィールド研究会および公開シンポジウム「里海創生のための地域環境学」を開催した。「地域主導型エコツーリズム」と「里海創生のための地域環境学」をテーマに、各地での実践と研究に取り組むネットワーク会員が集まり、議論を深めた。沿岸海域に人の手が加わることで生物多様性と生産性が高まる状態を、陸域の里山にならって「里海」と呼ぶ。それは、利用しながら保全するという、人々の暮らしと自然の結びつきにもとづいた自然認識に基づくものであり、沿岸域の持続可能な地域づくりのための中核となりうる考え方である。沖縄の島々をとりまくサンゴ礁の海は、この「里海」の典型的な事例だが、現在、沖縄のサンゴ礁生態系は著しく劣化している。人の手が加わることで海も華やぐという関係を取り戻す道筋を探るために、生産と流通の現場や政策の実践にかかわるネットワーク会員の参加を得て、生活に深く結びついた「里海創生」の課題について検討を行った。

24年1月には研究代表者がプロジェクト終了後の展開を見据えて平成23年10月から実施した総合地球環境学研究所フィージビリティスタディ「新たなコモンズの創生と持続可能な管理のための地域環境知形成」との共催で、北海道斜里町知床世界遺産地域において、共同研究会および公開シンポジウム「地域から世界へ - 知床世界遺産から考える地域と世界を結ぶ仕組み」を開催した。阿蘇市・熊本市での研究会・シンポジウムを通じて、豊かな自然環境と調和した持続可能な社会を築くために、地域の取り組みを積み重ねるボトムアップの取り組みがたいせつであり、世界遺産などの国際的な仕組みを活用した地域からの取り組みを積み重ねることが効果的と考えられることが再確認された。そこで、地域で培われてきたさまざまな知識や仕組みを、国際的な場面で活用していく試みとして、知床世界遺産や世界各地の取り組みの事例から、地域と世界を結ぶ総合的な環境保全と持続可能な社会構築の道筋を検討した。これらの研究会と公開シンポジウムは、地域環境学ネットワークの拡大と会員の多様化に伴って、地域社会が直面する多様な課題に対応できる領域融合的な色彩を強めてきた。多様な課題に直結するテーマを扱うことができるようになったことが、会員拡大の重要な契機となっている。これらのシンポジウムとフィールド研究会の内容と成果は、ウェブサイトを通じて広く公開され、ネットワーク参加者に対して大きなインセンティブとなるとともに、ネットワークの理念と活動が幅広い層の潜在的関与者に浸透していった。特に、社会の現実との乖離に直面している研究者、レジデント型研究者としての立場を固めつつある若手研究者の参加が得られるようになった。

⑤平成 24 年度

研究開発プロジェクトの終了を控えて、地域環境学ネットワークの活動を重要な研究リソースとして、総合地球環境学研究所（地球研）において、基幹研究プロジェクト「地域環境知形成に

による新たなコモンズの創生と持続可能な管理（地域環境知プロジェクト）」（プロジェクトリーダー：佐藤哲、平成24年4月～平成29年3月）が開始された（後述）。9月に総合地球環境学研究所がある京都市において、プロジェクトの最終シンポジウム「地域のための科学を求めて・・・地域環境学ネットワークの歩みとこれから」と、新しく始まった地域環境知プロジェクトのキックオフシンポジウム「地域を支える知識生産・活動・順応的ガバナンス」を、地域環境学ネットワークと地域環境知プロジェクトの共催で2日間にわたって開催した。

シンポジウム「地域のための科学を求めて・・・地域環境学ネットワークの歩みとこれから」では、プロジェクトの原点に立ち返り、地域環境問題に関する科学的に妥当な解決策が提案されても、地域社会のステークホルダーによって受け入れられず活用されない、という問題に対して、科学的な知識生産が地域に固有の問題構造や在来の価値観、意思決定システムなどとかけ離れた状態で行われることに原因を求めた。このような問題意識から、地域社会に定住して地域環境問題解決に役立つ知識を生産するレジデント型研究者などが集まる「地域環境学ネットワーク」を設立して、地域のステークホルダーによって活用される科学のあり方を探求してきた。そこで、地域環境学ネットワークのこれまでの歩みを振り返り、地域社会が直面するさまざまな環境課題の地域のステークホルダーが主体となった解決を支える、領域融合的で問題解決型の研究を行う学者・専門家の育成に向けた取り組みの課題について議論を行った。地域環境学ネットワークに集まった、実際の地域の現場で奮闘する若手研究者、およびレジデント型研究インターンシップ参加者による講演と議論を通じて、次世代のレジデント型研究者の育成に向けた課題についての議論が深まった。

シンポジウム「地域を支える知識生産・活動・順応的ガバナンス」では、2012年4月から開始された「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理（地域環境知プロジェクト）」において、地域の人々による取り組みの基礎となる新しい知識の構造として、科学知と人々の生活の中で培われてきた在来知が融合した「地域環境知」に着目して議論を深めた。地域環境知プロジェクトは、世界各地の多様な事例を収集分析し、地域環境知形成のメカニズムとそれを活かした地域社会の順応的ガバナンスの仕組みを明らかにして、持続可能な社会の構築のためのボトムアップの取り組みを支える科学のあり方、科学を使いこなす社会のあり方の解明を目指している。この地域環境知形成を核とした持続可能社会の構築のための新しい科学への挑戦を、世界各地から集まった多様なプロジェクトメンバーによる講演を通じて広く共有した。また、各地の地域環境知の生産と活用の事例を紹介するポスターセッションを開催し、2つのプロジェクトが一貫して探求してきた、地球環境問題解決のためのボトムアップの取り組みを支える領域融合的な科学の事例を紹介した。シンポジウムにおける議論を通じて、地域環境学ネットワークと地域環境知プロジェクトに集まつた多くの関与者の英知を集め、新しい科学の地平を開く知の航海に船出する準備を整えることができた。

3-3-2. 地域環境学ネットワーク

①地域環境学ネットワークの理念

全国の多様な事例の収集と分析を通じて、地域環境学ネットワークの理念と設計の検討を進めてきた。地域環境学ネットワークは、地域社会が直面するさまざまな環境問題に取り組むステークホルダーと科学者が、お互いに学びあい育てあう全国的なネットワークとして設計された。地域社会の現場で、環境問題の解決に直結する研究活動を行っているさまざまな学者・専門家や、その知識を活用して問題解決に取り組む地域社会のステークホルダーが集まる場を提供し、交流を通じた情報共有と協働を通じて各地の取り組みを活性化することを主な機能としている。また、地域環境問題の解決に直結する研究を担う次世代の若手研究者の育成を支援することも、重要な

課題である。

地域の環境問題の解決には、科学者・専門家と地域社会のステークホルダーの密接な協働が不可欠である。地域環境学ネットワークは、問題解決の担い手である地域のステークホルダーの良きパートナーとなる科学者を育て、支援することを通じて、ステークホルダーが具体的な課題の解決に活用できる「役に立つ知識」を地域に提供する科学を成熟させることを目指す。また、各地の活動についての情報を共有することで、地域のステークホルダーがそれぞれの取り組みを改善していくための相互学習の機会を提供する。さまざまな分野の科学者・専門家と各地のステークホルダーの交流を深める機会を提供し、科学者とステークホルダーの相互作用と相互学習を促進する。

地域環境学ネットワークは、地域のステークホルダーと科学者・専門家がお互いに刺激し合い、評価し合いながら協働していくための指針として、「協働のガイドライン」の策定し、公開する。また、環境問題の解決に向けた取り組みの主役は、地域のステークホルダーであるという認識を徹底させ、その活動をサポートできる科学者・専門家の育成のために、科学者の活動や研究成果を地域の視点と科学の視点の両面から評価する「参加型研究評価」の仕組みを構築する。また、レジデント型研究者として地域の環境課題解決のための研究を行う若手研究者の育成を、レジデント型研究インターンシップなどによって推進する。これらの仕組みを活用することによって、持続可能な社会に向けた各地の活動の、科学的・社会的な基盤を整えることが、地域環境学ネットワークの目標である。

②地域環境学ネットワークの意義と特徴

地域環境学ネットワークには、全国から問題解決型研究に取り組む科学者と、地域社会のステークホルダーが参加し、情報交流をつうじて科学者と地域の協働のあり方をさぐっている。科学者と地域社会のステークホルダーが、地域の現場でどのように付き合っていかなければよいかを示す「協働のガイドライン」を、参加者全員が指針としてゆるやかに共有し、相互の研鑽を通じてよりよい指針へと改善していく。

地域の環境問題解決と持続可能な地域づくりに役立つ研究を、地域の視点と科学の視点の両面から評価する仕組みである「参加型研究評価」を行う。ウェブジャーナル「地域環境の未来」を構築し、インターネット上で多様な事例についての情報を集約、評価して公表していく。また、研究会、シンポジウム、ワークショップの開催などを通じて、メンバー間の情報交流と相互評価をすすめる。

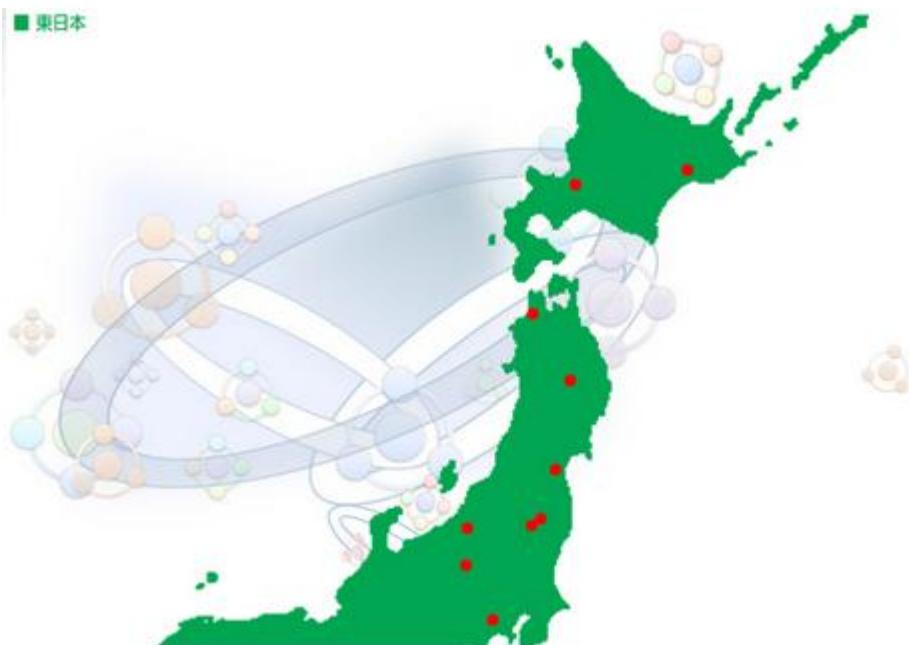
地域社会のステークホルダーにとっては、全国から参加する多様な地域のステークホルダーと科学者との交流から、一人ひとりの取り組みの改善に役立つアイデアが得られる。また、問題解決型研究に取り組む意欲を持つ科学者との交流により、科学者との協働による問題解決の一歩を踏み出すことができる。また、問題解決のノウハウや科学的知識、地域外の人的ネットワークを得ることで、取り組みを客観的に評価しあい、着実に取組みをステップアップさせていくための基盤を得ることができる。

科学者にとっては、従来の学会では評価されにくい「問題解決への貢献」という研究の社会的価値を、地域社会の視点と科学的視点の両方から評価することが可能になり、さらなる研究の発展に向けたヒントが得られる。研究計画の策定、フィールド調査の実施、研究論文の執筆、研究成果の発表といった一連のプロセスにおいて、多様な地域から参加する科学者とステークホルダーからの評価および協力を受けることができる。



③地域環境学ネットワークの設立と発展

北海道から沖縄まで、各地の先進事例の中で活動する 42 名の科学者、多様な知識生産主体、ステークホルダーが、このような「地域環境学ネットワーク」の理念に賛同し、設立発起人として名を連ねて、平成 22 年 3 月 31 日をもって地域環境学ネットワークが正式に設立された。全国にまたがる先進的な活動を推進してきた人々の参画を得て、各地の事例に関する情報共有と相互評価・研鑽を通じて、科学者・専門家とステークホルダーの相互作用を通じた変容を促すことが可能な、重層的かつ多面的な組織体制を実現できた。これと並行して地域環境学ネットワークの広報用リーフレットと規約（資料）を完成させ、設立記念シンポジウムを平成 22 年 9 月に開催し、専用ウェブサイトとメーリングリストの運用を開始してネットワークの理念と意義の浸透をはかった。



■北海道釧路市・釧路湿原自然再生普及行動計画ワンダグリッド・プロジェクト
[市民の湿原再生活動支援とネットワーク化](#)

■北海道札幌市・社団法人エンジンシカ協会
[エンジンシカの有効利用を通じた資源管理と森林再生](#)

■青森県弘前市岩木川下流域／北関東連携水循環研究会・北海道大学
地域社会による環境管理システムを再構築するために
[一生態系調査とメタガバナンスの役割一\(PDF\)](#)

■岩手県盛岡市・岩手大学農学部附属寒冷フィールド
サイエンス教育研究センター
[都市住民のための森林・林業理解の場づくり](#)

■宮城県柴田郡川崎町・川崎町の資源をいかす会
里山と薪ストーブユーザーを直接つなぐ「川崎一仙台薪ストーブの会」～薪を通して森を想い、薪を通して森と関わる～(PDF)

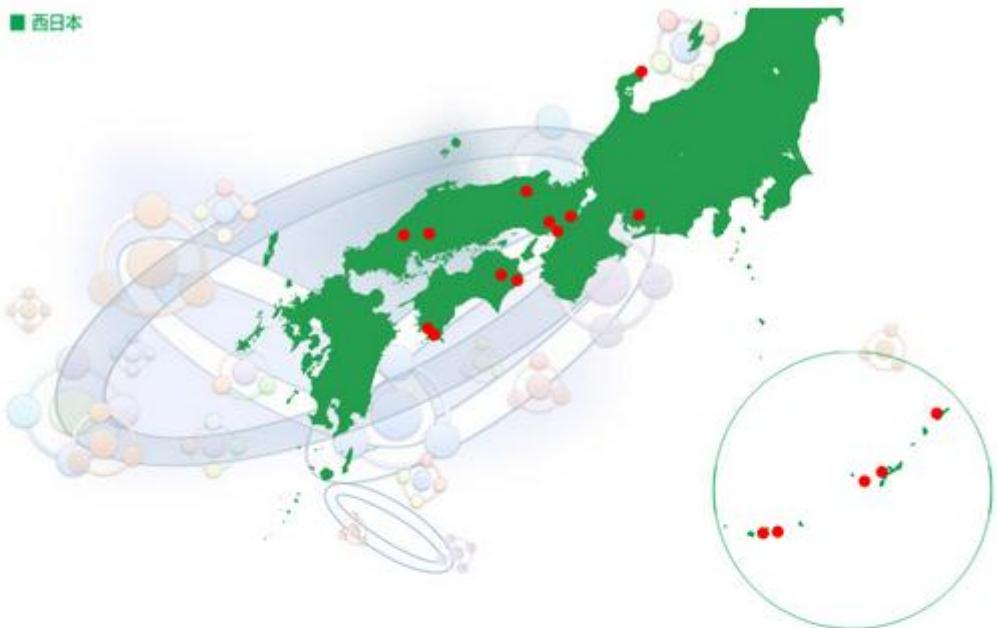
■福島県郡山市・(株)四季工房
国産材を使った環境共生住宅の提供を通じた持続可能なライフスタイルの提案 ★活動紹介のページへ★

■福島県天栄村EMO湯本プロジェクト・東北大
学・EMO湯本地域協議会～山・湯・人～地域の宝でな
りたい・いとなみづくりEMO湯本プロジェクト
(PDF)

■新潟県十日町市・十日町市立里山科学館 越後松之
山「森の学校」キヨロロ
農村活性化の研究学習拠点としての地域密着型博物
館

■長野県上田市・ALIN長野大学恵みの森プロジェクト
里山再生ツールキットの構築
森内水循環が里山における生物多様性および生態系サ
ービス改善に及ぼす効果について(PDF)

■東京都八王子市・首都大学東京
島嶼共生系学際研究環(PDF)



- 石川県珠洲市・能登半島里山里海自然学校
[地域と一緒にとなった里山里海の再生](#)
- 道賀県泉津市・道賀県立琵琶湖博物館
[市民調査を通じた琵琶湖の多面的な価値の再構築](#)
- 大阪府大阪市・公吉地域再生センター
[まちづくりの主体を生み出す～西淀川交通まちづくりプロジェクト～\(PDF\)](#)
- 徳島県上勝町・かみかつ里山俱楽部・徳島大学
[徳島県立高丸山 千年の森づくり ★活動紹介のページへ★ 地域環境保全活動における協働形成の予備考察\(PDF\)](#)
- 高知県幡多郡大月町・黒潮生物研究所
[地域コミュニティとの交流を通した研究環境の強化\(PDF\)](#)
- 広島県北広島町・芸北 高原の自然館
[地域博物館を中心とした草原再生への取り組み](#)

- 愛知県豊田市・矢作川委の健康診断実行委員会
[市民と研究者の協働による科学的森林調査「矢作川委の健康診断」](#)
- 大阪府吹田市・千里リサイクルプラザ研究所
[市民研究員によるゴミ減量と環境保全への取り組み](#)
- 兵庫県豊岡市・兵庫県立コウノトリの郷公園
[コウノトリと共に生きる地域づくり](#)
- 高知県柏島・NPO法人 黒潮実感センター
[島まるごと博物館の里海づくり](#)
- 徳島県南部・みなみから届ける環づくり会議
[産官学民協働の“極意”～みなみから届ける環づくり会議をモデルに～\(PDF\)](#)
- 広島県・広島県立総合技術研究所林業技術センター
[里山人工林の集約化施業に役立つコミュニケーションツールの開発\(PDF\)](#)

地域環境学ネットワークが順調に拡大、充実し、プロジェクト終了時点で全国から 127 名の多様な分野にまたがる会員が参加している。ネットワークの設立と活動の展開を通じて、地域の人々自身による問題解決への取り組みに役立つ知識を生産する科学が、職業的な科学者・専門家だけでなく多様な立場の人々によって担われている実態が明らかになり、従来の科学の枠を超えた新しい知識生産のあり方の探求が進んだ。この課題は、プロジェクト終了後も、新しく開始された総合地球環境学研究所における「地域環境知プロジェクト」において継続して検討されていく。また、各地で地域社会が直面する環境課題に取り組む多様な人々は、地域社会の中でダイナミックに活動するネットワークを形成しており、職業的科学者・専門家や多様な知識生産の主体はその重要な構成員である。プロジェクトでは、このような地域内のネットワークが求心力を維持しながら問題解決に向けた活動を推進できる仕組み、すなわち順応的ガバナンスの仕組みを、各地の先進的な事例を通して検討してきた。これもまた、地域環境知プロジェクトの中心的な課題として探求していく。

3-3-3. 地域と科学者の協働のガイドライン

①ガイドラインの考え方

「地域と科学者の協働のガイドライン」は、平成22年3月に開催した地域環境学ネットワーク設立発起人によるブレインストーミング等を通じて基本的な構想をまとめ、9月にそれまでの研究開発の成果を集約した原案をネットワーク会員に周知し、地域環境学ネットワーク設立総会において第一案を提案し、その後のネットワーク会員のメーリングリストでの濃密な議論を経て、およそ1年をかけて練り上げたものである。平成23年2月に開催した豊岡市でのフィールド研究会において、第1版の最終版を協議し、完成させた。「地域と科学者の協働のガイドライン（第1版）」の考え方、概要版、詳細版を、地域環境学ネットワークのウェブサイトにおいて3月10日に公開した。また、ガイドラインへのコメント募集のページを公開し、広範な人々からのフィードバックを得られる仕組みを構築した。

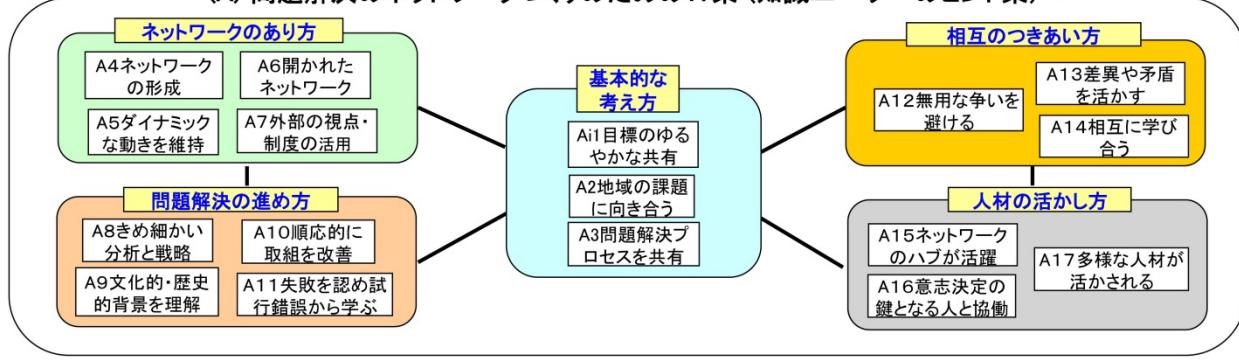
地域からのボトムアップで環境問題の解決と持続可能な社会の構築を実現するために、地域社会に生きるステークホルダーが、地域の環境保全と持続可能な発展のために活用できる科学と、それを活用する社会のしくみが求められている。しかし、科学者が日々生みだしている科学的知識は、地域に暮らす人々が生み出し、受け継いできた知識のあり様や、地域社会がものごとを決める時のやり方と、必ずしも調和するものではない。「地域と科学者の協働のガイドライン」は、地域環境学ネットワークを構成する地域のステークホルダーと科学者が、それぞれの地域で直面する課題を解決するために創り上げてきた多様な協働の工夫を持ちより、ボトムアップで作り上げたものである。地域の問題解決に必要となる多様な知識を生み出し、活用するための指針とヒントを提供することを目的としている。地域のステークホルダーと科学者が協働して課題に取り組む際の留意点を確認し、お互いの状況を振り返って問題解決を進めていくために活用されていくことを想定している。

②地域と科学者の協働のガイドライン

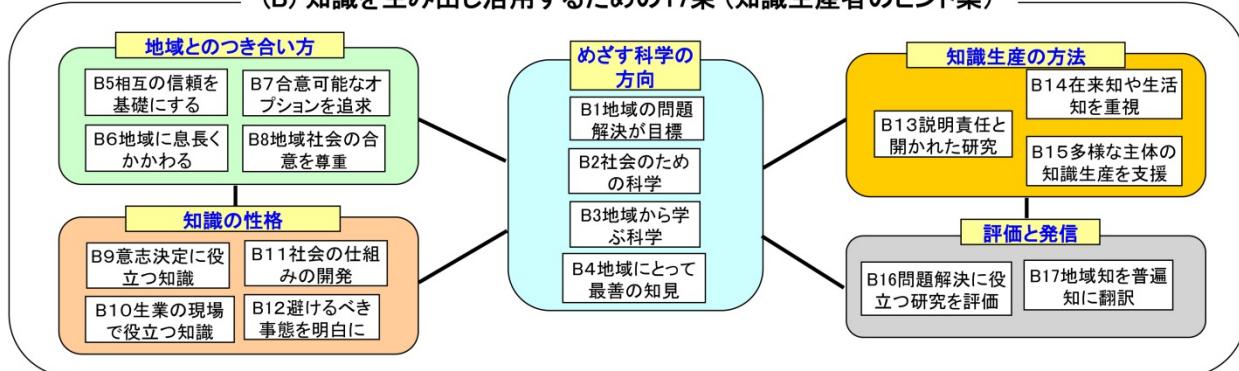
ガイドラインは、科学者とステークホルダーの協働を進めるための「(A) 問題解決のネットワークづくりのための17条」と、問題解決に役立つ科学を推進するための「(B) 知識を生み出し活用するための17条」から構成されている。(A)では主に知識を活かして問題解決に具体的に取り組む人々が、活動の現場で使用できる指針となるものを、(B)では主に問題解決に役立つ知識技術を生み出そうとする知識生産者に、地域から学びながら進化していく新しい科学のあり方を提案している。もちろん、両者の区別は厳密なものではなく、相互に密接に関連している。

地域と科学者の協働のガイドラインの構成(Ver. 1)

(A) 問題解決のネットワークづくりのための17条 (知識ユーザーのヒント集)



(B) 知識を生み出し活用するための17条 (知識生産者のヒント集)



地域と科学者の協働のガイドライン全文

(A) 問題解決のネットワークづくりのための 17 条

基本的な考え方

A1. 地域の活動の理念や目標をゆるやかに共有します。

私たちは、多様なアクターが共有できる理念や目標を見出し、それを中心に緩やかにつながるネットワークを構築することで、多様な価値や理念をもつ人々が相互の信頼を基礎に協働できるように努めます。

A2. 地域の現状と課題に真摯に向き合います。

私たちは、地域社会と環境の現状と、地域が直面する課題を様々な角度から分析し、それを真摯に受け止めて問題解決に取り組みます。

A3. 問題解決のプロセスを多様な人々と共に進めます。

地域の中の多様なステークホルダーと科学者・専門家が、地域環境の問題について考え、

取り組んでいくプロセスと共に進めていくことを通じて、開かれた問題解決への取り組みを実現します。

ネットワークのあり方

A4. 地域の問題解決の取り組みを支える人々のネットワークを形成します。

私たちは、地域社会の問題解決に向けた取り組みを支え、駆動していくために、異なる関心や利害を持つ多様なステークホルダーのネットワークを形成し、動かしていきます。

A5. ネットワークのダイナミックな動きを維持し、硬直化を避けます。

ネットワークのダイナミックな動きを維持し、硬直化を避けます。私たちは、地域の問題解決をめざす人々のネットワークが、構造や機能を柔軟に変化させながら動き続けるように、ダイナミックなネットワークのあり方を探していきます。)

A6. 新しいアクターの出現を妨げず、開かれたネットワークを目指します。

私たちは、地域ネットワークに新たなアクターの参加を歓迎し、それぞれのアクターの役割が柔軟に変化していくことで、多くの人々が参加できる、開かれた活力あるネットワークを目指します。

A7. 外部の視点や制度を取り入れ、活かしていきます。

私たちは、地域環境にかかる外部者の視点や外来の制度を、地域社会の実情に合わせて翻訳し取り入れることによって、よりよいオプションを見つけるように努めます。

問題解決の進め方

A8. きめ細かく注意深い戦略をもって取り組みを進めます。

私たちは、多様な価値と利害が交錯する中できめ細かい現状分析を行い、多くの人々の視点を取り入れて戦略的に問題解決にあたります。

A9. 文化的・歴史的背景を理解して活用します。

私たちは、地域の文化的・歴史的背景を十分に理解し、多様なステークホルダーの納得と参加を促していきます。

A10. 順応的に取り組みの改善を進めます。

私たちは、複雑かつダイナミックに変化する地域環境に対応して、解決すべき問題の定義や目標を見直し、新たなアプローチを柔軟に導入することで、順応的に取り組みを改善していきます。

A11. 失敗を認め、試行錯誤から学びます。

私たちは問題解決への取り組みの結果を真摯に受け止め、失敗から眼をそらさず、試行錯誤を通じて取り組みを改善していきます。

相互のつきあい方

A12. 無用な争いを避け、多くの人々の納得と合意を目指します。

私たちは、異なる価値観や意見をもつ人々が不毛な対立に陥ることがないように、細心の注意を払って説明と相互理解に努め、相互の信頼を基盤に活動を進めます。

A13. お互いの違いを尊重し、地域の中の差異や矛盾を活かす道を模索します。

私たちは、地域社会の中に、様々な個性をもつ人々、様々な問題認識があることを自然なことと受け止めて、お互いの違いを認めつつ、共通の価値や一致点を見つけていきます。価値や意見の多様性を解消しようとするよりも、差異や矛盾を受け入れ、生かしていくことで、新たなニーズや埋もれていた人材を発掘します。

A14. 相互に学び合う姿勢を貫き、若い世代を育成します。

私たちは、科学者とステークホルダーがお互いに学びあい、変容し、相互理解とかかわりを深めていく姿勢を貫き、相互の学び合いを通じて地域の未来を担う若い世代を育てていきます。

人材の活かし方

A15. ネットワークのハブとなる人材が活躍できるよう配慮します。

私たちは、多様な立場の人々をつなぐネットワークの「ハブ」、人々の学びあい育てあいを通じて協働を促す「カタリスト（触媒）」が生まれ、活躍できる環境を整え、問題解決のプロセスが効果的に機能するよう促します。

A16. 地域社会の意思決定の鍵となるアクターとの協働を重視します。

私たちは、地域の在来の意思決定システムを十分に理解し、地域の意思決定に中心的な役割を果たす人々、組織と密接に連携して、具体的で実効性ある対策を進めます。

A17. 地域の多様な人材と技術が活かされる道を探ります。

私たちは、地域ネットワークの中に地域環境の評価や課題抽出、問題解決に役立つ科学的知識技術、事務処理、法制度の理解、情報発信、資金調達などの様々な専門能力・技術を持つ人材が眠っている可能性に期待し、それぞれの人がその個性や能力を無理なく発揮して活動できるよう努めます。

(B) 知識を生み出し活用するための 17 条

めざす科学の方向

B1. 研究の目標は、地域環境にかかわる問題の解決です。

私たちは、それぞれの地域の現実の中で、問題解決に役立つ知識を生産できる科学を育てています。問題解決の主役である地域社会のステークホルダーが、様々な知識を活かして地域環境にかかわる問題を解決していくことを支援する科学を追求します。

B2. 社会のための科学を使命とします。

私たちは、研究成果として発信される知識が地域のステークホルダーによって活用されることを意識して、科学の中で完結しない、「社会の中の科学・社会のための科学」を追求します。そのために科学的知識を地域の実情に合わせて「翻訳」する技術を磨き、地域社会の在来の知識技術や意思決定システムと調和した、問題解決に役立つ知識の生産を目指します。

B3. 地域から学び、科学のあり方を深めていきます。

私たちは、地域のステークホルダーのみなさんとの交流を通じて、これまで多くのことを学んできました。地域の実態から学びつつ知識技術を磨くと同時に、その経験を生かして科学研究の質を高め、科学の体系そのものを見直し深める姿勢を貫きます。

B4. 地域社会にとって最善の科学的知見を生産することを追求します。

私たちは、普遍的で一般性の高い科学的成果を追求することに加えて、それぞれの地域に固有の状況の中で、地域から学び、地域にとって最善と考えられる解を探求する科学を目指します。この二つのアプローチは対立するものではなく、地域に深くかかわり地域から学ぶことで環境問題の本質や真理、そして解決法の糸口を見出し、科学研究をいっそう深めることができるものと考えます。

地域とのつきあい方

B5. 相互の信頼を基礎に、ステークホルダーによる問題解決を支援します。

私たちは、科学者とステークホルダーが相互に信頼しあい、お互いの限界を理解して協働していくことを目指します。科学者・専門家はステークホルダーに判断をゆだねる姿勢を持って、多様なステークホルダーの活動から学び、支援していきます。

B6. 地域に息長くかかわります。

私たちは、レジデント型・訪問型を問わず、また知識の生産者・ユーザーいずれの立場であっても、地域社会に継続的にかかわり、ステークホルダーの一人として地域の未来に対する責任を果たします。

B7. 多様な価値観と意見を尊重し、合意と実現が可能なオプションを追求します。

私たちは、多様な、時には相互に対立する価値の存在を意識し、さまざまな立場のステークホルダーの溝を埋め、合意に基づいて選択・実現できるオプションを粘り強く追求します。

B8. 地域社会の合意を尊重します。

私たちは、地域社会の合意が得られたなら、それにしたがい、その範囲の中で問題解決に役立つ知識を探求します。

知識の性格

B9. 判断や意思決定に役立つ知識を重視します。

私たちは、それぞれの地域の問題解決の現場における判断や意思決定に役立つ知識技術を、多様なステークホルダーとの協働と相互作用を通じて生産することを重視します。

B10. 地域社会の生活・生業の現場で活用できる知識を生産します。

私たちは、農林水産業の現場や自然資源を利用する企業活動の中で、資源の持続可能な利用や環境と調和した産業の推進に役立つ知識・技術の開発を重視します。

B11. 持続可能な地域社会の構築に必要な社会技術の開発を進めます。

私たちは、問題解決の道筋を科学的に探究することに加えて、それを実現するために必要な、合意形成の技術や、資源利用と流通などの社会的仕組みの開発を推進します。

B12. 避けるべき事態を明らかにすることに努めます。

私たちは、地域社会の現実の複雑さと不確実性のために、最善の策を見出すことが難しい現状に真摯に向き合い、科学的には不確実な場合でも、どうしても避けるべき状態を合意に基づいて明らかにし、それが生じる可能性と、それを避けるためのオプションを探求します。

知識生産の方法

B13. 説明責任を果たし、地域に開かれた研究を進めます。 私たちは、研究目的や手法、予想されるリスクなどの研究プロセスをステークホルダーと共有して、開かれた研究を進め説明責任を果たします。多様な人々からのアドバイスと批判を糧に、科学研究の質を高めていきます。

B14. 在来の知識や生活の中で培われた知識を重視します。

私たちは、多様な在来の知識、民俗技術、生活知についての知識を深め、科学的な知見と合わせて、地域環境の総合的な理解をめざす新しい科学を構築し、問題解決に役立てていきます。

B15. 地域の多様な主体による知識生産を支援します。

私たちは、一次産業に従事する人々、地域企業など、多様な主体が地域環境に深くかかわる優れた知識技術を生産していることを重視し、このような知識生産活動を支援していきます。

評価と発信

B16. 地域社会の問題解決に役立つ研究を高く評価します。

私たちは、学術的価値を真摯に追求することに加えて、地域社会への貢献を高く評価をする姿勢をもって研究を行い、地域への思いとかかわりを糧に質の高い研究を展開できる、次世代を担う若い研究者の育成に努めます。

B17. 地域社会が培ってきた知識や仕組みを、普遍的な知識に翻訳して発信します。

私たちは、地域に蓄積された在来の知識や社会的な仕組みを普遍的な知識に翻訳し、地域に対する誇りを持って広く発信することによって、地域の活動への評価を高めることを目指します。

③ガイドラインに対する評価と今後の改善

地域と科学者の協働のガイドラインは、地域環境学ネットワークのウェブサイトで公開し、ウェブ上でコメント募集を行っている。また、フィールド研究会、シンポジウムなどを通じて広範な意見とアドバイスを収集することを試みた。しかし、この試みは有効に機能せず、コメントはほとんど集まらなかった。その原因は、おそらくガイドラインの抽象度の高さにある。東京大学大学院生グループの、地域と科学者の協働のガイドラインに関するインフォーマルな討論では、「非常によく考えられている」という評価で一致したという。つまり、私たちはまたしても、「一般的には正しいが、地域の現場では役に立たない」知識を生産してしまったようである。

明らかに、地域と科学者の協働のガイドラインは、現場の視線・日常の中での使いやすさに向けた改善が必要である。平成24年度から始まった総合地球環境学研究所における基幹研究プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」（プロジェクトリーダー：佐藤哲、平成24年4月から5年間）は、地域の多様なステークホルダーによる生態系サービスの順応的ガバナンスを支える科学的研究のありかたと「地域環境知」の生産・流通・活用のメカニズムを、知識ユーザーの視点からの広範な比較研究とメタ分析によって解明しようとするものである。地域環境学ネットワークに集まった事例だけでなく、世界にまたがる多様な事例研究とメタ分析によって、地域社会のステークホルダーが主導する持続可能な地域づくりに向けた活動を支える科学のあり方を詳細に分析する。これによって、地域と科学者の協働のガイドラインは、地域社会の現場で人々の意思決定とアクションのための指針として成熟していくだろう。具体的には、ガイドラインの各項目の優先順位が、それぞれの地域社会が直面する課題の性質に応じて提示されるような形で、地域実社会の現場で有効に活用されるガイドラインの構築を推進していく。

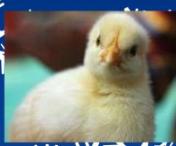
3-3-4. ワーキンググループ

地域環境学ネットワークの規模の拡大と会員の多様化に伴って、ネットワーク内部に特定の課題に関する関心を共有する下部構造が自然発的に生まれてきた。これらのグループは共通の関心を軸にさまざまな新しい活動を展開できるポテンシャルを持っている。そこで、これらの自然発生的なグループをネットワークの中のワーキンググループ（以下、WG）と位置付け、ネットワークとしてその活動を支援していくという戦略を採用した。興味関心を共有する人々が集まることでネットワークにおける活動にインセンティブが生まれることが期待される。また、これらのワーキンググループが中心となって個別の課題解決を目指す研究活動が活性化し、外部資金の獲得などによるさらなる発展が起こることが期待できる。

プロジェクト終了時で、「里海・水産資源管理（オーガナイザー：鹿熊）」、「里山（鎌田）」、「野生動物管理（松田）」、「自然エネルギー（新妻）」、「社会技術（家中）」、「エコツーリズム（佐藤）」および「若手WG（ひよこ組・清水）」の7WGが設立され、さまざまな活動を開始している。特に注目されるのは「ひよこ組」の活動である。このワーキンググループには多くの若手が参集し、フェイスブックなどのメディアを活用して柔軟な情報交流を実現すると同時に、2月にはグループとして初のフィールド調査を金沢大学能登半島里山里海自然学校において12名が参加して実施した。その報告はウェブサイトで公開されている（資料）。ひよこ組の活動がきっかけとなって、レジデント型研究インターンシップの設計が大きく進展した。

若手ワーキンググループ「ひよこ組」

Working Group of Young Scientists



- 各地域で「レジデント型研究者」「協働コーディネーター」「訪問型研究者」等として奮闘中の若手（自称）が集合
- 地域をよくしたい！そのために、自分がどうするかを考える場を
- ひとくちに「レジデント型研究者」と言うけれど、
実際、いろいろ悩みはあるんですね・・・ on Facebook
 - 研究活動を地域づくりにどう活かすか
 - 地元の人との信頼関係づくり
 - 地域活動と研究活動の両立
 - レジデント型研究者の受入体制
 - いつまでここに居る／居られるのか
 - レジデント型研究機関の持続性
 - お金をどうやって集めるか
 - 地域の活性化
 - レジデント型研究者の育成

1

ひよこ組に参加している地域環境学ネットワーク会員の多くは大学院を修了した科学者・専門家の卵である。キャリアパスとしての制度上の研究者にいつの間にか魅力を感じなくなってきた若者達が潜在的に数多く存在している。かつてはその先に、企業に就職するというキャリアパスを通ってきたはずの人たちの中に、田舎や地域に帰って、そこで地域のために何かをしたいと思う人々が増えている。例えば、都市近郊の博物館で常勤の研究者として植物学の研究をしてきた人が、ドロップアウトして自分がフィールドにしていた地域のための働くことを決意し、その地域に住みついでレジデント型研究を行う、などの事例が増えている。既存のシステムの研究スタイルに違和感を覚える若者が、地域の現場に飛びこめる状況が、少しずつ出来つつある。このような若い世代を支え、育成していくために、地域環境学ネットワークが有効なプラットフォームとして機能するはずである。

○各ワーキンググループの概要（公表済みのもの）

里海・水産資源管理

「WG の名称を含め、この概要は暫定的なものです。議論が進むなかで、今後、変わっていくと思います。当面は里海に関して議論したいと考えています。もちろん、水産資源管理に関する話題も歓迎です。「里海」という言葉は、最近よく聞かれるようになりました。日本各地に里海があり、その姿はとても多様です。また、里海づくりの課題も多様で、ある里海会議の成果は、定義、利用、制度、文化、交流、技術という 6 つのテーマに分類されました。2011 年 10 月の地域環境学ネットワーク主催シンポジウム「里海創生のための地域環境学」は、「流通」（交流のテーマ）に注目したものでした。このように、里海づくりには、自然科学、社会科学、人文科学にまたが

る学際的なアプローチが必要になっています。海外でも Satoumi は広まっています。2008 年は上海、2009 年はマニラで Satoumi ワークショップが開かれ、2010 年 CBD-COP10 では Satoumi に関するサイドイベントが少なくとも 4 つ開かれました。今後、特にアジア太平洋で Satoumi はさらに広まっていくと思います。MPA（海洋保護区）も COP10 や海洋生物多様性国家戦略などで重要項目になりました。MPA は里海づくりの有効なツールになると考えられますので、この WG でも議論していきたいと思います。この WG の最初の取組として、2012 年 1 月 20 日に九州大学で、研究会「地域主体の里海づくり」（仮題）をもちます。九州大学・柳哲雄先生の協力により実施できることになりました。WG メンバー以外の会員の参加も歓迎します。」

野生動物管理

「半世紀前には、土地開発、乱獲、環境汚染、外来種など人間活動の影響で、日本の多くの野生動物が激減し、絶滅の危機に瀕していました。その後、禁猟、水質浄化、農薬規制などの取り組みにより、多くの野生動物は回復しつつあります。むしろ、増えすぎて、農林業被害など新たな問題を引き起こし始めています。かつては乱獲をもたらした狩猟者は減り続け、高齢化し、今度は狩猟文化のほうが絶滅の恐れがあるといわれています。特に増えすぎたニホンジカやヤギやカワウは、農林業被害だけでなく、自然植生への食害や土壌流出など、生態系にも負の影響を与えつつあります。地域環境学ネットワークでも、野生動物による被害対策だけでなく、有効利用や保護活動など、地域の取り組みの中での野生動物問題を取り上げ、情報交換を図って参りたいと思います。生物学の視点だけでなく、経済や文化の側面を含めた学際的な議論を深めたいと思います。本ネットワークの行事だけでなく、その他の取り組みも含めた情報交換や企画提案を行います。」

自然エネルギー

「エネルギーは地域のあらゆるいとなみやなりわいに不可欠なもので、地域の 環境・生態系とも深く関わっています。

本 WG では「地域・環境を通してエネルギーを考える」「エネルギーを通して地域・環境を考える」をキーワードに、地域のエネルギーに関することを広く情報交換、意見交換、事例・取組み紹介、知恵の学びあい、技術交流、他の関連団体とのリエゾンなどを行ってはどうかと考えています。

自然エネルギーの中には、水力や太陽光ばかりではなく、薪や炭、草、牛、馬のような動物のエネルギー、そして地域のいとなみ、なりわいの担い手である人間のエネルギーも含まれます。

例えば

ー里山、草原、ヨシ原等のバイオマスの持続可能な利用と生態系とのかかわり

ー2 次林（薪炭林）、草地の施業

ー農林漁業における自然エネルギーの利活用

ー自然エネルギーを活用した地域おこし

ー地域のエネルギーを通した環境教育

ー地域の安全・安心のための自然エネルギーの利用

ー自然エネルギー利用技術

ー自然エネルギー利用のための社会技術

ー自然エネルギーを利用する地域の伝統技術

ー自然エネルギー利用の環境効果

ー自然エネルギー利用の環境負荷・環境破壊

ー環境共生社会

などがあげられますが、この限りではありません。

実績は問いません。地域の自然エネルギーを考えよう、エネルギーを通して 地域を考えよう、あるいはそのようなことに興味がある、という方々の参加を歓迎します。」

エコツーリズム

「生態系サービスの持続可能な管理と活用のためのさまざまなアプローチ（たとえば自然資源管理・生態系管理など）の一つとして、また持続可能な地域づくりのための手法の一つとして、エコツーリズムを位置付けたいと思います。この二つの要求を同時に満たすことが重要だと考えます。このワーキンググループは、世界各地でエコツーリズムの推進を通じた生態系サービスの管理と持続可能な地域づくりに取り組み、さまざまな事例を収集・分析して、その多様性から相互に学び、新しいアイデアを共有することを目指します。マーリングリストや研究会を通じて、エコツーリズムの推進から地域資源の 価値を発掘していく仕組み、自然環境への配慮や自然資源の持続可能な管理への取り組みから付加価値を創出する仕組み、持続可能な地域づくりの物語がエコツーリズム資源となっていく仕組みなどを考え、各地の現状の中で活用できる持続可能な選択肢を収集して共有したいと思います。多様な事例の収集を通じて、世界各地の人々がそれぞれの置かれた状況の中で、主体的に選択して活用できる「エコツーリズム推進のためのツールキット」を構築していけば楽しいと思います。」

若手「ひよこ組」

「ひよこ組に集まる若手メンバーは、全国各地で地域に入りこみ、あるいは自分が育った地域で、地域のために自分に何ができるのかを考えながら、日々格闘しています。

問題解決型研究や、多様な主体との協働による地域づくりなど、新しい課題への取り組みの最前线での経験と課題を持ちより、研究者として、地域づくりの担い手としての実践に活かすことを目標としています。

今後は、メンバーのフィールドを訪問する研究会、「季刊ひよこ」（仮）の発行などを行う予定です。Facebook でも情報交換・議論も行っています。」

3-3-5. 参加型評価システム

① 参加型研究評価システムの考え方

地域環境にかかる課題の解決に直結した研究成果を、地域のステークホルダーの視点と科学者の視点の両面から評価する参加型評価システムを構築して、地域の固有性を正面から向き合う研究を進めているレジデント型研究者などの研究に光を当て、これらを正当に評価することで科学者コミュニティの変容を促すことを目指した。これについては、(1) 知識を生み出し活用するための 17 条に対応した研究評価と、(2) 問題解決のネットワークづくりのための 17 条に対応した地域の活動評価、の 2 原案をもとに具体的な設計を進めた。(1) は地域のステークホルダーが問題解決に活用できる知識を生産する科学と、知識の活用と持続可能な社会の構築に貢献する社会のしくみの探索の成果を、ステークホルダーの視点と科学者の視点の両面から評価するしくみをつくり、問題解決型の研究を支援することを目的とするものである。そのために、地域と科学者の協働のガイドラインをベースにステークホルダーによる査読基準の設計を進め、平成 23 年 12 月にステークホルダー参加型のウェブジャーナル「地域環境の未来」のサイトを構築して原稿募集を開始した。現在、複数の著者から投稿の意思が示されており、24 年度には第 1 号の論文を

掲載できる見込みである。

参加型評価システムの（2）については、地域の中でステークホルダーと科学者・専門家の協働によって、効果的に地域環境の保全と持続可能な社会の構築に向けた取り組みを実施し、成果を挙げている事例を、多様な会員の参加を得て評価する仕組みを目指して、優れた協働活動を支援するための顕彰制度の設計を試みた。しかし、これについてはプロジェクトメンバーおよび領域アドバイザーから多くの異論が噴出した。このような顕彰制度が新たなトップダウンの権威づけによる多様な地域活動の差別化をもたらす可能性があることが、特に深刻な懸念である。顕彰制度の中心となる評価基準について、協働のガイドラインはあくまでも指針の一つであり、地域活動の価値を評価する明瞭な基準を提供するものではないことが指摘された。明瞭な評価基準がない今までの恣意的な顕彰制度を構築してしまうことへの懸念から、24年度においては現状の設計による顕彰制度の性急な導入は見送ることとした。地域活動の全体を評価するのではなく、原点に立ち返り、あくまでも地域の問題解決に貢献する科学を評価することが必要であるとの認識に立ち、ステークホルダー参加型ウェブジャーナルに投稿された原稿の中から「Impact Stories」を選定して表彰するなどの新しい仕組みを、詳細な評価基準の構築のもとに検討していくこととしている。平成24年度から総合地球環境学研究所において、本研究開発プロジェクトを効果的に継承する形で新しい大型研究プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」が開始されたので、その中でこれまでの蓄積を生かして、知識の生産と流通を基軸とした地域社会の順応的ガバナンスの視点から、地域課題の解決に直結する科学の評価システム構築を推進していく。



② 「地域環境の未来」の概要

「地域環境の未来」は地域環境学ネットワークが運営するウェブジャーナルであり、ネットワーク会員による、地域環境にかかわる論文、活動報告、解説を掲載する。

地域環境学ネットワークは、地域の多様なステークホルダーが主役となった環境保全と持続可能な地域づくりへの取り組みを、しっかりとサポートできる科学を追求している。それぞれの地域に固有の条件に対応し、地域の方々の納得や合意形成に役立ち、利害や関心が異なる多様な人々が共有できる指針やアイデア、技術を提供することができれば、そのような知識技術は地域のみなさん自身による持続可能な未来への取り組みに大きく役立つだろう。「地域環境の未来」は、このような地域密着型の知識技術に関する論文、地域の方々の意思決定や具体的な活動に役立つさまざまな分野の知見についての解説、そして、このような知識技術を活用した地域における活動の報告を掲載していく。

③ 「地域環境の未来」の特徴

1. ステークホルダーのための要約

「地域環境の未来」に掲載される論文と解説には、「ステークホルダーのための要約」が義務付けられる。専門家ではないけれども、論文や解説に含まれる知識技術を地域で活用する立場にある「知識ユーザー（ステークホルダー）」が、記事に含まれる知識技術を活用しやすくなるように、わかりやすくまとめた要約である。これによって、知識技術が地域の活動の現場で活用されることを促すことが、「地域環境の未来」の大きな特徴である。

2. ステークホルダーによる査読

「地域環境の未来」に掲載されるすべての記事（活動報告を含む）は、その内容についての、複数のレフェリーによる審査（査読）を経て、掲載する価値があると認められたものである。このような査読は、ふつうはそれぞれの分野に詳しい専門家によって、科学的な正確さや価値に基づいて評価がなされる。地域の人々に活用される知識技術や、その活用の事例を提供する「地域環境の未来」の場合は、科学的な価値以外に、知識技術を具体的な現場で活用する人々にとって意味があるか、使えるか、という視点からの評価が必要となる。そのために、論文と解説の場合は「ステークホルダーのための要約」、活動報告については記事全体を、専門家ではないステークホルダーのレフェリーに査読していただく仕組みを作っている。これによって、科学的な価値に加えて、ほんとうに地域の課題の解決に役立つ可能性がある記事を掲載することができると考えている。

3. 査読意見の公開と掲載後の意見交換

「地域環境の未来」はウェブジャーナルなので、紙面の制約は存在しない。そこで、掲載された記事すべてについて、査読者によるコメントと、それに対する著者の返答も公開して、透明性の高い審査を行うように工夫した。「査読基準」も「原稿募集」ページで公開している。また、ウェブのインターアクティブな性質を十分に生かし、記事が掲載されたあとも、読者がコメントを記入し、著者と議論できる仕組みを構築した。詳しくは、各記事にある「コメント」欄を参照されたい。「地域環境の未来」に掲載された知識技術は、このような議論を通じてさらに磨かれ、改善され、新しい研究や活動の火種となっていくことが期待される。

4. 「専門家」「ステークホルダー」「レジデント型研究」の定義について

これについては下記のウェブサイトを参照されたい

地域環境学ネットワークウェブサイト

(<http://lsnes.org/index.html>)

および科学技術振興機構・社会技術研究開発センター研究開発プロジェクト「地域主導型科学者コミュニティの創生」ウェブサイト
(<http://localsci.org/index.html>)

5. 著作権について

本サイトに掲載された全ての記事の利用については、Creative Commons 表示-非営利-改変禁止 2.1 日本 License の規定にしたがうものとする。具体的には、原著者のクレジット（氏名、タイトルと URL）を表示し、かつ非営利目的であり、そして元の記事を改変しないことを守れば、すべての記事を自由に再配布できる。詳しい利用条件に関しては以下のライセンスを参照されたい。
(<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/2.1/jp/legalcode>)

④ 参加型研究評価のための査読基準

「地域環境の未来」の設計の思想は、その査読基準に体現されている。「査読基準」の全文を記載する。

「地域環境の未来」査読基準（「地域環境の未来」編集委員会）

（基本的な考え方）

「地域環境の未来」の査読は、地域の環境課題の解決と持続可能な発展に役立つ知識技術、地域の方々に参考にしていただける各地の活動事例についての多様な報告を、可能な限り幅広く掲載することを目指すものです。したがって、査読は基本的に、知識ユーザーであるステークホルダーの視点から記事の内容を改善し、掲載できる水準を可能な限り達成することを目指して行われます。査読にあたっては、以下の各項目について査読者の見解を開示し、具体的な改善点を明確に記述することによって、記事の内容の改善に資することが求められます。最終的に掲載拒否の判断にいたる場合には、正当かつ説得力のある根拠が必要です。

（査読者の選考と査読過程の公開）

論文および解説については、編集委員会が専門分野、活動内容などを考慮して選考する専門家 2 名が本文全体（「ステークホルダーのための要約」を含む）を査読し、知識ユーザーである関連分野のステークホルダー 1 名が「ステークホルダーのための要約」を査読します。活動報告については、専門家 1 名、ステークホルダー 1 名が査読を担当します。査読者は原則として実名を公開します。また、査読意見と編集委員会の判断、およびこれに対する著者の応答も、採択された原稿とともに公開します。これらの措置は公平かつ透明性の高い査読を実現するためです。

（掲載基準）

下記の各項目について 10 点満点で評価を行い、全査読者の評価の平均点が 7 点以上の特に優れた項目が複数あることを条件として、編集委員会が個別のコメントの内容を加味して総合的に掲載の可否を判断します。査読者は、各項目について評価を行うだけでなく、必要に応じて具体的なアドバイスを行い、原稿の改善を促すことを求められています。編集委員会は必要に応じて、査読者の見解をもとに改善のためのアドバイスを行います。

1. 論文および解説

1-1. 科学者・専門家による査読基準

1-1-1. (科学的な水準)

論文と解説の科学的水準は、記述や内容が地域の多様なステークホルダーによる意思決定の判断基準として信頼できる妥当性を達成していることを基準とします。科学的新規性・革新性を問うものではありません。また、地域のステークホルダーによる取り組みなどの価値を、普遍的な科学に翻訳して発信する試みも歓迎します。

1-1-2. (研究の設計と説明責任)

地域に固有の歴史、文化、在来の知識技術を十分に踏まえ、地域がかかえる問題の構造や価値観、意思決定システムに整合するように研究が設計されていることが重要です。地域のステークホルダーの方々が、地域社会の現状の中で具体的に活用できる知識技術が探求されていることを重視します。地域のステークホルダーとの情報共有と合意のもとに研究が行われ、本ジャーナルへの掲載と並行して、研究成果が地域のステークホルダーに共有されるための、なんらかの方策が講じられていることが求められます。

1-1-3. (ステークホルダーのための要約)

「ステークホルダーのための要約」は、知識ユーザーによる理解・解釈・活用を助けるように、研究成果をわかりやすく解説している必要があります。また、地域の環境課題の解決と持続可能な発展に具体的に貢献できる知識技術が簡潔かつ明瞭に記述されていることが重要です。

1-1-4. (知識技術の性質)

地域のステークホルダーによる判断や意思決定に科学的な根拠を与える内容、生活と生業の現場で活用できる知識技術、環境課題の解決と持続可能な社会の構築に役立つ社会技術など、ステークホルダーによる課題解決に貢献できる内容が含まれている必要があります。

1-1-5. (不確実性と適用範囲)

研究成果に内包される不確実性と、解明が不十分な点が、明確に意識され、説明されている必要があります。また、成果が適用可能な範囲が説明され、異なる条件への一般化の可能性についても検討されていることが求められます。

1-2. ステークホルダーによる査読基準（ステークホルダーのための要約）

1-2-1. (内容のわかりやすさ)

「ステークホルダーのための要約」は、専門分野になじみが薄いステークホルダーにとっても、専門知識が十分でなくても容易に理解・活用が可能であるように、わかりやすく書かれている必要があります。

1-2-2. (説得性と納得性)

知識技術の内容が十分な根拠と説得力をもって論理的に説明され、多様なステークホルダーが結論や展開されているアイデアについて納得できる可能性をもつことが必要です。

1-2-3. (有効性)

ステークホルダーの目から見て、現場での活動指針となるアイデアやビジョン、地域の環境や

社会の現状理解を助ける知見、具体的な活動に活用できる知識技術などが、少なくともひとつ以上、提示されていることが必要です。

1-2-4. (合意可能性と実現性)

多様な価値観や利害をもつステークホルダーが、仮に時間がかかっても受け入れ、実現できる可能性が認められること、意思決定や合意形成に役立つツールやビジョンが示されていることを重視します。

1-2-5. (解明が不十分な点、応用の限界)

はっきりわかっていない点、不確実な点について、明瞭に意識され、説明されていること、研究成果を応用できる範囲、知識技術の不適切な活用の可能性について、検討されていることが必要です。

2. 活動報告（専門家・ステークホルダーの査読者に共通）

2-1. (クリエイティビティと独創性)

地域社会が直面する社会経済的な制約、自然資源利用における困難、人材不足、価値の多様性と合意形成の困難などの制限要因を的確に把握し、それらを克服するための活動が展開されていることが重要です。このような活動のアイデアやプロセス、そこに活用された手法や技術、活動の成果を報告し、それぞれ固有の課題を抱えるさまざまな地域社会において、活動の参考となりうる知見を提供することが不可欠です。

2-2. (多様なステークホルダーの協働)

多様なステークホルダーがそれぞれの立場から参加・協働して成し遂げられた活動成果であることが、明瞭に示されている必要があります。異なる立場や考え方をもつ人々を受け入れ、多様な考え方やアイデアを取り込んでいることがたいせつです。

2-3. (硬直化をもたらさない柔軟な取り組み)

狭い視野や価値観に縛られることなく、地域社会の多様なアクターの相互関係や差異を深く理解して、多様なステークホルダーが現実に合意可能なアイデアや、協働して実現可能な目標や手法を大胆に取り入れて活動を推進していることが、はっきりと示されている必要があります。

2-4. (人材の活用と育成)

地域のレジデント型研究者やさまざまな立場のトランスレーターなど、持続可能な社会の構築に役立つ多様な知識技術を有する地域の人材を発掘し活かしていること、将来の地域社会の中核となる世代の育成に向けたビジョンを持ち、活動に人材育成の側面を取り入れていることが必要です。

2-5. (活動の限界と将来の課題の認識)

報告されている活動で達成できたことだけでなく、残された未解決の課題と将来発生しうる新たな課題について、明瞭に自覚され、説明されている必要があります。また、これらを克服するための将来のビジョンが提示され、引き続き検討すべき具体的な課題と実施すべき活動が示されていることが重要です。

2011年12月13日

3-3-6. レジデント型研究インターンシップ

レジデント型研究インターンシップは、は学術研究のための現地調査ではなく、将来のレジデント型研究者としてのキャリア形成のためのインターンシップとして位置づけられるものである。インターンシップの実施期間は1か月程度を標準とし、大学院におけるインターンシッププログラムの規定に応じて、受入機関との調整のうえ設定する。地域環境学ネットワークは、応募者と受入機関の間にたち、コーディネートを行う。応募は常時受け付けており、大学院におけるインターンシッププログラムの一環として実施していただくことを期待している。

プロジェクト終了時で、新潟県十日町市「十日町市立里山科学館キヨロロ」、福島県天栄村「EIMY湯本地域協議会」、石川県珠洲市「金沢大学能登学舎」、兵庫県豊岡市「ハチゴロウの戸島湿地（豊岡市役所・コウノトリ湿地ネット）」、徳島県上勝町「環境とまちづくり／かみかつ里山俱楽部」、高知県いの町「NPO法人土佐の森・救援隊」、長崎県対馬市「対馬市役所上県地域活性化センター」、沖縄県石垣市白保「WWF サンゴ礁保護研究センター」の8機関がレジデント型研究インターンシップを受け入れることを承諾している。今後、受け入れ機関と参加大学をさらに充実させていくことで、地域に定住してレジデント型研究者として、地域のステークホルダーによる環境問題の解決と持続可能な地域づくりへの取り組みをサポートできる人材の育成をはかる。

レジデント型研究インターンシップが、参加した学生と受け入れ機関・研究者の双方に与えるインパクトを示すものとして、細貝瑞季(京都大学大学院地球環境学舎 環境マネジメント専攻 修士課程2年)によるインターンシップ報告書（受入機関：対馬市上県地域活性化センター・実施期間：2012年7月19日～2012年8月16日）を以下に示す。

インターンシップ報告書

〈対馬でのインターンシップを通して感じたこと〉

1か月のインターンは、対馬で去年から地域作りに取り組まれている生態学者の木村さんから、レジデント型研究者として必要な姿勢や地域とのかかわり方を学ぶということが主な目的でした。1か月では地域の全体像がざっくりつかめた程度で、ほんのさわりの部分のみを見ることができたくらいです。そしてお客様であったので、みえていた部分はかなり限られていたといつてもいいでしょう。

それでも対馬はとても魅力的なところでした。日本の神話にててくるような景色。太古から脈々と続く歴史の息吹。海と山の恵みを受けながら自然の中で暮らしてきた、人々のエネルギー。私にとって対馬は、神々が息づく島であり、そこに暮らす方々の祈りによって支えられていると感じました。

印象に残ったのは、木村さんが拠点とされている上対馬の志多留地区で、集落を歩きながらおっしゃった、「ここでなら自分の一生をかけて、やりたいことができると思った」という一言です。対馬の自然や文化に触れ、そこで活動されている木村さんとのお話を通じて、自分が一生をかけてできることはなにか、なにをしたいのかを見つめなおす機会になりました。木村さんが私と同じ女性で、しかも年もそれほど離れていないということも大きかったと思います。しなやかでありながら力強い木村さんに、お会いできたことは私の宝となりました。



実はインターン生として対馬に入る前には、今後数年間は海外で経験を積んでこようと思っていました。今まで開発途上国とかかわる仕事がしたい、という思いがあったからです。その思いも、深い根っここの部分では変わっていませんが、外部経済に完全に依存している現在では、私自身にとって私が言うことがとてもうすっへらく感じてしまっているのです。まずは自分の衣食住を自分で賄える領域を増やしたい。そのためにはそれなりの技術と経験が必要です。この数年間、まずは自分の足元の日本で、基礎を作っていくたいと考えています。そしてご縁のある地域において、少しでも何かの役に立ちたい。

私は特定の専門性がなく、博士号を持っていませんし、研究者としてのキャリアもありません。その点では研究の成果を地域に還元することは難しいですし、「研究者」として地域に貢献することはできません。レジデント型研究者というものが、アカデミックなバックグラウンドを持たなければならないというのであれば、今の私の力量ではレジデント型「研究者」として活動することは無理でしょう。また、木村さんは研究者として培ったスキルを生かされて活動を行っていますが、現場でされているのは研究ではないため、なにをもってレジデント型研究者というのか、まだもやもやしている部分はあります。





一方で、経験のない若輩者でも、よそ者という立場を活用してなにかしらできることはありそうだという実感を対馬で得られることができました。地域に居住しながら、背伸びしないで今の私にできることをやっていきたいと思います。どこまでなにができるのかは、実際に地域に入らせてもらってからみえてくるはずです。

また、今後やはり専門性を深めるために博士課程に進みたい、となったときにも、地域で積んだ経験やものの見方は役に立つでしょう。それとも、もしかしたら私の行きつく先はレジデント型の「研究者」ではない、なにかほかの違ったものなのかもしれません。それが何年後になるのか、期限の設けられないことではありますが、やれることを一歩一歩、精一杯やりたいというのが今の正直な気持ちです。



私はこれから、都会ではなく、地方の地域に入らせてもらうことになります。そうすると、田舎で飢え死にすることはないけれども、現実問題として保険料や年金を支払うだけの稼ぎは得なければならない、ということが自分自身の課題としてリアルなものになってきました。まずはそこをクリアしていくこうと考えています。

最後に、この場をお借りし、私を快く受け入れてくださった対馬市役所・上県地域活性化センターのみなさま、インタビューを引き受けてくださった対馬市のみなさま、非常に忙しい中本当によくしてくださった木村さん、地域環境学ネットワークおよびJST-RISTEX研究開発プロジェクト「地域主導型科学者コミュニティの創生」のみなさまに心からのお礼を申し上げたいと思います。貴重な機会を与えてくださいり、どうもありがとうございました。



受入担当者のコメント

木村幹子（対馬市上県地域活性化センター）

〈インターンの業務内容について〉

インターンとして受け入れることになった細貝さんは、養蜂の伝統的技術やそれに関わる信仰や文化などの研究をしていたため、対馬の伝統的な養蜂の研究をしたいという希望があった。そこでインターンの活動は、細貝さん自身の養蜂研究にもプラスになる形で、今後対馬の地域おこしに必要となる情報を整理してもらうことにした。それに加え、私が現在行っている業務のサポートをしてもらうことで、地域おこしの実際を少しでも知ってもらうことを目的とした。

以下に実際にインターンとして実施してもらった業務内容を記す。

1. 対馬の養蜂に関する技術体系の整理

対馬の養蜂家の自宅に1週間ほどホームステイし、養蜂家へのヒアリングを通して、養蜂技術、年間スケジュール、蜜源植物の種類や分布、その変遷、対馬の養蜂業の課題などを整理し、報告書としてまとめてもらった。また、対馬野生生物保護センターで、夏季実習の学生の前で、調査結果を発表してもらった。

2. 対馬の稲作体系の整理とツシマヤマネコの生息環境との関連性

全国的に、農薬によるハチへの影響が指摘されている。対馬での状況把握のため、農協が作成し

ている栽培暦をもとに、実際に数名の稻作農家にヒアリングを行い、使用している農薬やその散布回数などのデータをとってもらった。また、ツシマヤマネコの水田利用状況を調べるために、圃場周辺の林道に設置している自動撮影カメラのデータ回収やデータの整理をしてもらった。

3. 勉強会への参加

私が市に働きかけて、自然環境推進室と共同で実施している「生物資源の適切な利用と管理」の勉強会に参加してもらったり、講師の先生の案内に同行してもらったりした。

4. 木村の田んぼの手伝い

インターンとはあまり関係ないのだが、私が借り受けている小さな田んぼでの米作りを手伝ってもらった。除草作業、防獣柵の設置、罠の設置、水漏れ箇所の補修等。

〈インターンの受入を通じて得た、新たな視点〉

私は、対馬に移住する前は、進化生態学の研究者として、生態学の立場から持続可能な社会作りに関する仕事をしていた。細貝さんは一方、文化人類学の背景をもち、ネパールやフィリピン、インドネシアなど、日本のみならず、様々な地域に飛び込んでいって「人間」の側から地域を見て来た人だ。今回、細貝さんを受け入れて、同じ対象を二つの異なる視点から見ることが出来たことが、一番の成果だったよう思う。細貝さんが重視しているのは、その地域に残る「伝統知」。伝統知とは、情報のグローバル化が進む前に醸成された技術や知識であるため、その地域の気候条件、土壤状態、動植物相といった生態学的要因、災害などの発生状況、歴史…そういったものをすべて含んだ上で形成されたものである。その土地では最良のものが他の土地で適用できるどうかはわからない。逆に、国際的に「最良」「最先端」である技術が、その地域でも期待された効果を発揮するか、全く保証が無い世界。細貝さんの視点を通して、情報のグローバル化が行き過ぎて、技術や文化の均一化が進んでしまう前に、こうした伝統知を記録していくことの重要性を理解した。そういう意味では、生態学と文化人類学は非常に相性が良い学問であり、アカデミックな世界でも、もっと連携する必要があるのではないかと思った。

また、細貝さん自身が、海外の田舎に入り込んで現地の方々とコミュニケーションを取りながら活動して来た経験が豊富であるためか、地域にとけ込む姿勢やその技術が非常に優れているな、と感じた。一言で言えば経験値が高い、ということだが、単に経験して来たことの量が多く質が高いということだけではなく、それをきちんと自分で噛み砕き活かしてく力とか、経験に対する欲の強さが、「経験値」として細貝さんの力になっているのだと感じた。私自身がその姿勢から学ぶことが多かったと思う。

〈最後に〉

インターンとして、1ヶ月という短い期間ではあったが、対馬の地域おこしに関わっていただき、同じ問題意識や夢を共有でき、それを語り合える仲間が出来たことは、私にとって非常に大きな収穫だった。自分一人では、時々「本当に実現できるのだろうか」とか「方向性は合っているのだろうか」とか、不安に思うこともあったが、細貝さんに「面白い!」「スゴイ!」「一緒にやりたい」といってもらえたことで、自信やヤル気をもらったり、実現した時の具体的なイメージも浮かぶようになった。一応、受入機関としてこのプロジェクトに関わったわけだが、そういう点で、私の方が恩恵をうけている。この場を借りて、このような機会を与えてくださった、地域環境学ネットワークおよびJST-RISTEX 研究開発プロジェクト「地域主導型科学者コミュニティの創生」に感謝を申し上げたい。

3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

研究開発終了後は、地域環境学ネットワークは総合地球環境学研究所において平成24年4月から開始された基幹研究プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」（プロジェクトリーダー：佐藤哲、平成24年4月から5年間）における研究基盤として機能しつつ、その活動をさらに活性化していく予定である。この研究プロジェクトは、地域の多様なステークホルダーによる生態系サービスの順応的ガバナンスを支える科学的研究のありかたと

「地域環境知」の生産・流通・活用のメカニズムを、知識ユーザーの視点からの広範な比較研究とメタ分析によって解明しようとするものである。地域環境学ネットワーク参加者による知識生産と活用の事例の多くが、このプロジェクトの事例研究と社会実験のサイトとなっている。また、それに加えて総合地球環境学研究所のこれまでの研究サイト、世界各地の多様なレジデント型研究者の研究成果を含めた全世界規模の比較研究によって、本研究開発の成果をグローバルな視野に拡大できると考えられる。また、地域環境学ネットワークの会員の多くが新しいプロジェクトのメンバーとなり、地域の知識ユーザーの視点からの科学的知識生産の分析を実施することになる。このような形で本研究開発の成果が新たな研究の重要な基盤となることで、地域からの問題解決を支える知識生産を推進する新しい科学者コミュニティをさらに拡充できると考えている。

3-5. プロジェクトを終了して

日本各地の地域社会で、地域環境にかかわる課題解決のための研究に孤軍奮闘しているレジデント型研究者がいる。彼らが相互に交流し、各地の取り組みを持ち寄って学びあうことができるネットワークがあれば、大きな助けになるに違いない。また、地域課題の解決に尽力したいという意欲を持つ訪問型研究者とレジデント型研究者の協働を、ネットワークを通じて促進できれば、科学者コミュニティ全体に地域に密着した問題解決型研究を拡大していくことができるだろう。



地域のステークホルダーも、ネットワークを通じて科学者を上手に使いこなすためのアプローチを学ぶことができるに違いない。こういった相互交流と学習の場へのニーズは大きいはずだ。このような発想で、2010年3月に、41名の設立発起人を集めて地域環境学ネットワークを設立した。ネットワークは順調に拡大し、プロジェクト終了時で127名の多様な人々が参加している。

この過程で多くのメンバーが、多様な形でネットワークの資源を活用し、研究や活動を進化させていくようすを見ることができた。もちろん、このネットワークに集まる人々は、もともと地域の解題解決に直結する研究や知識構造に対する関心が高い。しかし、実際には多くの参加者が、自分の専門分野や関心以外の領域で、地域課題と向き合うために役立つ多様な知識技術に対する視野を拡大し、いわば地域に役立つ「引き出し」を増やしていくプロセスが起こった。個々の研究者、ステークホルダーが多様な引き出しを身に着け、問題解決の現場における多面的かつ柔軟な対応をとることができるように進化していったのである。また、レジデント型研究を志す若手研究者、大学院生にとっては地域環境学ネットワークが大きな刺激となり、2011年から試行した「レジデント型研究インターンシップ」では、3名の大学院生が地域の現場でレジデント型研究の見習い修行を楽しんだ。この仕組みは大学院におけるインターンシップに新しい選択肢を提供することによって、レジデント型研究を推進できる人材の育成につながるだろう。これらの成果を基礎として、地域の環境課題解決に直結する地域環境知の生産と流通が、どのようにして人々の意思決定や行動の変容を促すか、さらにはそれがどのようにして環境問題の解決と持続可能な社会の構築につながっていくかについて、さらに詳細な分析を行っていくことが大きな課題として立ち現れてきた。

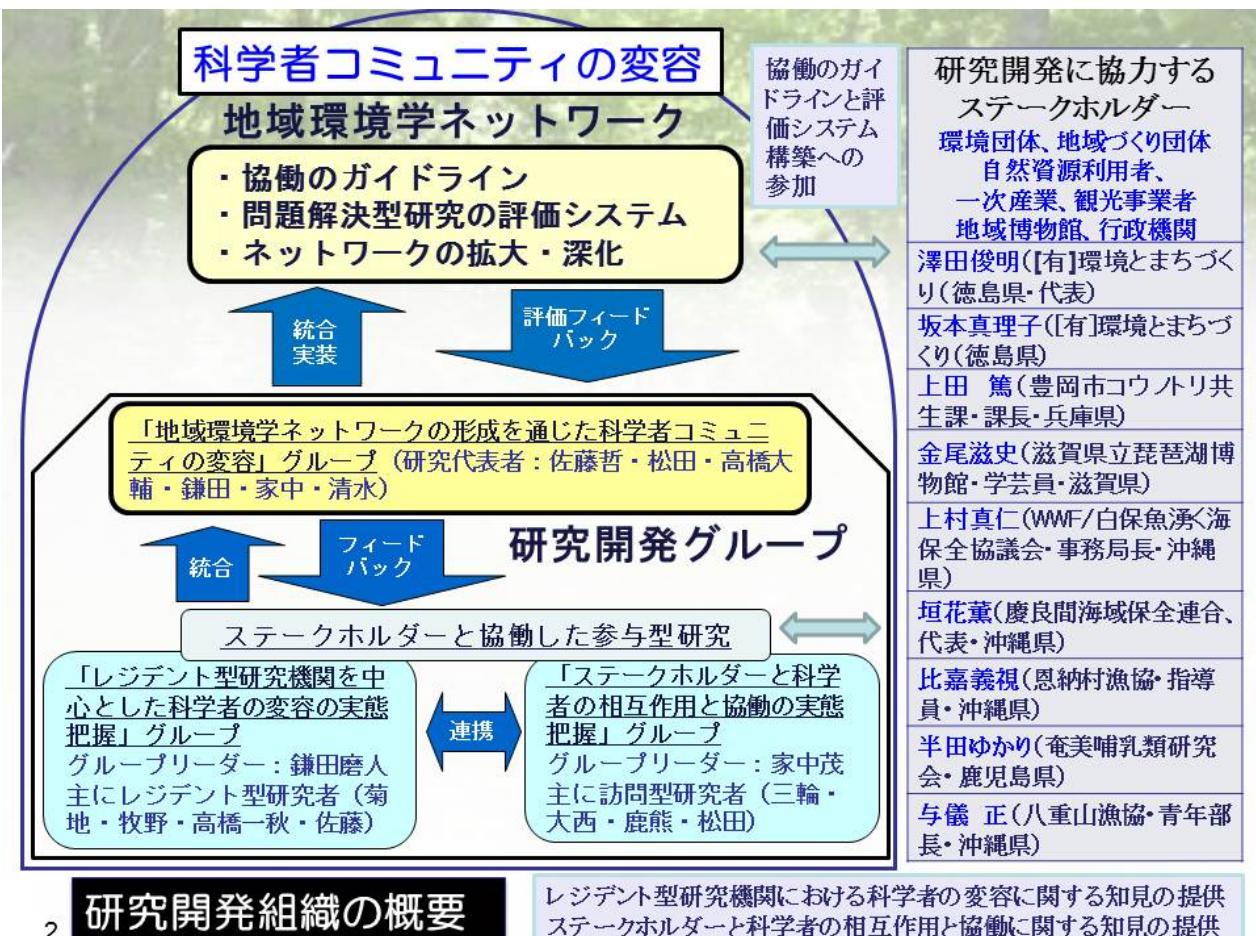
知識の生産と流通を核として、地域からのボトムアップで地球環境問題の解決に挑むための順応的ガバナンスの構築に向けて、さらなる挑戦を続けていくために、平成24年4月から総合地球環境学研究所において、基幹研究プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理（地域環境知プロジェクト）」を開始した。5年間にわたるプロジェクトにおいて、レジデント型研究者などが生産する地域環境知がステークホルダーの間を流通し、課題解決に活用されていくプロセスを通じて人々の行動が変容し、地域社会の順応的ガバナンスが実現するメカニズムを探求する。地域環境学ネットワークが蓄積してきたさまざまな知見と人々のネットワークを基礎に、研究の国際的な展開を実現していく。

地域環境学ネットワークの中で、地域が国際的な枠組みを巧みに取り込み活用する事例を数多く収集することができた。これらの事例から、グローバルな価値や制度を地域にもたらし、地域環境知を普遍知に翻訳して発信する多様な双方向トランスレーターの働きが、異なる階層間の濃密な知識の流通を促していることがわかつてきた。地域環境知プロジェクトでは、これらの階層間トランスレーターによる知の流通と知識基盤の構築メカニズムを解明し、異なる階層間をつなぐ順応的ガバナンスのあり方を明らかにしていく。これによって地域からのボトムアップで広域的な地球環境問題の解決を促す道筋を描き出していきたい。

4. 研究開発実施体制

4-1. 体制

研究開発実施体制



4-2. 研究開発実施者

① 地域環境学ネットワークの形成を通じた科学者コミュニティの変容グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
佐藤 哲	総合地球環境学研究所	教授	地域環境学ネットワーク形成及び協働のガイドラインと評価システム構築	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
松田 裕之	横浜国立大学環境情報研究院	教授	地域環境学ネットワーク形成及び協働のガイドラインと評価システム構築	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
高橋 大輔	長野大学環境ツーリズム学部	教授	地域環境学ネットワーク形成及び協働のガイドラインと評価システム構築	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
清水 万由子	龍谷大学政策学部	講師	地域環境学ネットワーク形成及び協働のガイドラインと評価システム構築	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月
福嶋 敦子	総合地球環境学	研究支援	資料収集・データ整理補助・フ	平成 20 年 10 月

	研究所員	員	イールドワーク事務補助・アウトリーチ補助	～平成 25 年 3 月
--	------	---	----------------------	--------------

② レジデント型研究機関を中心とした科学者の変容の実態把握グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
鎌田 磨人	徳島大学大学院 ソシオテクノサイエンス研究部	教授	徳島大学を事例としたレジデント型研究機関としての地方大学の役割の再検討	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
池田 啓 (故人)	兵庫県立大学自然・環境科学研究所 田園生態系	教授	兵庫県豊岡市における自然再生・地域再生への取り組みにおけるレジデント型研究機関の役割の検討	平成 20 年 10 月～平成 22 年 3 月
菊地 直樹	兵庫県立大学自然・環境科学研究所 田園生態系	講師	兵庫県豊岡市における自然再生・地域再生への取り組みにおけるレジデント型研究機関の役割の検討	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月
牧野 厚史	熊本大学文学部	教授	滋賀県立琵琶湖博物館を事例としたレジデント型博物館による地域環境へのアプローチの分析	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
高橋 一秋	長野大学環境ツーリズム学部	准教授	長野大学恵みの森再生プロジェクトにおける里山再生のためのツールキット構築を通じた実効性ある知識生産手法の分析	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
白川 勝信	芸北 高原の自然館	主任学芸員	地域環境学ネットワーク形成及び協働のガイドラインと評価システム構築	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
澤田 俊明	[有]環境とまちづくり、及び NPO 法人コモンズ（徳島県）	代表及び理事	レジデント型研究機関における科学研究に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
坂本 真理子	有]環境とまちづくり、及び NPO 法人コモンズ（徳島県）	研究補佐員	資料収集・データ整理補助・フィールドワーク事務補助・アウトリーチ補助	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
上田 篤	豊岡市地域戦略推進課	課長	レジデント型研究機関における科学研究に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
金尾 滋史	滋賀県立琵琶湖博物館	学芸員	レジデント型研究機関における科学研究に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
山城 常和	白保魚湧く海保全協議会	代表	レジデント型研究機関における科学研究に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 22 年 3 月
上村 真仁	WWF サンゴ礁センター	センター	ステークホルダーと共同した問	平成 22 年 4 月～

	保護研究センター、白保魚湧く海 保全協議会	長、事務 局長	題解決型研究の評価システム構 築への参加	平成 25 年 3 月
--	--------------------------	------------	-------------------------	-------------

③ ステークホルダーと科学者の相互作用と協働の実態把握グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
家中 茂	鳥取大学地域学部	准教授	ステークホルダーの生活戦略をめぐる科学者、行政、地域産業の相互作用及び市民調査をめぐる多様な研究主体の協働と蓄積された知識の活用	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
三輪 信哉	大阪学院大学国際学部	教授	市民調査をめぐる多様な研究主体の協働と蓄積された知識の活用及びステークホルダーの生活戦略をめぐる科学者、行政、地域産業の相互作用	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
大西 秀之	同志社女子大学 現代社会学部	准教授	在地の知識・技術を核としたステークホルダーと科学者の相互作用と協働	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
鹿熊 信一郎	沖縄県水産業改良普及センター	主幹	水産資源管理をめぐる行政機関による知識生産とステークホルダーとの相互作用の実態把握	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
比嘉 義視	恩納村漁協	指導員	資料収集・データ整理補助・フィールドワーク事務補助・アウトリーチ補助	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
垣花 薫	慶良間海域保全連合、あか・げるまダイビング協会	代表・会長	ステークホルダーと科学者の相互作用と協働に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
半田 ゆかり	奄美哺乳類研究会	代表	ステークホルダーと科学者の相互作用と協働に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月
与儀 正	八重山漁協	青年部長	ステークホルダーと科学者の相互作用と協働に関する知見の提供	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月

4-3. 研究開発の協力者・関与者

氏名・所属・役職（または組織名）	協力内容
赤石 大輔・株洲市役所・自然共生研究員	地域環境学ネットワーク会員

赤嶺淳・名古屋市立大学人文社会学部・准教授	地域環境学ネットワーク会員
秋道 智彌・総合地球環境学研究所・名誉教授	地域環境学ネットワーク会員
新井 章吾・株式会社 海藻研究所・所長	地域環境学ネットワーク会員
穴原 奈都・三宅島自然ガイド／三宅島海洋教室実行委員会	地域環境学ネットワーク会員
あん まくどなるど・上智大学大学院地球環境学研究科・教授	地域環境学ネットワーク会員
五十嵐 実・日本自然環境専門学校・校長	地域環境学ネットワーク会員
五十嵐 翼・同志社大学大学院総合政策科学研究科 総合政策科学専攻 ソーシャル・イノベーションコース・修士課程	地域環境学ネットワーク会員
小松（旧姓池上）真紀・北海道大学サステナブルキャンパス推進本部・コーディネーター	地域環境学ネットワーク会員
伊吾田 宏正・酪農学園大学環境システム学部・講師	地域環境学ネットワーク会員
井田 宏之・社団法人エゾシカ協会・事務局長	地域環境学ネットワーク会員
一條 みろ・対馬野生生物保護センター・普及啓発・地域社会づくり担当	地域環境学ネットワーク会員
大石 高典・京都大学アフリカ地域研究資料センター・研究員	地域環境学ネットワーク会員
稻森 郁子・尊延寺の自然を守る会・会員	地域環境学ネットワーク会員
岩崎 雄輔・福島県立会津高等学校・教諭／EIMY湯本地域協議会	地域環境学ネットワーク会員
上田 篤・豊岡市地域戦略推進課・課長	地域環境学ネットワーク会員
上田 剛平・兵庫県但馬県民局朝来農林振興事務所	地域環境学ネットワーク会員
内田 しのぶ・前（財）北海道環境財団・釧路湿原自然再生普及行動計画ワンダグリンダ・プロジェクト担当	地域環境学ネットワーク会員
及川 敬貴・横浜国立大学大学院環境情報研究院・准教授	地域環境学ネットワーク会員
太田 格・沖縄県水産海洋センター	地域環境学ネットワーク会員
太田 陽子・西日本草原研究グループ	地域環境学ネットワーク会員
大谷 竜・産業技術総合研究所	地域環境学ネットワーク会員
岡野 隆宏・鹿児島大学教育センター・特任准教授	地域環境学ネットワーク会員
落合 雪野・鹿児島大学総合研究博物館・准教授	地域環境学ネットワーク会員
音成 邦仁・タンチョウ コミュニティ・代表	地域環境学ネットワーク会員
垣花 武信・（株）21ザマミ社長／前 慶良間自然保全環境会議 会長／前 座間味村商工会 会長	地域環境学ネットワーク会員
梶 光一・東京農工大学大学院農学研究院・教授	地域環境学ネットワーク会員

梶原 宏之・阿蘇たにびと博物館・館長、学芸員／梶原博物事務所・代表	地域環境学ネットワーク会員
可知 直毅・首都大学東京理工学研究科・教授、小笠原研究委員長／島嶼共生系学際研究環・代表	地域環境学ネットワーク会員
神田 優・NPO 法人黒潮実感センター・センター長理事／高知大学・客員准教授	地域環境学ネットワーク会員
北村 健二・国立環境研究所企画部研究推進室・高度技能専門員（研究企画調整）	地域環境学ネットワーク会員
木村 幹子・対馬市島おこし協働隊生物多様性保全担当	地域環境学ネットワーク会員
金城 達也・北海道大学大学院文学研究科・博士後期課程	地域環境学ネットワーク会員
久保 弘文・沖縄県水産海洋研究センター	地域環境学ネットワーク会員
久米 崇・愛媛大学農学部・准教授	地域環境学ネットワーク会員
藏治 光一郎・矢作川森の研究者グループ・共同代表／東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林・准教授、所長	地域環境学ネットワーク会員
倉本 宣・明治大学農学部・教授	地域環境学ネットワーク会員
小串 重治・グリーンフロント研究所株式会社	地域環境学ネットワーク会員
小林 秀樹・パルシステム生活協同組合連合会	地域環境学ネットワーク会員
近藤 誠司・北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター、大学院農学研究院・教授	地域環境学ネットワーク会員
酒井 晓子 横浜国立大学大学院環境情報研究院・准教授／日本MAB計画委員会・副委員長	地域環境学ネットワーク会員
桜井 良・フロリダ大学大学院 自然資源・環境学部 野生生物生態・保護学科・博士課程	地域環境学ネットワーク会員
佐藤崇範・パラオ国際サンゴ礁センター	地域環境学ネットワーク会員
株)四季工房 代表取締役 野崎 進	地域環境学ネットワーク会員
敷田 麻実・北海道大学観光学高等研究センター・教授	地域環境学ネットワーク会員
島上 宗子・一般社団法人あいあいネット(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク)	地域環境学ネットワーク会員
清水美希・(財) 北海道環境財団・釧路湿原自然再生普及行動計画ワンダグリンダ・プロジェクト担当	地域環境学ネットワーク会員
新海 洋子・環境省中部環境パートナーシップオフィス(EPO中部)	地域環境学ネットワーク会員
菅 豊・東京大学東洋文化研究所・教授	地域環境学ネットワーク会員
洲崎 燐子・矢作川森の研究者グループ・共同代表／豊田市矢作川研究所・主任研究員	地域環境学ネットワーク会員
鈴木 克哉・兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県森林動物研究センター・助教	地域環境学ネットワーク会員

鈴木正嗣・岐阜大学応用生物科学部・教授	地域環境学ネットワーク会員
須藤 明子・(株)イーグレット・オフィス・専務取締役	地域環境学ネットワーク会員
菌 博明・環境ネットワーク奄美・代表	地域環境学ネットワーク会員
田内裕之・森林総合研究所四国支所	地域環境学ネットワーク会員
高橋 俊守 宇都宮大学農学部附属里山科学センター・特任准教授	地域環境学ネットワーク会員
竹内 周・株式会社井ヶタ竹内・常務取締役	地域環境学ネットワーク会員
谷口 洋基・阿嘉島臨海研究所・研究員	地域環境学ネットワーク会員
土屋 俊幸・東京農工大学大学院農学研究院・教授	地域環境学ネットワーク会員
手塚 賢至・屋久島生物多様性保全協議会・会長	地域環境学ネットワーク会員
寺林暁良・農林中金総合研究所・研究員／北海道大学大学院文学研究科・博士後期課程	地域環境学ネットワーク会員
東梅 貞義・WWF ジャパン・自然保護室室長	地域環境学ネットワーク会員
遠井 朗子・酪農学園大学環境システム学部環境共生学類・准教授	地域環境学ネットワーク会員
徳庄 博美・若狭森林（もり）の会・代表	地域環境学ネットワーク会員
富田（星）昇・日本 EIMY 研究所・主任研究員／EIMY 湯本地域協議会	地域環境学ネットワーク会員
富田 涼都・静岡大学農学部・助教	地域環境学ネットワーク会員
中川千草・総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員	地域環境学ネットワーク会員
中嶋 健造・NPO 土佐の森・救援隊・事務局長	地域環境学ネットワーク会員
永野 昌博・大分大学教育福祉科学部環境分野・講師	地域環境学ネットワーク会員
中村 浩二・金沢大学・学長補佐（社会貢献担当）、環日本海域環境研究センター長、里山プロジェクト代表、教授	地域環境学ネットワーク会員
夏目 ちえ・有限会社 真南風（マハエ）	地域環境学ネットワーク会員
浪崎 直子・国立環境研究所 サンゴ礁学事務局	地域環境学ネットワーク会員
新妻 弘明・東北大学 名誉教授東北大学名誉教授／日本EIMY研究所・所長	地域環境学ネットワーク会員
西崎 伸子・福島大学行政政策学類・准教授	地域環境学ネットワーク会員
西野ひかる・アマモサポートーズ・代表	地域環境学ネットワーク会員
西森 克浩・滋賀県水産試験場	地域環境学ネットワーク会員
二宮 咲子・環境管理センター環境基礎研究所・研究員	地域環境学ネットワーク会員
丹羽 健司・矢作川森の健康診断実行委員会・代表	地域環境学ネットワーク会員
沼田真也・首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域・准教授	地域環境学ネットワーク会員
畠 佐代子・全国カヤネズミ・ネットワーク・代表／	地域環境学ネットワーク会員

東京大学空間情報科学研究センター・客員研究員	
堀口 健夫・北海道大学大学院法学研究科公共政策学連携研究部・准教授	地域環境学ネットワーク会員
藤沢仁子・総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員	地域環境学ネットワーク会員
福永 真弓・大阪府立大学 21世紀科学研究機構エコサイエンス研究所・准教授	地域環境学ネットワーク会員
細貝 瑞季・京都大学大学院地球環境学舎環境マネジメント専攻・修士課程	地域環境学ネットワーク会員
前園 泰徳・勝山市・環境保全推進コーディネーター／東邦大学理学部・非常勤講師	地域環境学ネットワーク会員
牧野 光琢・(独) 水産総合研究センター中央水産研究所	地域環境学ネットワーク会員
増田 泰・公益財団知床財団・事務局長	地域環境学ネットワーク会員
間野 隆裕・豊田市矢作川研究所・総括研究員	地域環境学ネットワーク会員
丸山 康司・名古屋大学大学院環境学研究科・教授	地域環境学ネットワーク会員
三上 光一・農業環境技術研究所・研究員	地域環境学ネットワーク会員
三橋弘宗・兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立人と自然の博物館・講師	地域環境学ネットワーク会員
嶺田 拓也・独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所農村基盤研究領域資源評価担当	地域環境学ネットワーク会員
宮内 泰介・北海道大学大学院文学研究科・教授	地域環境学ネットワーク会員
安田 章人・日本学術振興会特別研究員 PD／東京大学特別研究員	地域環境学ネットワーク会員
柳 哲雄・九州大学応用力学研究所・教授	地域環境学ネットワーク会員
山川 安雄・NPO 法人国頭ツーリズム協会・代表理事	地域環境学ネットワーク会員
山越 言・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授	地域環境学ネットワーク会員
山菅香	地域環境学ネットワーク会員
山野 博哉・国立環境研究所・主任研究員	地域環境学ネットワーク会員
山場 淳史・広島県立総合技術研究所 林業技術センター	地域環境学ネットワーク会員
山本 信次・岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター・准教授	地域環境学ネットワーク会員
山本 伸司・パルシステム生活協同組合連合会	地域環境学ネットワーク会員
湯本 貴和・京都大学靈長類研究所 教授	地域環境学ネットワーク会員
渡辺 雅子・阿南工業高等専門学校地域連携テクノセンター環境研究部門	地域環境学ネットワーク会員

5. 成果の発信やアウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2008年 11月14日 ～16日	第1回フィールド研究会	長野大学	20名	プロジェクトの全体像を共有し、今後の課題と研究開発のロードマップをメンバーで共有すること目的とした。同時に、「長野大学恵みの森再生プロジェクト」における知識生産のありかたなどを題材に、問題解決に適した科学研究のスタイルについて議論を深めた。
2009年 7月10日 ～12日	第2回フィールド研究会	徳島県上勝町 および徳島大学	25名	上勝町のステークホルダーとの共同研究会を行った。上勝町における多様なステークホルダーと研究者の協働の実態と、意見やビジョンの差異を維持しながら協働を進めていくためのネットワーク構造に関する分析を実施した。地域におけるネットワークの活動の重要性と、ネットワークの生成と維持発展におけるハブとなる人材が果たす役割の重要性が明らかになった。
2009年 8月5日 ～8日	第3回フィールド研究会	沖縄県那覇市・石垣市	40名	水産資源管理や自保持続可能な地域づくりのステークホルダーとの共同研究会および懇談を行った。WWF サンゴ礁保護研究センター や、阿嘉島臨海研究所 (AMSL) などその他のレジデント型研究機関が果たしてきた役割の分析を通じて、地域に定住する研究者・専門家がダイナミックな地域の変化を促すカタリスト (触媒) としての機能を果たしていることが明らかになった。
2010年 2月28日 ～3月1日	第2回拡大グループリーダー会議 &ブレインストーミング	東京都内ホテル および RISTEX	20名	地域環境学ネットワークに新たに設立発起人として参加した各地の主体を招いてグループリーダー会議とブレインストーミングを開催して、地域環境学ネットワークのあ

				りかたとビジョンについて議論を行った。地域環境にかかる知識生産のあり方の想像を超える多様性が浮かび上がった。
2010年 6月19日 ～20日	奄美ワークショッピング	奄美市立博物館	14名	奄美地方で地域の環境保全や知識生産に関わる多様なステークホルダーを招き、科学者への期待や不満、科学者の貢献について意見交換を行った。
2010年 9月18日 ～19日	地域環境学ネットワーク設立記念シンポジウム 「地域の環境保全と持続可能な発展に役立つ科学を求めて」	大阪学院大学	100名	地域環境学ネットワークの設立を記念して、ネットワークの理念と意義を多くの方々に紹介すると同時に、協働のガイドライン、参加型評価システムについての議論を行った。
2011年 2月5日 ～6日	公開シンポジウム「視線再生を通じた地域再生－経済と文化の視点から」	豊岡市民会館	60名	自然再生を通じた地域再生への活動の先進地である兵庫県豊岡市において、虹別コロカムイの会、土佐の森・救援隊など、全国の多様な活動を担う主体を招いたシンポジウムを開催した。
2011年 7月3日	公開シンポジウム「地域が国際的な制度を活かすために」	熊本大学	47名	地域に暮らす人々が地域の自然と文化をよりよく理解し、主体的に持続可能な地域づくりをすすめるために、国際的な制度や枠組みを活用しうる可能性と課題について、阿蘇地域など各地の事例から検討した。
2011年 10月16日	公開シンポジウム「里海創生のための地域環境学」	八潮荘（那覇市）	66名	人の手が加わることで、生物多様性と生産性が高まる海を「里海」と呼ぶ。人手を加えることで海も華やぐ関係をどのようにして取り戻すことができるのか。生産・流通や政策の実践にかかる方々と、生活に深く結びついた「里海創生」の課題を検討した。
2011年 1月28日	公開シンポジウム「地域から世界へ - 知床世界遺産から考える地域と世界を結ぶ仕組み」（地球研）	北海道斜里郡斜里町	30名	知床世界遺産や世界各地の取り組みの事例から、豊かな自然環境と調和した持続可能な社会を築くために、世界遺産などの国際的な仕組みを活用する仕組み、地域で培われてきたさまざまな知識を国際的な場

	フィージビリティスタディとの共催)			面で活用していく仕組みを検討した。
2012年 9月 16 日	公開シンポジウム「地域のための科学を求めて…地域環境学ネットワークの歩みとこれから」	京都市	70名	地域環境学ネットワークの活動内容についてふりかえり、海外ゲストからの評価を踏まえて、今後の地域環境学を担う若手による活動報告と今後の展望についての議論を行った。

① 書籍、DVD など

『三田評論』2010年11月号：座談会「特集 生物多様性とはなにか：生物多様性と私たちの生活とのかかわり」(C. W. ニコル・古田尚也・佐藤哲・大沼あゆみ)

『SEEDer』3号（昭和堂）2010年「地域環境学ネットワークの挑戦」佐藤哲

② ウェブサイト構築

地域主導型科学者コミュニティの創生

<http://localsci.org/index.html> (2008年7月12日改訂・移転)

地域環境学ネットワーク

<http://lsnes.org/index.html> (2012年7月12日改訂・移転)

Construction of a Pragmatic Scientist Community Contributing to Stakeholder-driven

Management of Local Environment

<http://localsci.org/jst2en/index.html> (2012年7月12日移転)

Local Science Network for Environment and Sustainability

<http://lsnes.org/english/index.html> (2012年9月26日)

地域環境学の未来（ウェブジャーナル）

<http://oths.biz/future/> (2012年2月7日)

③ 招聘による講演

佐藤 哲

2009年10月31日 兵庫県立コウノトリの郷公園開園10周年記念シンポジウム（パネリスト）
「人と自然の共生できる地域づくり」 兵庫県豊岡市

2009年11月29日 第1回能登総合シンポジウム 「里山里海アクティビティに何を期待するか」 石川県珠洲市

2010年1月30日「地域の取り組みを支えるレジデント型研究機関・石垣島白保の取り組みと地域環境学ネットワーク」 サントリー文化財団シンポジウム「沖縄の環境保全と意思決定一人の移動、環境・文化の関わり」 沖縄県那覇市

2010年6月23日 鳥取大学地域学総説 第2部：講演 「地域環境学ネットワークとは？・・地域環境の保全における科学者とステークホルダーの協働」鳥取県鳥取市

2010年8月24日 独立行政法人科学技術振興機構・社会技術研究開発センター「科学技術と社会の相互作用」プログラム 第3回領域国際シンポジウム「Science in Society -a challenge in Japan」：パネリスト 「地域主導型科学者コミュニティの創生」東京都

2010年12月6日 日本サンゴ礁学会第13回大会・サンゴ礁保全委員会：「科学者とステークホルダーの協働に向けて・・・地域環境学ネットワークがめざすもの」茨城県つくば市

2010年12月11日 琵琶湖博物館フォーラム・住民参加型の生物調査とは何だったのかーその成果、意味と課題：「参加型調査の意味と課題ー地域づくりの視点から」滋賀県草津市

2011年3月11日 川西里山・水辺をつなぐ会（長野県上田市）講演会：「里山・水辺の自然と共生した地域づくりのためにー地域環境学ネットワークの取り組みと全国の事例から」長野県上田市

2011年3月28日 京都大学地域研究統合情報センター・研究会・グローバル環境問題をめぐる政策の動向と課題ー地域社会との接合を目指して：「生態系サービス概念の可能性と課題ー科学と地域の協働に向けた地域環境学ネットワークの取り組みをめぐって」京都府京都市

2011年4月12日 新潟大学超域朱鷺プロジェクト・自然再生学セミナー「自然再生を通じた持続可能な地域社会の構築に向けて：地域環境学ネットワークが目指すもの」新潟県新潟市

2011年5月28日 兵庫県立コウノトリの郷公園シンポジウム「地域づくりのたねとしあわせを国際発信する：ジオパークとコウノトリ、そしてハチゴロウの帰還」パネリスト 兵庫県豊岡市

2011年7月22日 SATREPS Workshop「アフリカ熱帯雨林における人と自然の共存戦略」基調講演 「生態系サービスと地域の持続可能な発展：日本とアフリカから」京都府京都市

2011年8月4日 独立行政法人科学技術振興機構・社会技術研究開発センター シンポジウム震災からの復興を「活力ある街・地域」創りにつなげる～地域の「潜在力」を引き出す社会技術：「レジデント型研究者による長期の被災地復興支援」宮城県仙台市

2011年9月17日 兵庫県立コウノトリの郷公園 コウノトリと共に生きる地域づくり講座第1回：「地域に活用される科学ー地域環境学ネットワークが目指すもの -」兵庫県豊岡市

2011年9月30日 酪農学園大学大学院・環境共生特論：「地域に活用される科学を求めて - 地域環境学ネットワークに見る専門家の役割」北海道江別市

2011年10月21日 大阪大学サイバーメディアセンター・セミナー：「地域環境知の生産と流通によるステークホルダー・ネットワークのダイナミズム」大阪府吹田市

2011年11月17日 北海道大学地球環境科学研究院 第38回北海道・生命数理セミナー：「地域環境知の生産と流通を基礎とした社会的意思決定と順応的ガバナンス」北海道札幌市

2011年12月7日 National University of Singapore NUS and JST Joint Workshop “Climate Change, Disaster Management, & Urban Sustainability STS Approaches to Three Asian Challenges”：“Residential Research and Integrated Local Knowledge Supporting Community-based Adaptive Governance” シンガポール

2011年12月10日 東京農工大学シンポジウム 地域持続性のための野生動物管理を考える～ガバナンスのあり方～「生態系管理と持続可能な地域づくりのためのネットワーク」東京都府中市

鎌田磨人

2011年11月19日 兵庫県立コウノトリの郷公園 コウノトリと共に生きる地域づくり講座第3回：「地域資源を活かす手法」兵庫県豊岡市

松田裕之

2011年6月18日 横浜国立大学生態リスク COE シンポジウム 生態系と人間～地域と描く里山・里海の未来～：「知床世界遺産海域管理計画と地域環境学ネットワーク」神奈川県横浜市

清水万由子

2012年3月21日 韓国・地域財団創立8周年記念シンポジウム 協働と連帶の主体—新しい協同組合を語る：「日本の農村における持続可能な発展と人材育成」韓国ソウル

5-2. 論文発表

(国内誌1件、国際誌0件)

著者、発表論文名、掲載誌名、巻、号、発行年

佐藤哲「流域の視点から自然と向き合う：民俗知と科学の相互作用」『BIOSTORY』15:64-67, 2011

5-3. 口頭発表

①招待講演 (国内会議3件、国際会議0件)

発表者（所属）、タイトル、学会名、場所、年月日など

佐藤哲（長野大学）「生物多様性をなぜまもるのか：生態系サービスと社会」 環境三学会（環境社会学会、環境法政策学会、環境経済・政策学会）合同シンポジウム（パネリスト）：2009年6月28日

松田裕之（横浜国立大学）愛知ターゲットをどう実現するか－COP10の成果と課題－ 公開シ

ンポジウム「生物多様性を守る景観生態学 - 愛知ターゲットの実現を目指して」 景観生態学会
東京情報大学 2011年6月25日

鎌田磨人（徳島大学）：異なる主体の協働による生物多様性保全－地域環境学ネットワークの活動から－ 公開シンポジウム「生物多様性を守る景観生態学 - 愛知ターゲットの実現を目指して」
景観生態学会 東京情報大学 2011年6月25日

②口頭発表 （国内会議 1 件、国際会議 0 件）※①以外
発表者（所属）、タイトル、学会名、場所、年月日 など

Sato T, Takahashi K, Takahashi D, Mikami K, Ando H “**Regeneration of Satoyama Ecosystem Services as an Educational Resource**”, URBIO2010: Urban biodiversity & Design, Nagoya, Japan, May 2010.

④ ポスター発表 （国内会議 6 件、国際会議 4 件）
発表者（所属）、タイトル、学会名、場所、年月日 など

Shimizu, M and T. Sato “Practices of local science for regeneration of ecosystem services in networks of experts and stakeholders”, URBIO2010: Urban biodiversity & Design, Nagoya, Japan, May 2010.

Takahashi D, Ide Y, Takahashi K, Mikami K, Ando H, Sato T “**Effects of small reservoir pond on improvement of Satoyama biodiversity and ecosystem services**”, URBIO2010: Urban biodiversity & Design, Nagoya, Japan, May 2010.

Takahashi K, Takahashi D, Mikami K, Ando H, Sato T “**Environmental Education curriculum for Regeneration and Use of Satoyama Ecosystem Services**”, URBIO2010: Urban biodiversity & Design, Nagoya, Japan, May 2010.

Mikami K, Takahashi K, Takahashi D, Ando H, Sato T “**Environmental Monitoring Using a Sensor Network System in an Attempt of Regenerating Satoyama Ecosystem Services**”, URBIO2010: Urban biodiversity & Design, Nagoya, Japan, May 2010.

大西舞・竹村紫苑・上村真仁・白川勝信・鎌田磨人（徳島大学等）：白保と芸北にみる自然資源の協働管理に向けたプロセス・マネジメント 景観生態学会 東京情報大学 2011年6月25日

竹村紫苑、大西舞 1), 白川勝信 2), 鎌田磨人（徳島大学等）：芸北にみる自然資源の管理に向けた協働のネットワーク・デザイン 景観生態学会 東京情報大学 2011年6月25日

5-4. 新聞報道・投稿、受賞等

①新聞報道・投稿

八重山毎日新聞 2009年9月7日 朝刊 「白保地域づくりで意見交換 科学技術振興機構専門家と住民ら 研究成果を地域還元へ」

八重山日報 2009年9月7日 朝刊 「JSTが石垣島研究会 環境保全研究者のネットワークを

奄美新聞 2010年6月20日 朝刊 「地域主導で「知識」活用を」

産経新聞関西版 2010年9月1日 「地域環境学ネットワーク設立記念シンポジウム「地域の環境保全と持続可能な発展に役立つ科学を求めて」」

熊本日日新聞 2011年7月4日 「世界遺産制度の活用を 熊大でシンポ 阿蘇の取り組み報告」

琉球新報 2011年10月12日 (寄稿) 「『里海』創生のためにーシンポに寄せて」 佐藤哲

沖縄タイムス 2011年10月13日 (寄稿) 「『里海』創生に向けてー恩納漁協の取り組み」 家中茂

②受賞

特になし

5-5. 特許出願

①国内出願 (0 件)

②海外出願 (0 件)

特になし

■引用文献■

Sato, T., Makimoto, N., Mwafuirwa, D., Mizoiri, S. 2008. Unforced control of fishing activities as a result of coexistence with underwater protected areas in Lake Malawi National Park, East Africa. *Tropics* 17 (4):335-342.

佐藤哲. 2008. 環境アイコンとしての野生生物と地域社会ーアイコン化のプロセスと生態系サービスに関する科学の役割. 環境社会学研究 14:70-85

佐藤哲. 2009. 半栽培の環境社会学ーこれからの人と自然 宮内泰介編, 「半栽培と生態系サービスー私たちは自然から何を得ているか」. 昭和堂. pp22-44.

佐藤哲. 2009. 地域社会の中のレジデント型研究機関ー土着的知識体系と科学知をつなぐものー. 鬼頭秀一編, 「環境倫理学」. 東京大学出版会. pp221-226.

佐藤哲. 2011. 流域の視点から自然と向き合う:民俗知と科学の相互作用. BIOSTORY 15:64-67.

資料 1

JST 社会技術研究開発センター・地域主導型科学者コミュニティの創生プロジェクト

地域環境学ネットワーク 設立記念シンポジウム

「地域の環境保全と持続可能な発展に役立つ科学を求めて」



2010年 9/18(土)・19(日) 会場: 大阪学院大学

■9月18日(土)

12:30～ 受付開始: 2号館B1-02 前

13:00～18:30 基調講演・シンポジウム第1部: 2号館B1-02

18:45～20:45 交流会(会費制): 職員食堂



■9月19日(日)

8:30～ 受付開始: 2号館B1-02 前

9:00～10:00 地域環境学ネットワーク総会(会員のみ): 2号館B1-02

10:00～12:00 ポスターセッション: 2号館B1フロア

13:00～17:30 シンポジウム第2部: 2号館B1-02



主催: 地域環境学ネットワーク
http://www2.nagano.ac.jp/sato/network_localscience/index.html

プログラム(1日目:9月18日)

【会場】2号館B1-02

開会あいさつ

13:00～13:10 小林傳司(独立行政法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター
「科学技術と人間」研究開発領域 総括補佐／大阪大学教授)

基調講演

13:10～13:50 佐藤哲(長野大学)

「地域の持続可能な発展に役立つ科学を求めて
—地域環境学ネットワークがめざすもの」



東アフリカ・タンガニイカ湖・マラウイ湖の魚の生態と進化、
および、ニッチ構築と種間相互作用による生態系進化を
研究してきました。環境保全と自然資源管理に役立つ知
識を生産しつつ、その知識を活用して地域住民主体の環
境保全と地域づくりの方策を考える実践的な「地域環境
学」が最近の主な関心で、アフリカの湖から石垣島のサン
ゴ礁、長野の里山まで、さまざまな地域をフィールドに活
動しています。

休憩 13:50～14:00

シンポジウム第1部 14:00～18:30

「地域に役立つ知識とは？ —さまざまな研究のありかた」

14:00～14:05 コーディネーター：家中茂(鳥取大学)



地域資源管理をめぐる意思決定プロセス、権力関係を研究しています。沖
縄、水俣などをフィールドにして、生活の立場からの環境(問題)研究に取
り組んでいます。

14:05～14:40 新妻弘明(東北大)

「地域の固有性に即した問題解決のための科学
—EIMYの研究を通して」

エネルギーの地産地消であるEIMY(Energy In My Yard)の
概念を提唱し、福島県天栄村湯本、宮城県川崎町、長野
県小谷村などでその実践的研究を行っています。



“まわそう風のちからで、土のちからで”
EIMY湯本プロジェクト



14:40～15:15 比嘉義視(恩納村漁協)
「生業の中での研究—漁業者の生活のための
知識技術と海洋環境の保全」

沖縄県恩納村漁協で、モズク、海ぶどうなどの養殖技術開発と産業化に携わってきました。また、サンゴ再生やオニヒトデ除去、赤土流出防止など海域の環境・生態系保全活動にも取り組んでいます。



恩納村漁協
「サンゴ礁の海を育む」活動

15:15～15:50 井田宏之(社団法人エゾシカ協会)
「マイナス資源をプラス資源へ
—エゾシカの有効利用を通じた地域課題の解決」

増え続けるエゾシカの個体数調整策の一つとして有効活用(食べる、使う、着る)に関する活動を10年間行ってきました。これからは、エゾシカを含む自然資源を利用した観光と食をテーマにしたいと思っています。



エゾシカを知り、有効活用する エゾシカ角クラフト教室

15:50～16:25 野崎進(株式会社四季工房)
「企業活動を通じた技術開発と地域社会
—地域工務店の森づくり・地域づくり」

福島県に本社を置き、東京から宮城に拠点を持つ工務店です。全棟、国産材100%、ソーラーハウスの認定を取得したエアバス工法で、大工が一棟一棟手刻みし、漆喰仕上げの家づくりを行っています。



地域材を用いた環境共生型の
住宅づくり

16:25～17:00 松田裕之(横浜国立大学)
「訪問型研究者と地域
—受け入れられ活用される私になるために」

数理生態学を用いて、愛知万博環境影響評価、北海道エゾシカ管理、知床・屋久島世界遺産などの委員を務めながら、生態系管理の具体的な解を提示するために研究を進めています。(社)水産資源・海域環境保全研究会代表理事。



知床海域管理計画／
エゾシカ順応的管理

17:00～17:10 秋道 智彌(総合地球環境学研究所) コメント

地域の資源利用と配分、利害関係者間における協治や資源管理についての研究を実施している。また、「広域アジアにおける地球環境レポジトリの構築と新しい知の創生」に向けたネットワークつくりをこの5年間進め、全国の国公私立大学の機関との連携を強めてきた。その一環として研究連絡誌『SEEDer』を通じた情報発信を行っている。

17:10～18:30 パネルディスカッション

プログラム(2日目:9月19日)

【会場】2号館B1-02 (ポスターセッションはフロアにて)



地域環境学ネットワーク総会 (会員のみ)

9:00～10:00



ポスターセッション

10:00～12:00

第1コアタイム(奇数No.) 10:30～11:00

第2コアタイム(偶数No.) 11:00～11:30



昼食 12:00～13:00

シンポジウム第2部 13:00～17:30

「地域で活躍するネットワーク
—意見や価値観の違いを超えた協働」



13:00～13:05 コーディネーター: 清水万由子(長野大学)

「シンポジウムの概要」

地域の役に立つ研究者をめざして、修行中です。ニュータウンでの地域再生、公害地域再生、ローカルアジェンダ21などの取り組みに参加しながら合意形成プロセスを研究してきました。



13:05～13:40 鎌田磨人(徳島大学)

「かみかつ里山俱楽部にかかる懲りない人々」

「人間が自然にどのように向き合い働きかけてきたのか、それに対して自然がどのように反応してきたのか」というテーマが仕事のベースです。学芸員として8年間過ごした徳島県立博物館で、研究成果を一般の人々に伝えること、地域に還元することの意味や方法について課題をつきつけられました。このプロジェクトでやっていることは、博物館時代にもらった宿題への回答づくりだと感じています。

徳島県立高丸山千年の森
植栽地の様子

16:00～16:10 中村浩二(金沢大学) コメント

運営委員長を務めている「能登半島里山里海自然学校」と「能登里山マイスター養成プログラム」では、廃校を再生した「能登学舎」を拠点として、常駐研究員をおいて、奥能登で活

13:40～14:15 丹羽健司(矢作川森の健康診断実行委員会)
「調べることが人々をつなぐ
—森の健康診断」

大学在学中から有機農業運動に没頭し、農業就業を経て、1980年農林水産省入省。そのかたわら「日本の食糧・農業・健康を考える愛知の会」幹事など食と農の市民運動を経て、「足助きこり塾」「矢森協」「伊勢・三河湾流域ネットワーク」創設にかかわる。現在、矢作川森の健康診断実行委員会代表、矢作川水系森林ボランティア協議会代表。NPOタ立山森林塾で「木の駅プロジェクト」、NPO山里文化研究会で山里の書き書き活動を進めています。



矢作川森の健康診断

14:15～14:50 上村真仁(白保魚湧く海保全協議会)
「地域の活動を支えるカタリスト
—裏方としてのレジデント型研究者」

沖縄県石垣島白保集落において、サンゴ礁保全に資する持続可能な地域づくりに取り組んでいます。また、全国・世界の魚垣を有する地域の連携・交流を図る世界海垣サミットの開催を目指した取り組みを行っています。



しらほサンゴ村
(WWFサンゴ礁保護研究センター)

14:50～15:25 神田優(NPO法人黒潮実感センター)
「住み着くということ
—里海に対する誇りと愛着」

人と海とが共存できる「里海」のモデルを高知県柏島でつくるため、多くの人に海を知ってもらい、共に育んでいくための活動を行っています。定期的な海洋環境調査、自然を実感する体験学習やエコツアーや間伐されたヒノキ枝を使ったアオリイカの産卵床づくりなど、精力的に取り組んでいます。



海の中の森づくり
アオリイカの人工産卵床として間伐材を海底に設置

15:25～16:00 鹿熊信一郎(沖縄県八重山農林水産振興センター)
「行政マン研究者と地域
—使える知識技術の知恵袋」

熱帯・亜熱帯における水産資源管理とサンゴ礁生態系保全を扱っています。最近は、MPA(海洋保護区)や里海に関心をもっています。現在は、沖縄県の石垣島で水産の普及指導員をやっています。また、日本サンゴ礁学会・サンゴ礁保全委員会の委員長もやっています。



八重山海域 MPAによる資源管理

躍する多彩な人材と協力しながら、身近な自然である里山や里海の保全と再生、体験学習、都市と農村の交流事業、さらに環境に配慮した農林水産業を基盤とした地域振興の人材養成を行っています。

16:10～17:25 パネルディスカッション

ポスターセッション

【会場】2号館フロア

コアタイム：奇数No.=10:30～11:00／偶数No.=11:00～11:30

No.	発表者氏名 所属 「タイトル」
1	寺林暁良 農林中金総合研究所／北海道大学大学院文学研究科博士課程 「地域社会による環境管理システムを再構築するために一生態系調査とメタガバナンスの役割ー」
2	三上光一・高橋一秋・高橋大輔・佐藤哲 長野大学環境ツーリズム学部 「情報インフラ整備による里山環境モニタリングの可能性」
3	白川勝信 高原の自然館（北広島町教育委員会） 「住民と研究者が互いの知識を補ってつくる生物多様性地域戦略」
4	永野昌博・伊藤千恵・山岸洋貴・澤畠拓夫・三上光一 十日町市立里山科学館「森の学校」キヨロロ 「市民・観光業者・研究者の3者協働による地域活性化～「里山のめぐみ案内人の会」の挑戦～」
5	高橋大輔・井出悠生・高橋一秋・三上光一・佐藤哲 長野大学環境ツーリズム学部 「森林内水域が里山における生物多様性および生態系サービスの改善に及ぼす効果について」
6	坂本真理子・澤田俊明・大西舞・渡辺雅子 有限会社 環境とまちづくり 「地域環境保全活動における協働形成の予備考察」
7	與儀正 八重山漁業協同組合 「八重山におけるオニヒトデ駆除活動」
8	可知直毅・沼田真也 首都大学東京 「島嶼共生系学際研究環」
9	山場淳史・佐野俊和 広島県立総合技術研究所林業技術センター 「里山人工林の集約化施業に役立つコミュニケーションツールの開発」
10	倉本宣 ¹ ・野呂恵子 ¹ ・三浦寿幸 ² 1明治大学農学部応用植物生態学研究室 2戸田建設株式会社技術研究所 「多摩川支流三沢川における絶滅危惧藻類カワモズケの保全」
11	金城達也 北海道大学大学院文学研究科博士課程 「沖縄・やんばる地域における環境保全と社会の多様性」
12	池上真紀 東北大学大学院環境科学研究科 「里山と薪ストーブユーザーを直接つなぐ「川崎ー仙台薪ストーブの会」』
13	浅川満彦・遠藤 大二 酪農学園大学 獣医学部 野生動物医学センター 「医学・獣医学・保全生態学の学際領域『保全医学』からエコツーリズムにおいて利用される動物の健康をアセスする」
14	渡辺雅子 ¹ ・太田直友 ¹ ・鎌田磨人 ² ・澤田俊明 ² 1阿南工業高等専門学校 2徳島大学 「産官学民協働の“極意”～みなみから届ける環づくり会議をモデルに～」
15	富田昇 東北大学大学院環境科学研究科 「山・湯・人～地域の宝でなりわい・いとなみづくり～「EIMY湯本プロジェクト」」
16	清水万由子 長野大学環境ツーリズム学部 「まちづくりの主体を生み出す～西淀川交通まちづくりプロジェクト～」
17	山菅香 首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学域 「エコツーリズムにおける研究者とガイドの関係性に関する研究－東京都小笠原村父島を事例として－」(仮)
18	佐藤崇範 財団法人黒潮生物研究財団 黒潮生物研究所 「地域コミュニティとの交流を通した研究環境の強化～黒潮生物研究所の9年間の活動とこれから」
19	富山実 愛知県知多農林水産事務所 「漁業者とともにすすめている愛知県での漁業管理」

開催趣旨

地域社会が直面する環境問題の解決と地域の持続可能な発展を目指す取り組みの中では、さまざまな科学的な解決策が提案されても、それが地域の人々によって必ずしも有効に活用されないという事態がしばしばおこります。

これは、もしかすると科学者が地域に固有の伝統や文化、在来の意思決定システムなどと整合しない、いわば地域では使えない知識を生産しがちであることに問題があるのではないか？　このような問題意識のもと、私たちはJST社会技術研究開発センターの支援を受けて2008年から「地域主導型科学者コミュニティの創生」研究開発プロジェクトを推進し、地域の環境問題の解決と持続可能な発展のために役立つ「問題解決型」の知識を生産する科学のあり方、地域社会の中での科学者・専門家と多様なステークホルダーとの協働のあり方を追求してまいりました。

また、2010年3月にはこのような問題意識を共有する全国の科学者・専門家と地域のステークホルダーのみなさんが集まる「地域環境学ネットワーク」を設立して、各地の事例に関する情報の共有と相互の研鑽を促進する仕組みを整えてまいりました。

今回、地域環境学ネットワークの設立を記念して、ネットワークの理念と意義を多くの方々にご紹介するために、地域環境学ネットワーク設立シンポジウムを開催いたします。

シンポジウムの第1部では全国各地の事例の紹介を通じて、地域の人々自身による問題解決への取り組みに役立つ知識を生産する科学が、職業的な科学者・専門家だけでなく多様な立場の人々によって担われている実態から、従来の科学の枠を超えた新しい知識生産のあり方を探求します。

各地で地域社会が直面する環境課題に取り組む多様な人々は、地域社会の中でダイナミックに活動するネットワークを形成しており、職業的科学者・専門家や多様な知識生産の主体はその重要な構成員です。第2部では、このような地域内のネットワークが求心力を維持しながら問題解決に向けた活動を推進できる仕組みを、各地の先進的事例を通して検討します。

また、2日目の午前中には各地の取り組みのご報告をいただくポスターセッションを開催し、ご参加いただくみなさんとの情報共有と交流を深めたいと思います。

地域社会の自然環境と調和した持続可能な発展を目指して奮闘しておられる、全国のみなさまとの交流をおおいに楽しみたいと思います。

地域環境学ネットワーク 代表
佐藤 哲



地域環境学ネットワーク

会員リスト(2010年9月8日現在) ★印は設立発起人、●印は運営委員です。

秋道 智彌 ★あんまくどなるど	総合地球環境学研究所 副所長 / 教授 国連大学高等研究所いしかわ・かなざわ オペレーティング・ユニット所長
池上 真紀 ★●池田 啓(故人)	東北大大学院環境科学研究科 助教 前 兵庫県立コウトリの郷公園研究部長
★伊吾田 宏正 ★井田 宏之	酪農学園大学環境システム学部 講師
★●上田 篤 上田 刚平	社団法人 エゾシカ協会事務局長 / 北海道スローフード・フレンズ帯広 役員
★内田 しのぶ 太田 格 ★●大西 秀之	豊岡市立マノハリ共生課 課長 兵庫県但馬県民局豊岡農林水産振興事務所
落合 雪野 ★●垣花 薫 ★垣花 武信 ★●鹿熊 信一郎	(財)北海道環境財団 鋼路湿原自然再生普及行動計画ワンドグリンダ・プロジェクト担当 沖縄県水産海洋センター 同志社女子大学現代社会学部社会システム学科 准教授
梶原 宏之 可知 直毅 ★●金尾 滋史 ★●鎌田 磨人 ★●上村 真仁 ★神田 優 ★藏治 光一郎 倉本 宣 小串 重治 ★近藤 誠司 ★●坂本 真理子 ★●佐藤 苛 ★●澤田 俊明 ★(株)四季工房 島上宗子 ★●清水 万由子 ★●白川 勝信 ★洲崎 燐子	鹿児島大学総合研究博物館 准教授 慶良間海域保全連合会 会長 (株)21サミズ社長 / 前 慶良間自然保全環境会議 会長 / 前 座間味村商工会 会長 沖縄県八重山支庁農林水産整備課 普及員 阿蘇たにびと博物館 館長 首都大学東京理工学研究科 教授 / 小笠原研究委員長 / 島嶼共生系学際研究環代表 多賀町立博物館 学芸員 徳島大学大学院ソーシャルテクノサイエンス研究部 / 工学部建設工学科 教授 白保魚漁く海保全協議会 事務局長 / WWF サンゴ礁保護研究センター センター長 NPO 法人黒潮実感センター センター長理事 / 高知大学客員准教授 矢作川森の研究者グループ共同代表 / 東京大学愛知演習林 講師 明治大学農学部 教授 グリーンフロント研究所株式会社 北海道大学 北方生物圈フィールド科学センター／大学院農学研究院 教授(兼任) 社団法人エゾシカ協会 / 北海道和種馬保存会 会長 かみかつて山俱楽部 / (有)環境とまちづくり 長野大学環境ソーリズム学部 教授 (有)環境とまちづくり / 徳島大学客員教授 代表取締役 野崎 進 一般社団法人あいあいネット(いいいい・よりよい・まなびあいネットワーク) 長野大学 研究員 芸北高原の自然館 主任(学芸員) 矢作川森の研究者グループ共同代表 / 豊田市矢作川研究所 主任研究員

鈴木 克哉 鈴木正嗣 ★須藤 明子 ★齒 博明 竹内 周 ★●高橋 一秋 ★●高橋 大輔 谷口洋基 寺林 晓良 富田 昇 中嶋 建造 ★永野 昌博 ★中村 浩二 ★新妻 弘明 ★丹羽 健司 沼田 真也 ★●比嘉 義視 福永 真弓 ★●牧野 厚史 牧野 光琢磨 ★●松田 裕之 ★間野 隆裕 三上 光一 三橋弘宗 ★宮内 泰介 ★●三輪 信哉 ★●家中 茂 ★柳 哲雄 山菅香 山場 淳史 ★山本 信次 ★湯本 貴和 ★●與儀 正	兵庫県立大学自然・環境科学研究所 助教 / 兵庫県森林動物研究センター 研究員 岐阜大学応用生物学部 教授 (株)イグレット・オフィス 事務取締役 環境ネットワーク奄美 代表 株式会社 井ヶ竹内 常務取締役 長野大学環境ソーリズム学部 准教授 長野大学環境ソーリズム学部 准教授 阿嘉島臨海研究所 研究員 農林中金総合研究所 研究員 / 北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程 東北大大学院環境科学研究科 研究員 NPO土佐の森・救援隊 事務局長 十日町市立里山科学館越後松之山「森の学校」キヨロロ 主任学芸員 金沢大学 学長補佐(社会貢献担当) / 環日本海域環境研究センター長 / 里山プロジェクト代表 / 教授 里山里海サブグローバル・アセスメント・科学評価パネル共同議長 東北大大学院環境科学研究科基幹講座太陽地球計測学分野 教授 天栄村EIMY 湯本プロジェクト川崎-仙台薪ストーブの会 矢作川森の健康診断実行委員会 代表 首都大学東京 都市環境科学研究科観光科学域 准教授 恩納村漁協 指導員 立教大学社会学部 助教 滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員 (独)水産総合センター中央水産研究所 研究員 横浜国立大学大学院環境情報学府環境情報研究院 教授 豊田市矢作川研究所 総括研究員 長野大学 研究員 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員 北海道大学大学院文学研究科 教授 大阪学院大学国際学部 教授 鳥取大学地学部 准教授 九州大学応用力学研究所 所長 / 教授 / 「海域環境再生(里海創生)社会システムの構築」研究代表者 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 観光科学域 博士前期課程 広島県立総合技術研究所 林業技術センター 岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター 准教授 総合地球環境学研究所研究部 教授 / 多様性領域プログラム主幹 八重山漁協
--	---

地域環境学ネットワークへの入会をご希望の方は、会員
または運営委員にご連絡下さい。



資料 2

2010年3月31日

2010年9月19日改正

2012年4月6日附則改正

「地域環境学ネットワーク」規約

第1章 総則

(名 称)

第1条 本ネットワークは、地域環境学ネットワークと称する。

第2章 目的および事業

(目 的)

第2条 本ネットワークは、地域社会の現場で環境問題の解決に直結する研究活動を行う多様な研究主体と地域社会のステークホルダーが集まる場を提供し、交流を通じた情報共有、相互評価と協働の中で、相互に学びあい、育てあうことによって各地の取り組みを活性化して、科学者・専門家と地域社会のステークホルダーの知識生産と協働による地域からの環境問題の解決に貢献することを目的とする。

(事 業)

第3条 本ネットワークは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 交流集会、シンポジウム等の開催
- 2 ニュースレター、ウェブ・ジャーナルなどの発行
- 3 「協働のガイドライン」の策定と運用
- 4 ステークホルダー参加型研究評価システムの構築と運用
- 5 前4号のほか、運営会議が適当と認めた事業

第3章 会員

(会 員)

第4条 会員は、個人および団体会員とする。

- 2 本ネットワークの目的に賛同する者または団体は、運営委員の推薦を受け、運営会議における承認を経て、本ネットワークの会員になることができる
- 3 会員は、本ネットワークの事業に参加し、総会ならびに交流集会に出席することができる

(退 会)

第5条 会員は、運営会議に届出ることにより退会することができる。

第4章 運営

(組織)

第6条 本ネットワークに代表、運営会議、事務局を置く

(代表)

第7条 代表は本ネットワークの理念の共有と会員間の相互作用を促進し、ネットワークの理念に即した諸活動の活性化のために必要な調整を行う。

(運営会議)

第8条 本ネットワークの運営は、運営会議における合議によるものとする。

2 運営会議は20名以内の運営委員によって構成する

(選 任)

第9条 運営委員は総会において会議の過半数の賛成をもって選任する。ただし候補者が前条2項の定数を上回る場合は投票によって決定するものとする。

2 代表は運営会議において互選し、総会において承認をうけるものとする

(任 期)

第10条 代表・運営委員の任期は、3年とする。ただし、再任を妨げない。

(事務局)

第11条 事務局は代表・運営会議を補佐し、本ネットワークの運営と諸活動の円滑な実施を支援する。

(会計)

第12条 本ネットワークの活動にかかる経費については、原則として各会員の自己負担とする。ただし、事業の際に補助金、助成金、寄付金及びその他の収入が得られる場合にはこれを充てるものとする。

(総会)

第13条 本ネットワークは、毎年1回総会を開催する。

2 総会は、代表が招集し、運営委員の互選によって議長を選出する

3 総会は、会員の3分の1以上の出席をもって成立する

4 総会は、次の事項を報告・審議する

1) 本ネットワークの理念と活動方針に関する事項

2) 本ネットワークの活動状況のモニタリングと評価、および改善に関する事項

3) 運営委員の選出

4) 規約の改正

5) 予算、決算の報告

6) その他

(委任)

第 14 条 やむを得ない理由により総会に出席できない会員は、あらかじめ通知された会議に付議すべき事項について書面をもって意見を述べ、議決することができる。または代理人に意見の陳述と議決を委任することができる。

第 5 章 規約の改正

(規約の改正)

第 15 条 本規約は、運営会議による合議によって改正することができる。

2 運営会議は改正の理由と経緯を総会において報告することとする

第 6 章 雜則

第 16 条 本規約の施行についての細則は、運営会議による合議によって定めるものとする。

附則

1 本規約は、2010 年 4 月 1 日から施行する

2 本ネットワークの設立当初の運営委員は、「地域主導型科学者コミュニティの創生」プロジェクトのメンバーとする

3 本ネットワークの事務局は、当分の間、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所に置く

連絡先：京都府京都市北区上賀茂本山 457 番地 4

TEL : 075 - 707 - 2400 (佐藤) 075 - 707 - 2396 (福嶋)

FAX : 075 - 707 - 2509

資料 3

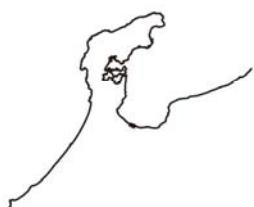




地域環境学ネットワーク
ひよこ組

能登フィールド研究会

2012 2/25・26



目次

はじめに.....	69
開催の経緯.....	70
プログラム.....	72
参加者.....	74
参加者の感想.....	76
上村真仁　沖縄県石垣市.....	76
金城達也　沖縄県国頭村.....	78
木村幹子　長崎県対馬市.....	80
一條みろ　長崎県対馬市.....	82
白川勝信　広島県北広島町.....	84
菊地直樹　兵庫県豊岡市.....	86
西野ひかる　福井県小浜市.....	89
清水万由子　長野県上田市.....	91
寺林暁良　東京都	94
浪崎直子　茨城県つくば市.....	96
星（富田）昇　福島県天栄村.....	98
能登フィールド研究会　振り返り Skype 会議.....	100
「ひよこ組」フィールド研究会を受け入れて　—能登からのコメント—.....	104
赤石大輔.....	104
小路晋作.....	106
萩のゆき.....	108
編集後記.....	109

はじめに

この報告書は、地域環境学ネットワーク「ひよこ組」の12名が、能登半島での人材育成と地域づくりについて、学んだ記録です。

わずか2日間という強行軍で、わざわざとやってきた若者（？）たちが、何を見聞きし、何を感じ考えて帰ったか？

その一端を、まずは誰よりも能登でお世話になった皆さんにお伝えしたいと思って、この報告書をつくりました。そうすることが、学びに行った私たちが能登の皆さんにできる、唯一のお礼だと考えたからです。

研究会の開催にあたって、金沢大学能登学舎のみなさん、輪島市三井地区のまるやま組のみなさん、しいたけ小屋「ひろ吉」のご夫妻、「典座」のご主人をはじめ、地元の方に様々なお計らいをいただきました。

特に、能登学舎の皆さんにとっては、「能登里山マイスター養成講座」卒業論文の仕上げ時期に重なってしまいました。非常にお忙しいなかであったにもかかわらず、貴重な時間を割いていただいたことを、申し訳なく思いつつも、ありがとうございます。

能登で出会ったすべての皆さんに、心よりお礼申し上げます。

能登フィールド研究会は、JST-RISTEX「地域主導型科学者コミュニティの創生」プロジェクトの一環として、地域環境学ネットワーク若手ワーキンググループ（ひよこ組）が主催いたしました。関係各所からのご支援に感謝いたします。

地域環境学ネットワーク ひよこ組
清水万由子

開催の経緯

清水万由子

◆地域環境学ネットワークとは

地域環境学ネットワークは、地域の方々と協働しながら研究を行い、地域環境問題の解決に資する研究成果を生みだす問題解決型の科学者を応援する全国的なネットワークとして、2010年3月に設立されました（代表：長野大学環境ツーリズム学部〔現 総合地球環境学研究所〕教授 佐藤哲）。地域の自然を守り活かして地域を元気にすることに貢献したい研究者と、そんな研究者との協働活動を求める地域住民の方々が、情報交流しています。

学問のための学問ではなく、社会のための学問が、環境保全の分野でももっと求められている。にもかかわらず、学問の側が社会とあまりに乖離している。研究者が、地域のことをもっと学ばなければ、地域社会のための学問にはならない。地域の方々に、研究者をもっと使いこなしてもらいたい。そうした問題意識を共有しています。

地域環境学ネットワークでは、これまでに5回の公開シンポジウムを開催してきました。いずれも、科学的・専門的な知識や技術を持って地域に住み込んで、実践的な研究と地域活動を行う「レジデント型研究者」が活躍されている地域での開催です。（「レジデント型研究者」とは「そこに住んで、地域社会の課題解決のための研究に取り組む研究者」という意味です。）

会員の経験を持ちより議論して、「地域と科学者の協働のガイドライン」もつくりました。「レジデント型研究」のための“指針”として使うもので、地域の問題解決に役立つ研究（知識生産）や、問題解決のための心構えを、いくつかの項目に整理したものです。

こうした活動を積み重ねて、地域社会のための環境学、「地域環境学」をつくっていくことをめざしています。

地域環境学ネットワーク web サイト：http://www2.nagano.ac.jp/sato/network_localscience/index.html

◆ひよこ組

「ひよこ組」は、地域環境学ネットワークの中で比較的若い世代のメンバーが集まったグループです。自分で地域に飛び込んでいくことを選び、奮闘してきた人や、これからどんな研究や活動をしていくべきか模索している人がいます。そんな若い世代同士で、夢や悩みを本音で語り合い、自分がどうすべきかを考える場をつくりたい思いで活動を始めました。2011年10月の終わりのことです。

個人的なことを言えば、研究も活動も経験の少ない私は、頭ばかりが先走ってしまい、自分の生き方やふるまいとして、「レジデント型」を受け止めきれなかったのかもしれません。地域に飛び込んだ若手研究者たちの赤裸々な思いを知りたいし、多くの人に知ってもらいたい。というよ

りも、「レジデント型研究」の実態は、その重要性に気付いた先輩たちの経験を受け継いで、私たちの世代が創っていくものなのではないか。そんな気負いも、少しだけありました。

◆能登に集合！

「ひよこ組」に集まった若手のメンバーは、日本列島の北から南まで、さらには海外にも散らばっています。仕事も持っています。まずはFacebookを使ったネットでの意見交換から始めました。でも、文字でモヤモヤを伝えるのは大変・・・。何とか顔を合わせて話をしたいと思いました。しかも、ただ会議室で話し合うのではなく、活動の現場を見ながらお互いのことを知り合いたい。私はほとんど迷いなく、二度訪れていた能登学舎の取り組みを「ひよこ」たちに見せたいと思いました。

その理由は、研究者が地域に住み込んで自然と地域の再生や人材育成に取り組んでいる「レジデント型研究」の1つの事例であること。しかも、地域の知恵、人、自然を活かすという出発点が非常に明確で、関わっている地域の方々がいきいきとしていること。また、能登里山マイスター養成講座がめざしている、能登の里山里海を活かした生業（なりわい）づくりは、地域に住み込む「ひよこ」たちにとっても重要な課題であること。そして食べ物がおいしいこと！！

能登の里山里海プロジェクトにはお金もかかっているし、金沢大学の地域貢献としての組織的な取組みです。だから誰でもどこでも真似できることではありませんが、きっと具体的な活動のヒントがたくさんあるし、何より「レジデント型研究」の生の姿を間近に知ることができたと思ったのです。能登でのフィールド研究会を提案したところ、赤石さんに受け入れていただき、開催できることになりました。

テーマは「レジデント型研究とは？」。次のような点を切り口に、能登での取り組みから学びたいと考えました。

- 地域社会の一員としての研究者の役割とは？（研究者から見て）
- 地域に研究者が常駐することの意義とは？（地域に暮らす人々から見て）
- 地域と研究者の協働のための組織・ネットワークづくりの方法
- 地域で暮らす人々が求める「学び」とは？

2日間という短い期間でしたが、能登の風景、人との出会いに、参加者一同多くの刺激を受けました。そして、それぞれが改めて自分自身のことや自分が暮らす地域のこと、「レジデント型研究」のことを、考える機会となりました。

プログラム

2月 25日（土）

12:00-13:00 金沢大学能登学舎内「へんざいもん」で昼食

ご飯 かじめとあおさの粕汁 若鶏の照り焼き
けんちん おから にんじんの粕和え
たくあんの贅沢煮 酢の物 大豆の五目煮 漬け物



研究会（1）

13:15-13:30 開会挨拶・趣旨説明（清水万由子）

13:30-14:00 NPO おらっちゃんの里山里海の活動（赤石大輔氏）

14:00-14:30 能登里山マイスター講座の活動
(小路晋作氏ほか、講座専任スタッフのみなさん)



14:30-15:30 能登学舎周辺の保全エリア見学



15:30-17:30 ひよこ組参加者の活動紹介・議論

17:30-19:30 懇親会 典座

20:00～ 農家民宿 しいたけ小屋ひろ吉 で議論つづき、宿泊



2月 26日（日）

9:00-10:00 珠洲市を出発して輪島市三井へ

10:00-12:30 まるやま組アエノコト参加

12:30-13:30 まるやま組ランチ

研究会（2）

13:30-14:00 まるやま組の活動紹介
(萩野由紀氏)

14:00-14:30 まるやまの景観変遷
(農村工学研究所・栗田英治氏)

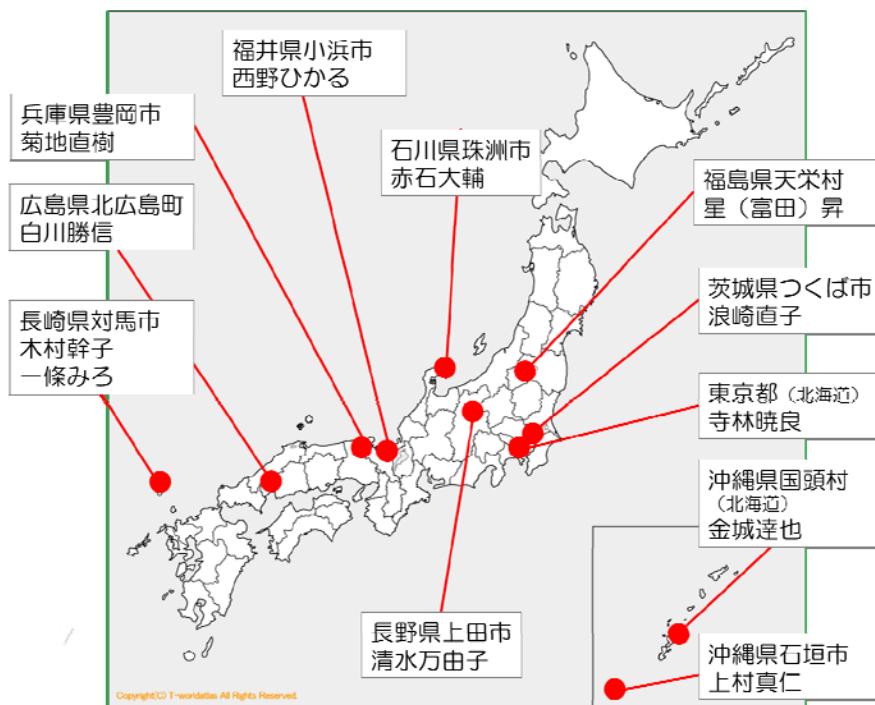
14:30-15:00 ひよこ組から一言ずつ

15:00-16:00 議論

16:00-16:30 解散



参加者



(～南西から東北へ～ 所属は開催当時のもの。感想を一部抜粋しました。)



上村真仁 (かみむら まさひと) 沖縄県石垣市
白保魚湧く海保全協議会 事務局長、WWF サンゴ礁保護研究センター センター長
——地方で豊かな生活文化を受け継ぎながら、普通に暮らすことの出来る社会システムや社会的な価値観の醸成、生活基盤の整備が必要だと思いました。



金城達也 (きんじょう たつや) 沖縄県国頭村
北海道大学大学院文学研究科博士後期課程
——研究者と地域社会との関係の持続性を担保するものの必要性を考えさせられました。



木村幹子 (きむら もとこ) 長崎県対馬市
対馬市島おこし協働隊 生物多様性保全担当
——研究者の側に、どういう地域への関わり方が一番良いのか、という正解はない気がしました。むしろ、地域側に、「研究者をどう利用したいか」という議論が必要だと思います。



一條みろ (いちじょう みろ) 長崎県対馬市・
対馬野生生物保護センター 普及啓発・地域社会づくり担当
——「先生」だからこそ出来る事と、もっと地元に近い「やまねこさん（若しくはみろちゃん）」だからこそ出来る事とは違っていて、どちらの存在も大切なのではないか



白川勝信 (しらかわ かつのは) 広島県北広島町
芸北 高原の自然館 主任 (学芸員)

——里山マイスターのとりくみはとても魅力的で、異業種分野の人達と認識を共有する方法として、一つの理想型だと思います。



菊地直樹 (きくち なおき) 兵庫県豊岡市
兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立コウノトリの郷公園 講師

——能登で沢山見たのは、「でもある」という「半」だったのではないか。



西野ひかる (にしの ひかる) 福井県小浜市
アマモサポートーズ代表／京都大学地球環境学舎修士課程)

——「能登はやさしや土までも」本当に目に見えない、言葉で表せないたくさんのものをいただいたように思います。



赤石大輔 (あかいし だいすけ) 石川県珠洲市
NPO 法人能登半島おらっちゃんの里山里海 研究員

——地域に入り活動する我々は、どこまで研究者としていられるのか、どうすれば新しいものを創り出せるのか、議論の最中である。



清水万由子 (しみず まゆこ) 長野県上田市
長野大学 研究員

——能登で出会った皆さんと、その後ろにいるであろう多くの人々の姿を想像しながら、レジデント型研究というチャレンジが、ますますおもしろくなってきました。



寺林暁良 (てらばやし あきら) 東京都
農林中金総合研究所 研究員／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

——「能登のストーリー」はどのくらい共有されたものなのかなあ。それを社会調査でぜひとも見えるものにしてみたいなあ。そんなことを考えていました。



浪崎直子 (なみざき なおこ) 茨城県つくば市
国立環境研究所

——この金沢大の取り組みが地域にどのようなインパクトを与えたかが見えると面白いなと感じました。



星(富田) 昇 (ほし とみた しょう) 福島県天栄村
東北大学大学院環境科学研究科新妻研究室

——地域資源をうまく活用したなりわいを、持続可能な形で創出し、若者が住みたいと思う地域、帰って来たいと思う地域にしていくことが重要

参加者の感想



上村真仁（かみむら まさひと） 沖縄県石垣市
白保魚湧く海保全協議会 事務局長、WWF サンゴ礁保護研究センター センター長

◆参加前の期待

私は、WWF ジャパンという自然保護団体に勤務し、沖縄県石垣島に暮らしています。仕事では地域主体のサンゴ礁保全が目標ですが、自分自身では持続可能なコミュニティづくりをテーマとしています。

現在、「里海」というキーワードで、地域が自立的に健全なサンゴ礁と調和した持続可能な暮らしを営み、満足度の高い暮らしの実現を取り組んでいます。現在直面している課題の一つが、地域でのコーディネーターの育成です。

能登フィールド研究会の案内をいただいた際、金沢大学能登学舎ではどのような活動をしているのか、里山マイスター養成プログラムとはどのようなものかに大変興味を持ちました。また、それらの働きかけを受けて地域の人々がどのように感じ、参加し、地域の生物多様性保全と地域活性化に取り組んでいるのか実際に見てみることで、石垣島白保での参考にしたいと考えていました。

○地域外からきた組織が地域にどのように受け入れられていくか？

○地域の人々を巻き込み、持続可能な地域づくりを促す、カリキュラムってどんなものか？

○地域の人々が生物多様性をどのように解釈し、その保全、活用に取り込んでいるか？

◆能登の取り組みを見て

当初の3つの関心は、研究会の期間だけでは把握しきれませんでしたが、多くのことを考え

るきっかけとなりました。主に、自分にとって地域と関わり続けることの意味とは何か？、そして、いかに生きるかという問題です。下記に3つについて感じたことをまとめ皆さんと共有したいと思います。

●研究者の皆さんの厳しい現実とレジデント型研究者がレジデントであり続けるために

これまででも地域環境学ネットワークの様々な集まりで、レジデント型研究者の皆さんが継続して地域に関わり続けることの難しさが話題になりました。研究拠点の目的と地域との関わりの方向性の乖離や、財政的な問題、異動の問題などレジデント型研究機関の問題と、研究業績を上げることが難しいことやライフステージの変化によりその地域に住み続けることが難しくなることなどもあります。

金沢大学能登学舎は、大学の施設なので継続した取り組みが担保されているのではと想像していましたが、実際には有期限のプロジェクトで回っているため研究員の皆さんの雇用が安定していないことから継続して地域と関わり続けるためのレジデントのあり方にやはり課題があるのだと思いました。

一方、天栄村の星さんのお話を聞き、研究者の資質を持つ人が地域の生活者として自らの住む地域に関わり続ける方法や対馬の木村さんのように研究ではなく、持続的な地域づくりの実践のため、自身の豊かなライフスタイルの実現のために地域に入られる姿を目の当たりにし、研究者の人生の選択の多様性を興味深く

感じました。

● 「へんざいもん」のコンセプトに感動！！

能登半島里山里海自然学校で最初に入った薪ストーブのある部屋に CBD-COP10 のための展示がありました。そこに「食から里山里海を感じる へんざいもん」というコピーがありました。これは 2004 年に私が白保に入って、最初に始めた“白保郷土料理研究会”からその後の“白保日曜市”に続くコンセプトと非常に似ています。

当時、WWF の中でサンゴ礁保全と郷土の食文化や生活文化の繋がりを理解してもらえず(私の説明が下手だったのかもしれません) 苦労したことを思い出しました。自然豊かな地域にいれば当たり前のことで(往々にして、自然の価値に地域の方が気付かないことをこのように言いますが)、自然を大切にしながら暮らしてきたことを、都会にいる人が見落としてしまっている(そもそも人は自然から様々な恩恵を受けて生きていること)のかもしれませんね。

地域の人々に生態学的な知見を伝えること、地域の中に既にある保全的な生活のあり方を受け継ぐことの大切さ(私は地域の皆さんに寄り多くの方々に参加してもらうためには特に後者が有効だと思います)を改めて感じました。さらには、都市に住む人たちに持続可能な暮らしを伝えるための田舎の役割、可能性についても強く感じました。

しいたけ小屋の朝食、アエノコトの際の郷土料理もいずれも能登の自然の恵みをたっぷりといただきました。

こうした豊かな資源を収入につなげるということを一つ一つ考えてしまいますが、本当にすべきことは地方で豊かな生活文化を受け継

ぎながら、普通に暮らすことの出来る社会システムや社会的な価値観の醸成、生活基盤の整備が必要だと思いました。

● 現代版アエノコトにびっくり！！

I ターンについて自分で明確な考えが整理できません。私が地域に関わるのは専門家と



してであり、最大で選択肢の提示のみ、選択権は地域の人たちにあると考えてきました。地域の内発的な取り組みとなるよう、地域が気付き、自然に向かうよう、情報を提示し、ヒントとなる事例の提示や講演会をお膳立てするように努めました。それは、WWF という組織と白保集落との歴史的な関わりの中で生まれた負の関係性(新石垣空港問題への立場の違いによる乖離)を意識したことでもありますが、持続的な地域づくりの担い手は、地域の人々だという考え方、私自身は地域の人間ではない、いずれここを去るという潜在的な考えがあり、距離感が出来ているのかな？と思いました。

研究や仕事の対象として地域を見る見方と地域に骨を埋める覚悟で地域に関わる違いについて考えさせられました。

地域環境学ネットワークとしては、研究者が地域に関わり続ける、地域の環境改善に関わり続けようとする目的、意味は何なのかということを掘り下げる必要があるかもしれませんね。

ただ、白保集落は過疎、高齢化とは無縁の集落であり、伝統行事の担い手もいるので、同じような取り組みをするのは難しいだろうなど、ある意味うらやましく思いました。



金城達也（きんじょう たつや） 沖縄県国頭村
北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

地域環境学ネットワーク若手グループ（通称：ひよこ組）の研究会参加のため、人生で初めて能登に行くことができました。研究会は2月25-26日の二日間行われました。一日目は能登学舎の活動紹介と地域環境学ネットワークメンバーのそれぞれの活動報告がありました。

能登空港から能登学舎へ移動し、到着後は早速食堂で昼食をとりました。どうやら能登半島里山里海自然学校のテーマのひとつに「食文化の保存と地産地消の食育推進」があるらしく、女性メンバーを中心となって地域で採れた食材を中心として料理をふるまっていました。こういう活動を生み出させ支えていくためにも能登学舎の存在は大きいと感じました。

昼食後は早速研究会が始まり、能登学舎の取り組みや地域環境学ネットワークメンバーそれぞれの地域での活動報告がなされました。能登学舎の取り組みでは研究者複数名が中心となり、地元住民を対象にマイスター養成講座を行うなど、研究者の地域社会での役割を感じさせてくれるものでした。実際に地元住民と一緒にになって生物調査を行うなどして地域資源を掘り起こす活動を続けており、研究者と地域住民の関係の双方向性を感じさせてくれるものでした。また、能登学舎のみなさんからは研究者のポストの問題や活動の継続性に関する不安も感じ取ることができました。それらの問題は博士課程に在籍するものとしては考えざるをえない問題でもあるしなによりも研究者と地域社会との関係の持続性を担保するものの必要性

を考えさせられました。そういう関係性を築くことができなければ結局のところ研究者は「いつかこの土地を出ていく者」としての認識が強くなるだろうと思いますし、地域社会とのかかわりの持続性は保証されず、これまでの活動がいくら素晴らしいものであっても無くなってしまうものになってしまふと思いました。もちろん活動自体が地域社会によって継続される場合もあるとは思いますが、継続されない場合にはレジデント型研究者の役割も薄らいでいくものように感じました。

私のもうひとつの肩書きとしては地方自治体の文化財行政にかかる立場があります。鹿児島県徳之島天城町の文化財悉皆調査の専門員をしていますが、その立場からは二日目にお世話になったまるやま組の活動は大変興味深い取り組みでした。「現代版」とはいっても、地域の方から方式などを教えてもらいながらアエノコトを実践として行っている様子は地域の文化を存続させていくうえでは重要なことであるように感じました。

アエノコトはまず自宅で神様を労うことから始まりました。その後、田んぼの神様を実際に田んぼに返すため、参加者全員で雪道を歩きながら田んぼへと向かいました。慣れないスキー板を装着して雪道を歩くのは大変でしたが、沖縄出身の僕にとってはそういう些細なことでもすごく楽しく感じました。田んぼに到着すると神様を田んぼに返す儀式を行いました。儀式を終えて萩野さんの自宅に戻ると地元で採れたたくさんの食材を



活かした料理で昼食をとりました。昼食後はまるやま組の活動報告などを中心とし

た発表があり、その後はみんなで親睦を深めました。

この一連の流れを淡々と書いてみても、その中には地域の人や外部の人などさまざまな参加者がいることがわかります。ひとつの行事を内輪だけでは終わらせないようなまるやま組の活動は文化や環境の持続性に貢献できるものではないかという可能性を感じました。

今回の能登フィールド研究会ではたくさんのこと勉強させてもらいました。自然環境のことからはじまり、文化のこともそうですし、それらを含めて地域社会の持続可能性のこともいろいろ考えさせられるものでした。今回は二日間という短い時間だったのでまだまだ聞けてないところもたくさんあると思います。能登学舎やまるやま組にかかるみなさんがすべてを説明できたとも思え

ません。このことを言い訳にしてまた能登フィールドを訪れる機会になればと思います。その際にはぜひもう少し踏み込んだ形で能登学舎の取り組みやまるやま組の活動などと地域社会とのかかわりについてお聞きすることができますがければと思います。そこから能登学舎の活動と地域社会のつながりや関係性がどのようなものであるのかを考えてみるのも良いのかなと思いました。能登学舎の活動で行っている生物調査などに加えて、機会があればぜひそのような社会科学的な調査をやるとおもしろいのではないかと考えました。

最後に、今回の地域環境学ネットワークメンバーのフィールド研究会を受け入れてくださるにあたりコーディネートしていただいた能登学舎のみなさんや宿泊場所を提供していただいた農家民宿のおじさんとおばさん、さまざまな活動紹介をしていただいたまるやま組のみなさんには大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。またお会いできることを心より望んでおります。



木村幹子（きむら もとこ） 長崎県対馬市
対馬市島おこし協働隊 生物多様性保全担当

私は、昨年6月に、これまでの研究者人生にひとまずの区切りを付け、生態学者として歩んで来た自分の経験を実社会に活かすフィールドを求めて、対馬に移住しました。研究員時代、私が携わっていたプロジェクトでは、「生態系適応科学」という新しい学問大系の構築を目指していました。これまで人類は、変動する自然環境を力で押さえ込むことによって克服し、発展してきました。生態適応科学とは、自然を克服するのではなく、生物や生態系が本来備えている適応力を活かして変動する環境に適応していく「適応型社会」を実現するための科学です。適応型社会の実現には、生態系のメカニズムを解明する基礎研究だけでは不十分で、社会に浸透するシステムを作る必要があります。研究員時代に強く感じたのは、生物多様性の問題はまさに地域の合意形成や経済の問題だということです。理論を体系化し、学問の世界で提唱して行くことも、確かに大事なことだし、大きな影響力を持つことでしょう。でも自分は、小さな単位でも良い、どこか現実の社会で、「これが適応型の社会です」ということを示すモデルを作って実践してみたかった。そのほうが、自分の生き方として無理がないな、と感じていました。そんなとき、対馬市では、総務省の地域おこし協力隊の制度を活用して、「地域の自然資源を保全し、活用することで地域活性化につなげる」ことを仕事とする専門職員を募集していました。これだ！と思って、対馬に渡ることとなりました。

対馬は、ご存知の通り離島です。つまり非常に単位が明確なわけです。「実験場」として最適ではないかと。エネルギーの自給自足

や地域内での物質循環を実現するプロセスやその経済性、地域の合意形成の過程、そういったことを研究するフィールドとして活用できるのではないか、と。私は、そういうフィールドを求めている研究者を対馬に集め、知見を吸い上げ、実際の社会に活かすしくみを作るコーディネーターになるべきなのだと思います。ですから、この能登フィールド研究会では、特定の地域をフィールドとして活動する研究者の方が何を求め、どのように地域と関わっているのかを知り、今後、どのように研究者と関わって行くのかのヒントを得たいと思って参加しました。また、研究者にとってよい「実験場」であることは、学習者にとってもよい「教材」であることと同義です。そういう意味で、金沢大学が実践しておられる「里山マイスター養成プログラム」は、大変興味がありました。

以下に、研究会を終えての感想を記したいと思います。

◆研究者の存在が地域にとって有意義なものとなるには

星さんのように、結婚しちゃって自分で自分の稼ぎ口をつくっちゃって、もう、この地で生きます！という人がいるということは、私にとって非常に励みになりました。また、赤石さんや上村さんのように、研究者が一人の住民となって、住民との直接対話が出来、住民とともにプログラム作りが出来る体制が構築されていることも（そのような人がいることも）、地域にとっては大きなメリットだろうと思いました。しかし学問として地域に関わることには、ある程度ドライな関係をあ

えて保つ必要があることもあるし、複数の地域に関わる必要があることもあるでしょう。研究者の側に、どういう地域への関わり方が一番良いのか、という正解はない気がしました。むしろ、地域側に、「研究者をどう利用したいか」という議論が必要だと思います。一時的にしか滞在しない研究者や、調査フィールドとして、データのみを必要としている研究者が持っている知見も、地域に還元してほしいと地域が望んでいるのならば、地域側が窓口や受け皿を整理すべきなのだろうと思いました。

◆里山マイスター養成プログラム

講師陣やカリキュラム、フィールド、すべてにおいて、非常に理想的なプログラムで、このような学習フィールドが全国で展開されれば、もっと世の中は良くなると思いました。同時に、民間では真似できない。。。とも思いました。教育のための予算として、公的なお金がかなり投入され、大学という組織の職員として専門的にこれに関わることのできる人材が確保できる。このような条件を整えることは並大抵のことではないとは思います。しかし、ヒントになるところは大いにありました。

たとえば、対馬のような離島では、「通い」で教育プログラムを展開するのは不可能ですが、逆に長期滞在型ならば離島という立地はハンディではなくなります。毎週土曜日の開講日ではなく、1年間の住込み研修にしてしまえば、カリキュラムの応用は可能ではないかと思いました。そのことで、制限要因になっている専門的にかかわる職員の不足を、その役目を受講者自らが担うという形で補えるかもしれません。住込みならば、衣食住を保障すれば、受講料を払っても受講したい

と思う人もいるでしょう。また「へんざいもん」のコンセプトには、非常に学ぶべきところが多く、その土地で「普通に」食べているものこそ、遠くからでも食べにやってきたいと思うご馳走であり、地域特有の知恵が詰まっています。これも、受講者に提供する食堂という形態ではなく、伝統食材の調理自体を学びのカリキュラムに組み込めば、離島でも応用可能なような気がしました。ということで、すごい！→でも、対馬ではムリだ。。。→いや待てよ！？と考えることで、「盗む」ことができるアイディアは、たくさんありました。

◆まるやま組の「アエノコト」

地域の信仰は、その土地の自然をその土地に住む人々がどうとらえ、どう付き合ってきたのかを示す非常に重要な資料なので、生物多様性を保全するのと同時に、こういった信仰の多様性を保全していくことの重要性を感じました。対馬でも伝統的な信仰は地域ごとに様々ありますが、どの地域でも頭を悩ませているのが担い手の高齢化と後継者不足です。とかくその土地に昔から住んでいる人は、そういったものを当たり前すぎて、逆に「わざらわしいもの」と捉えがちです。まるやま組の取組のように、「よそもの」がそこに価値を見出し、逆にその価値を地元の人気に気付かせるような、そんな存在がいるかいなかが、信仰の存続の可否を左右するような気がしました。





一條みろ（いちじょう　みろ）　長崎県対馬市・
対馬野生生物保護センター 普及啓発・地域社会づくり担当

「地域環境学ネットワーク」の「研究会」に参加しているながら、実は私は「研究者」ではありません。農業高校を出て、農林大学校や環境の専門学校で勉強した後、長崎県の対馬という離島で、ツシマヤマネコをはじめとした対馬の自然の面白さや、研究者の皆さんの成果を子供たちや一般の人に伝える、「インタープリター」（自然案内人）という仕事をしています。

今回は、ツシマヤマネコと共生する地域社会づくりに取り組む中で、地域の方との活動のヒントを得られないかと考え、研究会に参加させて頂きました。このレポートでは、1泊2日の研究会で、私が学び、感じた事を書かせて頂きます。

能登学舎の取組は以前から知っており、地元の方と大学がどのように関わりあっているのか、非常に興味を持っていました。お昼を頂いた「へんざいもん」では、地元のお母さん達が地元の食材「辺採物」を使って本当に美味しい地元ならではの料理を出して下さいました。黒板のメニュー、室内のディスプレイ等、空間のあちこちにお母さんたちの心遣いが感じられる素敵な空間でした。地元の食材、人材の活用だけでなく、地元の魅力を来訪者に伝えることが出来る、非常に良い取組だと感じました。

昼食後に行った、マツタケ山の見学も、非常に面白かったです。能登ではゲンゴロウ類が自然の豊かさを図る モノサシになっていましたが、地元の人にとっては、居るのが当たり前、種類の違いなんて気にしていないであろうゲンゴロウの保全を行うまでには、能登学舎の研究者の皆さんの中知識、データ、伝える努力（これが一番重要だと考えています）が多々あった

事だろうと想像しています。反対に、マツタケが取れる山を目指しているアカマツ林では、地元の方の経験談から、サカキ（能登での呼び方で書かせて頂きます）を優先的に残すことがマツタケの発生しやすい森を作り、サカキの枝は香花として出荷している…という事で、地元の方の知恵と、研究者の知識がうまく合わさっているのを感じました。

交流の場として用意して頂いた囲炉裏が印象的な立派な古民家「典座」さんでは、日本海ならではの海の幸を頂きました。料理はどれも美味しかったのですが、一番印象に残ったのは、「いしる」を使ったおにぎりでした。「へんざいもん」の粕汁（カジメ、アオサ入り）、「ひろ吉」さんで頂いた椎茸「能登 115」に「大浜大豆」を使ったお豆腐、「まるやま組」のアエノコトでの直会のごちそう達…能登の皆さんが暮らしの中で地産地消を実践し、自然の営みをうまく活かしている一端を感じることが出来ました。

「ひろ吉」さんのお父さんが「生物多様性なんて全く興味はない。赤石先生が一生懸命シャープゲンゴロウモドキやカエルの調査をするから大事なのかな、と思うようになり、手伝うようになった」…というお話をされていたのが非常に印象的でした。

赤石さんは能登では「先生」と呼ばれており、それが地域との隔たりであるかどうか…という話にもなりましたが、「先生」だからこそ出来る事と、もっと地元に近い「やまねこさん（若しくはみろちゃん）」だからこそ出来る事とは違っていて、どちらの存在も大切なではないか、という考えに落ち着きました。

能登学舎に関わる人たちにとっての「シャープ」が大手家電メーカーではなく、小さなゲンゴロウを指す言葉になっていたのが面白く、それだけゲンゴロウが身近なものになっているという事なのだと感じましたが、これは「先生」である赤石さんや能登学舎の皆さんのが地元の人にシャープゲンゴロウモドキの価値を伝え、それを能登の人達が理解した結果なのだと思います。

現在、対馬では「ツシマヤマネコと共生する地域社会づくり」として、3つの地区で人もヤマネコも住みやすい地域づくりを行っていますが、能登の地元の自然を活かしたおもてなしの心は、対馬でも応用できるものだと感じまし

た。対馬の地元の人達と、今回の研修の内容を共有し、対馬ではどんなことが出来るのか、「やまねこさん」なりに、地元の人達と一緒に考えていきたいと思います。

赤石さん、清水さん、能登で受け入れてくださったすべての皆様、貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。





白川勝信（しらかわ かつのぶ） 広島県北広島町
芸北 高原の自然館 主任（学芸員）

2012年2月24日に珠洲市保全計画策定協議会、25日と26日には「地域環境学ネットワークひよこ組」の研究会に出席するため、能登を訪れました。金沢大学の「能登半島里山里海自然学校（以下、自然学校）」の事業については、情報として知ってはいたけれど、詳しく聞くのは初めてでした。3日間の滞在では、研究者の資質も、地域力もとびきりだということが分かり、たくさんのアイデアと視点とごちそうをいただきました。一方で、地域に根付いた研究施設を持続することの難しさも実感できました。

地域環境学ネットワークの研究会で各地を訪れる時には、「どのようなしきみが、どのようにして、その地域に組み込まれているのか」という視点でお話を聞いています。今回も、自然学校の活動を推進させているしくみ、それを実現させているもの、そして、他の地域（まずは自分の地域）に応用するために越えなければならないハードル、について、ずっと考えていました。それらを整理するために、簡単なメモとして残したいと思います。

◆自然学校が実現させる「主流化」

自然学校のホームページを見ると、そのめざすものは「身近な自然である里山や里海の保全と再生」および「環境に配慮した農林水産業を基盤とした地域振興策を提言」する、とあります。半自然生態系の保全を持続するためには、担い手の確保が最大の課題です。ボランティアによる保全も一時しのぎには有効ですが、持続性がありません。

今回、最もおもしろいと感じたのは、「里山マイスター」という事業を通じて、担い手自身

が地域振興策の提言をする仕組みになっていることでした。里山マイスター研修の最後には、卒業論文発表会という形で各自が発表をするのですが、「発表」を作り上げる作業を通じて、受講者は、里山・里海を保全するために何をするかということを考える「姿勢」を身に付けることになります。単なる技術の継承で終わらせないことは重要と感じました。

また、マイスター認定を受ける主体の業種が多様ということもポイントだと思います。卒論発表という形で、里山・里海との関わりについて自分の姿勢を発表することは、ある意味「決意表明」のようなものだと思います。その課程を経た人達が、地域のあらゆる分野にいる、ということは、生物多様性戦略で言うところの「主流化」を進める上で、大きな力になるはずです。人口約7万3千人の奥能登で約60人のマイスターは、決して少なく無いと思います。

◆金沢大学の存在

自然学校のスタッフは、地域の人から「先生」と呼ばれており、里山マイスターが課程を修了する際の発表会が「卒論発表会」と名付けられていることからも、自然学校が「アカデミック」（学問的）を意識していることが伺えました。ただし、先生は「遠い存在」ではなく、一緒に何かをやってくれる仲間として人間関係を築いていることは、民宿やへんざいもんの方たちとの話しを通じてよく分かりました。先生としての立ち位置を保ちながら、地域の人との人間関係を築いていくのはとても難しいことです。

委員会や方針決定の場で、大学の先生、いわゆる学識者の発言が必要になる場面がありま

す。それは科学的な裏付けが求められることよりも、むしろ、理屈や、地域の人間関係や、行政の都合などを飛び越えた、上からの意見です。「先生がそう言うのなら」ということで、進む話しもあります。それは、個人への信頼とは少し違うもので、大学という名前によって担保されるもののように感じます。マイスターが卒業するときに、安心と信頼を持つためにも、大学の存在は必要だと思います。

この雰囲気は、地方の博物館に務める学芸員や、地域環境学ネットワークを通じて訪れた（大学以外の）レジデント型研究施設のスタッフと地域の人との間には、そんな関係は感じられませんが、兵庫県立人と自然の博物館の学芸員やコウノトリの郷公園のスタッフには、共通のものがあるように思います。博物館施設でも、もちろん研究活動は進められており、地域の人との関係は個人の資質によって作られるのですが、地域の人や受講生からの「見た目」を担



保することに関して、大学の存在が大きいことを、今回の研究会で強く感じました。

◆能登での収穫

自然学校そのものの存続が不透明なことについて、とても残念に思います。今居られるスタッフは有能であり、人間性もすばらしいことは、地元の人の話でよく分かりました。自然学校があることの価値を、地域や行政が実感する時が、自然学校が無くなつてからではいけないと思います。短期間の間に、他の自治体が実現したくてできていない多くのことを、自然学校は実現させています。金沢大学や珠洲市には賢明な判断を期待したいと思います。

里山マイスターのとりくみはとても魅力的で、異業種分野の人達と認識を共有する方法として、一つの理想型だと思います。自然学校と同じことはできませんが、今後、活動を進める際の重要な視点を教わりました。また、大学との連携について、研究や活動以外の利点を感じられたことも収穫でした。北広島町では、2012年に生物多様性地域戦略が策定される予定ですが、戦略を推進する上で、組織の運営・大学との連携・事業実施など、多いに参考にさせていただきたいと思います。



菊地直樹（きくち なおき） 兵庫県豊岡市

兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立コウノトリの郷公園 講師

◆僕の履歴

まだ「レジデント型研究」という言葉が生まれていなかった1999年、僕は兵庫県立コウノトリの郷公園（本務は兵庫県立大学自然・環境科学研究所）に赴任しました。仕事は環境社会学に立脚しながらコウノトリの野生復帰プロジェクトを推進していくこと。舞台は兵庫県北部の豊岡市。初めての土地で、周りは自然学者や行政マン、自然大好きな人間ばかり。若くて頭でっかち、そして人見知りだった僕は、この地でどんな仕事ができるのか、不安な日々を過ごしました。

ある日、「お前を採用して失敗だった」と当時の上司が吐露しました。今となっては、その心意は分かりませんが、もっとアクティブに活動し、人々の意識や行動を変えていくことを僕に期待していたのでしょう。内気な僕は、人を元気づけたり鼓舞したりするのが、あまり得意ではありません。どちらかというと、人々の声を聞き、理解しようとしているところから、人と自然の関係を再創造しようとされていたのです。このアプローチは回りくどく、時間がかかり、分かりにくい。それでもコウノトリの話を聞こうと思い、地域を歩いて回る日々を続けたのです。

このコウノトリの話を聞く仕事は、僕の野生復帰へのかかわり方や研究者としてのあり方に決定的な影響を与えました。この地で生まれ育ち、そして死んでいく人たちの話を聞くことを通して、人とコウノトリの共生や地域づくりがリアリティを持って目の前に現れ、豊岡に住みつくことを通じて野生復帰に取り組むようになれたと思うからです。それ以降、研究者と行政スタッフと地域住民といった複数の視点を交錯させることが、僕のスタイルになりました。

た。

地域環境学ネットワーク代表の佐藤哲さんが、豊岡で開催した環境社会学会第37回大会のシンポジウムの壇上でレジデント型研究という言葉を披露したのは、2007年のことです。言葉が提示されたことで、少し違った視点から見ることができるようになり、各地で地域に住みつきながら研究と活動をしている人たちの存在を知る機会が随分と増えたのは確かです。言葉の力は大きいと実感しています。

◆初めての能登訪問

レジデント型研究という視点で見渡すと、似た取り組みをしている地域が幾つも目につきました。なかでも金沢大学能登学舎の里山マイスターの取り組みが気になりました。過疎化に悩む能登半島で、若い研究者が住みこみながら、地域の担い手となるべく若者の定住を目指したプロジェクトを開催している。豊岡市がある但馬地方も同じ問題を抱えているので、現場を見てみたいと思ったのです。同じ石川県の片野鴨池総合研究会でご一緒したことがあるプロジェクトリーダーの中村浩二先生に、早速連絡を取ってみました。輪島高校での講義を頼まれ、赤石さんとともにコウノトリのこと、能登の里山のことなどを高校生と話し合いました。大雪の中、赤石さんに千枚田や能登学舎などを案内してもらい、「ひろ吉」で能登の現状と将来を深夜まで語り合いました。告白しますが、僕はしいたけが苦手です。そんな僕にも暖かく接してくれたひろ吉さん、とても感謝しております。初めての能登訪問でした。2010年2月のことです。

◆ひよこ組の一員として

とても「ひよこ」と自称できる年齢ではないのですが、「老ひよこ」ということで、組の一員として再び能登を訪問させていただきました。

人々のもてなしは、やはり素晴らしいものがありました。「食から里山里海を感じる」という「へんざいもん」、古い民家で地域の普通のものを提供する「典座」、夫婦の笑顔が素敵な「ひろ吉」、豊富な田舎料理を振舞ってくれた「まるやま組」。どこも地域の自然の恵みを感じることのできる、素晴らしい料理、空間です。何度でも訪れたいと思ったのは、僕だけではないでしよう。こうした地域の恵みを活かす活動は、科学の目から地域に光を当てた能登学舎によって触発されたのではないかと勝手に推測しています。

都会から移り住んできた人たちが、地域の伝統を新しい形で継承していく現代版の「あえのこと」。萩野さんのお家に色々な人々が集まって、神様に感謝し、地域の恵みをいただく。とても不思議な居心地の空間でした。カラフルなアウトドアウェアを着た人たちが雪道を歩く姿に、ハイブリッドな伝統文化が生まれる瞬間を目撃したのかもしれません。

地域の担い手の育成を目指した里山マイスターの取り組みは、既に色々なところに効果が表れているようです。「先生」と呼ばれる若き研究者たちは、確実に地域の人たちに多くの刺激をもたらすとともに、地域の人から可愛がられているに違いありません。地域のヘソのよう

な存在である学校がなくなる。この問題に対して、能登学舎は一つのモデルを提示しています。若い



研究者が住みつき、おばあちゃんたちが出入りする。違った履歴をもった異世代が交流することで、地域のヘソが再生しているかのようでした。豊岡でこのような活動がどうしたらできるのか、考えを巡らせていました。

是非とも里山マイスターは継続してほしいですが、多くの困難があることも分かりました。資金の切れ目がプロジェクトの切れ目になるかもしれないこと。スタッフが不安定な身分であること。伊藤さんが問い合わせた、「幸せって何だろう」という言葉に象徴されているかもしれません。地域の人々と若きスタッフたちが、どのようにかかわり、相互に変わっているのか、そのことがとても気になったのです。

◆レジデントと研究

これまで地域環境学ネットワークのシンポジウム等で、レジデント型研究者が継続的に

地域にかかわり続けることの困難さやレジデント型研究とは何かということが幾度となく話題にあがりました。レジデントと研究。この二つが必然的につながるわけではないでしょう。二つの言葉をつなぐものは何か？ここ数年、自問してきました。

ここでいうレジデントとは、主によそから移り住むという意味で使われています。住むとはどういうことでしょうか。今回の能登訪問では大雪に見舞われました。数日訪問する者にとっては、きれいと感じるかもしれません。大変だという感想を持つかもしれません。先日、北海道で「雪かきがある地域とそうでない地域では文化が違う」という言葉を聞きました。四国で生まれ育ち、積雪地帯に住み移った僕には、この言葉のニュアンスをそれなりに理解できます。日常としての雪を経験していると、「ここに住むってこういうことだろう」と、まさに身体的に理解できるようになることがあるのです。豊岡の夏は40度近くまで気温があがり、

油断していると何でもカビが生えてしまうほど湿度が高い。10年に1回程度は、大きな水害に見舞われ、2004年には我が家も床上1メートルの被害にあった。そうしたところだからこそ、生物が豊かでコウノトリが生息できる。

地域に身体を埋め込むことと科学の視点を交錯させることにより、地域の課題や将来の選択肢を見据えた知識を創ることが、研究者がレジデントになることの意義の一つではないでしょうか。こうした身体感覚は、その地で生まれ育ち、そして死んでいく人たちのそれとは若干違っているでしょう。地域生活を共有しながらもお互いに異なっているからこそ、色々な人やモノやコトをつなぐことができ、ハイブリッドなモノやコトが生み出されていくのではないかでしょうか。科学の専門性をズラし、研究が変わっていくことが必要であるように思います。住むということは、総合的なことだからです。レジデント型研究とは、地域で研究することに加え、住むということと科学との間に生まれる新しい表現形態ではないかと考えています。研究には多様な表現形態があると思うのです。

◆「半」

こんなことを考えていると、再び、異質な人々が集う萩野宅の魅力が頭をよぎりました。

地域のおばあちゃんもいれば外国人もいる。よそから住みついた人もいればひよこ組もいる。では誰でも出入りできるかと言えば、そうでもない。個人の家もあるが外に開かれている。公共的な空間のようであって公共的な空間ではない。萩野さんのお家で感じた心地よさは、こうした「半」公共的とも呼べる空間の魅力にあったように思います。

能登フィールド研究会を振り返ってみると、「半」はまるやま組だけのものではないことに気づきました。能登学舎は大学であって大学ではない。人材育成の場であったり、おばあちゃんたちの働きの場であったりする。赤石先生でもあるけれど赤石君もある。一つの空間を一つの機能に限定しない。一人の人を一つの専門や役割に限定しない。能登で沢山見たのは、「でもある」という「半」だったのではないか。

僕自身も大学の研究者でもあるが行政職員でもある。よそ者でもあるが地域住民でもある。当事者でもあるがコーディネーターでもある。こうした「半」によって、いろいろな人やモノやコトが交錯し、新しいモノやコトが生成していく可能性が高まっていく。

僕は一見中途半端な「半」にもう少し身を置きながら、レジデントと研究の間をうごめいてみようと思います。老ひよこが巣立ちできる日は、ちょっと先なのかもしれません。



西野ひかる（にしの ひかる） 福井県小浜市
アマモサポートーズ代表／京都大学地球環境学舎修士課程

学生時代から 7 年間を金沢で過ごした私にとって、能登は遠い存在ではありませんでしたが、数えてみると最後に能登を訪れてから、もう 15 年以上経っていました。何気なく見、聞こえてくる地名や単語、方言が遠い記憶を呼び戻すこともあって、何とも言えない感慨深い 2 日間となりました。

ギリギリまで他の仕事に追われており、何の準備も心づもりもないままに研修に参加しましたが、気になったのは、能登学舎が地域に何をもたらしたのか、というところです。「能登学舎のない私の地元」との比較において、感じたこと、勝手に想像したことを書こうと思います。

古民家レストラン、農家民宿、まるやま組。（到着が遅かったのでへんざいもんはいたいでいませんが、たぶんそれも含め）どれも、アットホームでくつろげて美味しいと感動しました。そして、考えました。能登学舎がなくてもこれらは存在したのだろうか？

ある意味 Yes であり、ある意味 No だと思います。それぞれの方々の思いと努力、パワーで、きっと存在はしていたでしょうが、今ほどに輝いてはいなかつたのでは、と思います。

では、能登学舎は何をしたのか？

きっと地元の人に自信とやる気、張り合いを与えたのだと思います。世の中の田舎の人はたいてい思っています。「こんな田舎。何にもない田舎。しょうもない田舎」「こんな私。何のとりえもない私。しょうもない私」

そこに、「この田舎が素晴らしいんだよ」と大学がやって来て、研究者たちが「これは学術的に貴重だ」とか「○△◇□（よくわからない

学名）がいるなんて!!」とか「まだ○○○が残っているんですね、すごい!!」と言い始める。「何にもない田舎。何のとりえもない私。」が「何だか少し自慢できるもの」になってくる。そして、知らず知らずに「あれはどう？」「これはどう？」「そう言えば○○さんちには△△があるよ」と、自分達の日常にスポットライトを当て始め、昔からの暮らしの中にある宝物を掘り起こし始める。

それは、自分たち自身を再認識することであり、親や先祖、自分達を取り巻く自然に感謝する気持ちを改めて呼び起こし、また、子供や孫世代にこの大事なものを伝えたい、という気持ちを湧きあがらせ、生きる力になっていっているように思います。

「日常そのものが宝物である」と認識されているのか、みなさん、お客様に対する取り繕い方をあまりされない、と感じました。一般的に観光で売ろうとすると「おもてなしの心」とかお客様対応の教育をし、表面をきれいに取り繕おうとします。しかし、私は今回、取つてつけたお客様対応を感じず、それがとても心地よかったです。「能登学舎に来た人」ということで、一般の観光客とは違い、普段の地元の人と能登学舎の研究員の皆さんとの距離感で、私たちにも接してくれたのかもしれません。

農家民宿ではお母さんが「お客様が来るから、てお父さんがふきのとうを探つて来てくれたんだよ。一人っ子だから昔は人づきあいも下手で、もともとはこんなにしゃべらなかったのにね」と話してくれました。お父さんも「ピザは作れば作るほど赤字になるんだ。モツァレラチーズが高くて」とニコニコしながら本音ト

ーク。ご飯の準備もみんなでワイワイ手伝って。この無理のない関係、ご夫婦が幸せそうに農家民宿をされている姿が、何よりもてなしに感じました。

まるやま組あえのこと。「きっと田んぼの神様、八万の神様は、この生態系のことだと思う」と神様のところにトンボや草花の標本が飾られていきました。そのときはピンと来ていなかつたのですが、後日、新さん（移住された若いお百姓さん）のブログで「田んぼに30種以上のトンボがいたことがわかった」と知って、本当にそういうことだと思いました。

能登学舎の人たちは、田舎の人が何となく感じていたこと、大変にして代々やってきたことを、科学の目で現代人にもわかる形で見せてくれているのだと思います。能登の人達が守ってきたものが、どんなに大切なものののかを気付かせてくれるのだと思います。

また、単なる断片的な情報の取得だけでなく、「里山マイスター」や「いきものマイスター」で科学的なものの見方、論理的な思考、体系立てた知識を学び、更に自分でテーマを決めて卒業論文を書き上げる、ということで、受講者の

方々は大きな力をつけていると思います。それがその人の背骨になり筋肉になり、自信になり、へこたれない力に



なっていく。私がこの1年間大学院で学ぶ中で感じたことを、きっと能登のみなさんも感じていると思います。なんなくほんやりだった自分のやりたいこと、目指すものが、はっきりわかつて堂々と言えるようになる。それは、とても気持ちのいい晴れやかなことです。

最後に荻野さんが言っていらしたこと。「私は自分が楽しくて、まるやま組をしている。これを〇〇ツーリズムとしてお金に換えようとは思わない。ただ、手伝ってくれる人には、少しお礼ができるようにしたい。」

私たちは今「これ以上ボランティアでは続かないから、収益を上げるNPOを作ろう」「食べていけるようになることが、田舎で自然を活かした生き方ができる、という証明になり、次の世代につながる」と、若狭で新しいツーリズムを創ろうとアイディアを持ち寄っている最中です。だから、荻野さんの言われたことが、少しひっかかりました。大事にしたいことを壊さないで生きていくにはどうしたらいいか、自分の宿題にしたいと思います。

「能登はやさしや土までも」本当に目に見えない、言葉で表せないたくさんものをいただいたように思います。また訪れたい、またお会いしたいと思っています。そして、ひよこ組のみなさん含め、お逢いすることができたすべてのみなさんに、感謝しています。



清水万由子（しみず まゆこ） 長野県上田市
長野大学 研究員

2009年と2011年に、長野大学生と一緒に珠洲の能登学舎と輪島市三井地区を訪れました。学生の「里山里海アクティビティ」実習に同行して、豊かな自然の恵み、深い歴史に支えられた生活文化、人々のやさしさと活力にふれ、能登の深い魅力を感じました。

今回は少し違った視点を持って、能登を訪れました。テーマは「地域に住み込んで研究すること、すなわち「レジデント型研究」です。まず、珠洲で「常駐（定住）する研究者」の皆さんから直接話を聞いて、実践的な地域研究のスタイルを考えるヒントをいただきました。また、三井ではまるやま組の「あえのこと」に参加して、そこに集まった方々とお話をしながら、「学び」ということについて考えました。

能登で感じたたくさんの刺激を、まだうまく表現できませんが、ぎゅっと詰まった2日間を振り返って、考えたことを書いてみたいと思います。

◆常駐する研究者の役割

まず、次々と展開される「おらっちゃんの里山里海」の活動には驚かされました。地元の方の様々な経験と、「頼れる研究者」である赤石さんの科学的な知識がうまく組み合わされているという印象を受けました。NPOの活動のアイディアが生まれてきたプロセスや、地元の方々のNPOの活動に対する認識が、地域の方々の目線で可視化されると、常駐研究員が地域社会の中ではたしている社会的役割が、より明確になるのではないかと思いました。

里山マイスター講座の常駐スタッフの皆さんからのコメントには、示唆に富む話題が多くありました。大学が地域で人材養成にのりだす

と言っても、実際は地元のベテラン農家の方々の支えがあって成り立っているという指摘は、なるほど考えてみれば当然のことだと思います。里山マイスター講座は研究者を養成するのではなく、「地域で生活する」このプロを育てるのだから、長い時間をかけてつくられてきた地域の知恵や生業を出発点にしなければ、人々には何も根づかない。机上の論理で終わってしまうのでしょうか。

一方で、科学という「武器」が経験や勘をより洗練させるという指摘にも、納得させられました。確かに自然（生態系）は奥が深く、科学をもってしてもすべてを理解することなどきわめて難しいことです。それでも、科学的な見方は世界をよりクリアに見せてくれる部分があるとも思います。日常的に地域の自然とかかわる産業の担い手一人ひとりが、自然を利用する在来の知恵とともに、科学的な見方という武器を手にすることで、何が変わっていくのか？答えはこれから見えてくるでしょう。これは壮大な実験と言えるのではないでしょうか。

地域の活性化や人材育成といった時に、常駐する研究者の役割とは何か？このことは、常駐スタッフのみなさんがずっと自問されてきたことだと思います。外からやってきた移住者や研究者が、能登の人々と自然を知って、働いて、生活して、地域の一部になっていく。明確な問題意識や課題を持った人は、いろいろな知識や考え方を吸収していきます。その姿が、地域に刺激を生み出しているのではないかと思います。彼らが学んでいるその相手（=地元ずっと暮らしてきた方々）もまた、彼らから学んでいるのではないかという気がします。

◆地域で暮らす人々にとっての学び

このことはきっと、2日目のまるやま組に参加した時に感じたこととも関係しています。

世界中から、なぜか今日萩野さん一家のお家に集まって一緒に神様に感謝し、食事をいただいている。なぜ、ここにこんな空間ができるいるのか？とても不思議な、でもどこかしつくるくる空間でした。日々の悩みや明日をどうやり過ごそうかということはいったん置いて、純粋に“ワクワク”するための空間。

私が自分の家を離れて、遠く輪島までやってきた人間だから、そんなふうに感じるのでしょうか？それだけではないような気がします。萩野さんから、まるやま組という場を作り立たせているものの東が、まるやまの豊かさそのものなのだというお話がありました。いつもはバラバラにあって何でもないことが、まるやま組に集まっていろいろな人の目を通してみると、素晴らしいものだということに気づける。明日からはまたいつもの毎日だけれど、昨日までとは少し世界が違って見て、やりたいこと、できることが少し増えたような気がする。次に集まったときに一緒にやりたいことを思いついた。そんなことを、大切にしたいと思いました。

◆レジデント型研究者のこれから

今回、「ひよこ組」で能登を訪れたいと思ったのは、農業、NPO活動などをして地域に暮らしながら地域のための研究や活動をする(=地域環境学ネットワークでは「レジデント型研究」と呼んでいます。常駐研究者と同じ意味です。)ってどういうことなんだろう？ということを、実際の取り組みを見せてもらいながら、より深く考えたかったからです。

1日日の能登学舎での研究会で、「地域も常駐する研究者も「幸せ」にならなければ意味がない」という言葉がありました。本当にその通りだと思います。ではどうしたら「幸せ」にな

れるのか？そもそも何がお互いの「幸せ」なのか？「幸せ」なレジデント型研究者の姿は、ひよこ組のメンバーが



これから模索していく課題です。

今回は、地域の方の声を聴かせていただく時間を十分にとることができませんでした。それは次の課題としておいて、研究者側の視点から考えてみたいと思います。それが、今の私の立ち位置でもあるからです。

今回、ひよこ組のメンバーがそれぞれに多様な常駐研究（レジデント型研究）や訪問型研究（よその地域から訪問して地域のための研究を行う）のスタイルをつくろうとされていることに、とても勇気づけられました。自分がこれからなすべきことを、前向きに考えられそうな気がしています。

福島県天栄村湯本の星さんは、婿入りしたことと、自分の入る墓、つまり自分の最終的な行先ができたと話していました。根無し草のように漂っている自分にはうらやましく感じられるのと同時に、星さんのスタイルはレジデント型研究者の1つのあり方だなと感じました。自分がやりたい研究を自由な時間にやる（大学に雇われるとかえって無駄な仕事に時間をとられる）という考え方には、地域に根差した生活があるからこそできるものだと思います。きっと、星さんの生活の中に、米作りや消防団活動と一緒に研究も織り込まれていき、それは湯本という集落の中にも織り込まれていくのでしょう。いろいろと面倒なこともあるけれど、それも含めて星さんは湯本に住むということを選んだのだろうと思います。

赤石さんから、これからの活動への展望を聞けたことも、レジデント型研究の新しい可能性の広がりを確認できたように思います。これまでの能登での活動の蓄積を無駄にしないため

にも、大学と地域の自治体や地域組織との橋渡し役をして、地域にとって役に立ちそうな事業や計画を提案していく立場を、自らつくっていくのだという気概を感じました。

これまで象牙の塔に引きこもってきた大学や研究者が地域走出去には、それなりの覚悟が必要なのだと思います。地域に入り込むといつても、実際にやろうとすると経済的に難しかったり、既存の組織に絡め取られたり、そういう生き方を想像することすら難しかったりする。地域の小さな博物館や地方大学の研究所などでは、すでにレジデント型研究者が活躍していますが、もっと多様なチャレンジがあってよいと感じました。

こうしたチャレンジは、大学院を修了してから3年や5年という短い期間でも、はじめからその意思を持って取り組めば、できることではないのかもしれない、対馬の木村さん（対馬市で3年間市職員として雇用されている間に対馬での地域活性化活動の基礎をつくりた

いと語っていました）や赤石さんの話を聞いて感じました。

地域社会と研究の世界は断絶しているのではなく、行ったり来たりできることが、地域での多様な「学び」には必要だと思います。レジデント型研究者は、その間に立っていろいろな知識や考え方を持った人たちをつなぐ役割を持っているのではないかと思います。それは大学人である必要はありません。むしろ、地域の中で多様なレジデント型研究者を発掘し、育てることが重要なでしょう。能登学舎の取り組みは、まさにそういうものだと思います。

様々な能登で出会った皆さんと、その後ろにいるであろう多くの人々の姿を想像しながら、レジデント型研究というチャレンジが、ますますおもしろくなっています。自分自身が、どこでどんな形でチャレンジに加わることができるのか、じつはまだ明確になっていません。ひよこ組のメンバーと議論しながら、考えていきたいと思います。



寺林暁良（てらばやし あきら）東京都

農林中金総合研究所 研究員／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

雪山を歩きました。アカマツの林間から差し込む陽の光は、サカキの緑の濃さをさらに際立たせていました。簡易郵便局の裏手から日本海に臨みました。遠浅の海は真っ透明で、その中でアオサが穏やかに揺れています。ほど木の隊列に、田の神に祈る儀式。そして、「いしる」のかぐわしさ。

能登は限りなく魅力的でした。その魅力を、科学者として、外部者としての視点で可視化する能登学舎やまるやま組の皆様は、率直に素晴らしい活動をなさっていると感じました。「へんざいもの」や「典座」さん、「ひろ吉」さんでいただいたおいしい郷土料理、「まるやま組」さんが取組む「あえのこと」、そして能登学舎さんが調査されている生物多様性。どれも能登のかけがえのない魅力であり、人にぎわいを生みだす資源となっていることを実感しました。「能登里山マイスター」を卒業された皆様のご活躍にも、無限の可能性を感じます。

しかし、たった2日という短い期間で触れることができたのは、ごく一部分の、しかも象徴化された能登であり、むしろ分からぬことばかりをずいぶんと背負い込んで帰ってきたように思います。社会学を学び、いつも「地域の方々」を対象に調査をさせていただいた私には、「能登の皆さんのかうした活動に地域の方々がどうかかわっているのか?」、「生活の“リアリティ”や地域の“切実”な課題にどこまで入り込んでいるのか?」、それがとりわけ気になっていました。

私は、長く青森県の岩木川という川にあるヨシ原の保全にかかわってきました。このヨシ原

では、希少種の鳥類や植物が豊かな生態系として、研究者の方々が保全を訴えています。その一方、茅葺き屋根やヨシズ、受粉用昆虫の巣材などに利用されており、地域の方々がヨシを刈り取り、火入れを行って管理しています。

私は地域の方々に、「ヨシ原をどのように利用してきたのか」、「なぜヨシの需要があまりなくなった今もヨシ原を保全する必要があると考えるのか」というお話を伺ってきました。すると必ず、話題がいつの間にか「堤防管理」のことになっています。誰にお話を伺ってもそうなのです。「なぜヨシ原の話をしていると、必ず堤防管理の話になるのだろう?」初めは意味がわかりませんでした。

しかし、何年か通い続けると、地域の人々の認識のなかで「ヨシ原」と「堤防」がどうつながっているのかがわかつてきました。洪水を多く経験してきたこの地域の人々にとって、堤防管理はまさに生活の切実な問題です。洪水の度に土嚢を積んで集落を守り、補修を繰り返してきました。今でも年に2度の堤防除草は、地域の一大行事になっています。堤防管理は基本的に集落ごとに行いますが、いくつかの集落で「堤防保護組合」を組織し、大事なことはここで話し合ってきました。

実は堤防もヨシ原も国土交通省所管の国有地です。しかし、地域の方々の生活に密着しているからこそ、地域の方が自治管理してきたし、当然かかわり続ける権利があるのだと主張してきました。ヨシ原も同じで、自分たちがずっと管理してきたからこそ、利用する権利も管理する義務もあるのだ、と。そして、ヨシ原管理も堤防管理も、土地管理という面で連続してい

るのです。

こうしたヨシ原と堤防とのつながりは、地域の人にしかわからない感覚です。土地の「所有」や「利用」の概念も、我々の常識からは少し外れています。しかし、これが地域の方々がヨシ原保全を行う「ストーリー」であり、管理主体として認識なのです。そして、こうしてずっと管理してきたヨシ原に対して、研究者や自然保護団体が外部から「自然」として関わってくることに、地域の人々が大きな違和感を感じていることも分かりました。

このヨシ原で社会調査をして良かったことは、こうした地域の方々のストーリーを研究者らが理解する上での手助けになったことです。実際、これが明らかになったことで、生態学的研究者や国土交通省のかかわり方もずいぶん変わりました。「生物多様性はなんたらかんたらだから重要で…」といった生態学的なストーリーも、岩木川では「そういう価値観もあるよね」と、かなり相対化して捉えられています。そして今では、地域の方々・科学者・行政などがお互いの価値観・ストーリーの違いを認め合うことで、一緒に新たな「ヨシ原保全のストーリー」を紡ぎ出そうとしています。

あくまで想像ですが、能登でも同じようなことが起こっているのではないかでしょうか。里山であれば、いつの時代にどういう人びとが、どんな用途で利用してきたのか。利用したのは、個人か、集落か、組合か。利用のルールについては、クリはどうでキノコはこう、ナラはこうと収穫物によって違うこともあるでしょう。ため池についても、管理するのは田んぼの所有者か、集落か、実行組合や土地改良区とのかかわりはどうか。ルールはどうなのか…。このよう

に、皆さんのが活動されているフィールドでは、歴史や慣習、組織やルール、問題といった「社会的なもの」が網の目のように張り巡っていることでしょう。そして、それらを踏まえなければ、皆さんの里山やため池での調査・活動と矛盾が出てきてしまうでしょうし、地域社会との関係もどこか“ちぐはぐ”なものになってしまうと思います。

こうした中で、能登をフィールドにしているさんは、意識するしないにかかわらず、様々な社会関係のなかで地域のストーリーやアリティに触れ、地域とのかかわり方を変えてきたのではないでしょうか。そして地域の人々が、新たに能登にやってきた皆さんのストーリーを受け入れた部分もあるでしょう。私は、地域環境保全に関わる活動では、こうした相互変容こそが重要だと思っています。なぜなら、それは相互理解に基づく歩み寄りであり、新たな協働につながるものだと思うからです。そして、このあたりは、社会調査をしてみないことには見えない部分だと感じています。



能登で頑張る皆さん方と、能登でずっと生活してきた地域の人々。それぞれの「能登のストーリー」はどのくらい共有されたものなのかなあ。それを社会調査でぜひとも見えるものにしてみたいなあ。そんなこと考えていました。



浪崎直子（なみざき なおこ）茨城県つくば市
国立環境研究所

今回、初めて能登を訪れました。地域環境学ネットワークの研究会も初めての参加でしたので、議論についていけるかどうかという不安と、どのような出会いがあるのかという期待があり混じった気持で参加しました。私は普段、文部科学省の科学研究費の研究プロジェクト「サンゴ礁学」の事務局として、内部の異分野連携と地域連携を仕事にしています。「サンゴ礁学」は、沖縄県の石垣島や瀬底島などを拠点に訪問型の研究を進めており、私はこれまで訪問型研究プロジェクトとしての地域連携を実践してきました。研究成果を伝える講演会やポスター展、学生の教育プログラムを通じた地域との交流、地域のニーズのフィードバックなどを実践し、研究者からの一方的な成果発信だけではない地域連携を模索しているところでした。今回、他の地域連携の事例を知り、能登の事例から学びたいと思い、研究会に参加しました。

◆金沢大の里山里海プロジェクト

金沢大の里山里海プロジェクトで、一番驚いたことは、生態学者を中心に人類学者などのさまざまな分野の研究者複数名が、地域に住み込み、社会人向けの人材育成や参加型の生きもの調査などの実践を通じて、深く地域に入り込んでいるところでした。キノコや植物、水生昆虫など、それぞれの生態学の専門知識を活かして、市民生物モニタリングや資源管理に関わっておられること。それだけでなく伝統料理などの地域資源の掘り起こしやエコツアーの開発を行うなど、生態学者と地域コーディネーターの二足のわらじをはいて活動している研究者が複数名、同じ地域で活動されているというのが

とても新鮮でした。

さらに人類学者の中山さんから、一方的な生態学の専門知の伝達だけではない、伝統知と科学知を融合した新しい知の創出に視点をおいてすすめているという話もありました。今後異なる分野の研究者が、それぞれの視点で地域に関わることで、どんなものが生まれるのだろうとともに興味があります。金沢大学の取り組みはしっかりと地域に根を下ろしていて、ここまで地域に入り込んでいるところがあることに驚きました。

◆能登里山いきものマイスター養成講座紹介

能登里山いきものマイスター養成講座は、2年間のコースで、卒論があるというNPOとは異なる大学らしい実践と感じました。なかなかハードルが高く、でもだからこそ関心のある人たちが集まっているのだと思います。また、宿泊した農家民宿のお父さんは、生き物に关心がなかったが、能登里山いきものマイスター養成講座生き物で生物調査を学び、調査を楽しそうに語るようになったとおっしゃっていました。生態学の科学知を伝達することで、価値化するというのはこういうことなのかと感じました。今後修了生のネットワークを活用した展開を考えているとのことで楽しみです。

◆まるやま組の取り組み

能登里山いきものマイスター養成講座の修了生であるまるやま組の萩野さんは、「まるやま組ってなんだろうということをわかりたくて、能登里山いきものマイスター養成講座を受けた」とおっしゃっていました。卒論のプレゼンをお聞きして、今までやってきた実践を表

や図、文章に落とし込み、試行錯誤しておられることが伝わりました。特に、根を使って表現した図は、圧巻。それでも、最後には「学んでみたけど、やっぱりまだよくわからない。でもわくわくしている」とおっしゃっていたのが印象的で、科学の論理的な思考や言葉ではまだ伝えきれないものがあるという感じがしました。

◆全体を通じて

この金沢大の取り組みが地域にどのようなインパクトを与えたかが見えると面白いなと感じました。こうした活動の社会変容の評価を模索している環境社会学者の菊地さんから、評価軸として、知の創出、ネットワークやステークホルダーに



変化があったかなどを検討しているという話を個人的に聞き、また私はこれから、私の対象地域で環境教育と社会心理学の評価軸をつかって「個人の変容」に焦点を当てたアンケートを作成しています。今後「社会変容の評価」についても議論が進むと、地域研究としても非常に面白いものになると感じました。

これまで、レジデント型の研究者の役割、まずはその研究者の専門を超えて地域に役立つ知を収集、提供すること、と思っていましたが、今回参加して、生態学者と社会学者で違っていて、生態学者ができるることは専門知を伝えて価値化すること、保全行動の効果を測定し評価すること、社会学者にはそうした行動がどのように社会にインパクトを与えたか評価すること、これらがうまく連携できるとよいのではないかと思いました。



星（富田） 犀（ほし とみた しょう） 福島県天栄村

東北大学大学院環境科学研究科新妻研究室

3年前、以前の勤め先でのゴタゴタが嫌になって失業者となっていたわたしは、半ば自暴自棄な気持ちで福島の山村への移住を決意した。しかし、農村社会の構造や、そこに暮らす人々の考え方などまったく知らない状況で飛び込んでいったので、はじめはただひたすら人間関係作りと、豊富に存在する山林資源の活用について試行錯誤を繰り返した。そしていま、月日が流れ、いくつか形として見えてきたものがあるものの、それが本当に地域のなりわい起こしと自然再生につなげることができるのかどうか、もうひとつ自信のない状態だった。

そしてこのたび、能登フィールド研究会に参加させていただいた。以前からいろいろなところで先進事例を拝見したいと思いつつ、出不精のためなかなか機会がなかったところを、こうしてお誘いいただけたことにまず感謝申し上げたいと思います。

2月下旬の能登では、雪が残るものの、少しだけ春の気配を感じることができた。

プレゼンテーションによって金沢大学能登学舎での活動と、里山マイスター養成プログラムの概要をご紹介いただいた。これらの取り組みが、実際に地域の環境や社会にどのように波及しているのか。実際にフィールドをご案内していただき、地域の人と接することで感じたことを、ここに綴ってみたい。

みごとに再生したアカマツ林は、マツタケ山

を目指しているという。わたしも東京近郊にいたときには、多くの「管理された里山」を見てきたが、それはもはや



単なる愛玩の対象になった山で、緑が茂っていればよいという、地域の暮らしとはなんの接点もないものばかりだった。しかしこのアカマツ林は違う。マツタケという商品を生産する場所であり、林の管理はすなわち収入を得る行為と結びついていた。

道端の小さなため池には、サンショウウオの卵塊が見られた。能登では生物相の調査がさかんにおこなわれ、その把握が進んでいる。生物多様性は、ここ数年で急速にその重要性が認知されてきている。しかし地域の人たちは、いてもいなくても生活に関係のない生物に対しては関心が低いことが多い。わたしのフィールドの湯本でも、無農薬田んぼでの絶滅危惧種の発生に興奮して騒いでいたわたしは、「農作業をせずに遊んでいる骨病み（怠け者）」であるといわれた。しかし、こうした希少生物は地域の魅力を高めることはあっても損なうことではなく、農作物のブランディングに利用できる可能性もある。このときフィールド見学に同行していただいた地元の方も、「調査をとおしていろいろな生き物がいることを知ることができた」とおっしゃっていた。ここでは、有益か有害かに偏重しがちな地域の人々の生物相への認識が、生物多様性調査をとおして変わりつつあることを感じることができた。

今回、地域資源としての「食文化」の重要性も感じることができた。昼食をいただいた「へんざいもん」。福島県天栄村湯本でやりたいと思っていた土日だけ営業の農家レストラン。その見本がある、と思った。「典座」でも「ひろ吉」でも、能登の味覚がふんだんに出てきた。ご主人は「ふだんうちで食べているようなものばかりで申しわけない」という。しかしあたし

たちは「これ以上のごちそうはないのに」と思う。この意識の差は、湯本も同じだ。「わりいない、山菜とキノコしかねくてよお」。何度聞いたことばだろう。それがここでは、なりわいに結びついていた。

翌日は「まるやま組」にて「アエノコト」を見学させていただいた。農業や自然環境と信仰という、地域の価値観の根底にあるものが、若い世代に継承されていた。まるやま組では「自分たちの取り組みを、うまく説明することができない」というようなことをおっしゃっていたが、昔から地域に住んでいる人に「なぜここに住んでいるのか」とか、「なぜこの行事を続けているのか」と聞いても、はつきりした答えなど返ってこないのでおなじで、ごく自然なことであると思った。

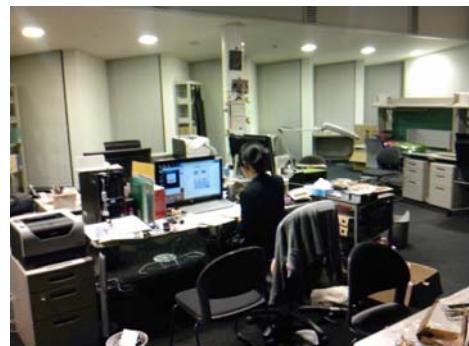
このように、能登では金沢大学を中心とした取り組みが地域に浸透しつつあり、地域の人々が地域の魅力に気づき、それを活用する手立てを模索していることがよくわかった。湯本でも参考にできる点が数多くあり、非常に有意義な時間をすごすことができたと思う。

一点、質問し忘れたことがある。それは、これらの活動にどれほどの地元の若者が関わっているかだ。こうした活動に積極的に関わってくれるのは、経済的にも時間的にも比較的余裕のある60歳以上の人たちが多いと思う。しかし、そういった人たちも10年後には担い手として活動するには難しい年代となるはずで、そのままの形態での活動は、持続可能とはいがたい。また、Iターンなど外部の人間はなかなか地域の「主役」になれるものではない。やはり地元出身の若者の奮起を望みたいところである。そのためにも、地域資源をうまく活用したなりわいを、持続可能な形で創出し、若者が住みたいと思う地域、帰って来たいと思う地域にしていくことが重要であると、自分自身にも言い聞かせ、帰路についた。

能登フィールド研究会 振り返り Skype 会議

能登でのフィールド研究会を終えた後の4月14日、インターネット電話サービス「^{スカイプ} Skype」による振り返り会議を実施しました。

金沢大学能登学舎（珠洲市）には赤石大輔さん、総合地球環境研究所（京都市）には清水万由子と寺林暁良が集まり、能登フィールド研究会の感想や現地でうかがいきれなかった疑問について語り合いました。



清水：まずは、私たちが能登学舎にうかがったときの正直なところの感想をお願いします。

赤石：はい。短期間の視察の受け入れをしてきた経験はあるので、準備はそんなに大変ではありませんでした。幸い色々なところも見せられましたし、われわれの活動をある程度知っているだけだと思っています。ただ、これから活動をどうして行くのがいいのか、こうした活動の立ち位置など、我々が悩んでいることについての議論をもう少しできたらよかったです。

清水：ちょうど活動の立ち位置を考えているタイミングなのかなあ、というのは私も感じたところでした。参加者からは、能登学舎と地元の人とのかかわり方を知りたいという声がありました。地元の人たちは能登学舎の人たちをどういうふうに見ているのでしょうか。

赤石：いくつか段階があると思います。里山マイスターを受講している方と、地域にいるけどあまり接点がない方がいるので、それぞれかなり印象は違うと思います。三崎町の一般の方の中には、「大学がやっていることで、自分たちにはあまり関係ないでしょ」と思っている方も結構いると思います。

清水：里山マイスターは、地域のリーダーになる

ような人材を育てる活動だと思うので、色々な受け止め方があると思います。ただし、講座を受けて色々刺激されている人、ネットワークを作ってアクティブに活動されている方がいることは素晴らしいことだと思います。

赤石：もうひとつは、どこまでが大学の仕事なのか、ということは、ずっと議論しています。地域づくりは研究者じゃなくてもできる。僕らは現状、何でもやってしまっているので、それでよいのかと思っていますし、それでよいわけはないとも思っています。

寺林：赤石さんたちとしては、生態学者として関わる、という関わり方なのでしょうか。

赤石：ひとつはそうですね。スタッフでは、個体群生態学の専門家で、能登の水田での環境保全型農業を目指すために、害虫の防除について地域と一緒にやっています。それは農家さんにとっても直接メリットのあることです。非農地にビオトープを作るのが希少種保全では一般的だけど、それは農家にとってはとても負担になっているので、農地の維持で保全の効果があることを、一緒に検証しています。キノコのこともうそうですね。ですから、生態学の手法を用いて貢献できていないこともないです。ただし、その仕事がメインではなく

なってきている部分もあります。マイスター制度自体、人材育成が目的です。受講者60数名から、生態学とは全く関係のない好み・要望もある中で講師をしているわけです。ただ、一歩引いた目線で客観的に自分の活動・なりわいを評価して、課題を掘り下げるという論文指導は、ひとつは大学らしい仕事なのかな、と思っていますね。

清水：論文を書くとか研究するというのは、改めて地域を見直すという作業になりますね。

赤石：ええ。その作業は、他のしくみではなかなかできないと思います。コンサルが来てやつて、結果だけ見せてくれるところはあるのですが、地域の人と一緒にその作業をした、というのはあまりないですね。そのプロセスと一緒にやったということですね。

清水：地域の人が「学ぶ」ということの意味は、能登学舎の人たちにとって大事で、評価すべきところですね。

赤石：そこは当事者が一番過小評価しているというのはあって、僕は一番近い第三者として、ちょっと引いた目で評価をしたいと思っています。当事者としては粗ばかり気になってしまふうでしょうね。

清水：もちろん地域の人も論文を書いたり実習を受けたりする中で、学んでいると思うのですよ。でも、地域の人から研究者の側も学ぶことが多いわけですね。その辺はどういうふうに認識されているのでしょうか。

赤石：そうですね。結構難しいですね。さっき話したとおり、スタッフの中で客觀性が失われている部分がやっぱりひとつの問題です。

清水：一緒に学んで一緒に課題に取り組んでいたら、研究者であってもやはり当事者になって

しまいますよね。それは無理に引き離さなくともいいのではないかでしょうか。でも、それではいかん、という考え方でしょうか。

赤石：じやないか、という話です。それはまさに「地域仕事人」みたいな人がやる仕事なのでないかと。

清水：科学者の目と「地域仕事人」的な目は同居できない、と。

赤石：両方あつたらいいと思いますね。我々はいま研究者として関わっているので、常に客觀的にあるというのは難しいです。

寺林：そういう話はどこでもあると思いますね。社会学でも、ちょっと離れて運動なんかを見るというモノの見方をする一方で、自分たちも当事者として関わりながらやる研究も非常に増えてきて、そのどっちがいいのか、という話がありますね。しかし、多かれ少なかれ、研究者のバイアスがかからないような研究なんかないという立場もありますし、それも含めて研究なんじゃないかと思います。

清水：社会科学の方との共同研究はありますか。

赤石：今、京都大学にいる北野慎一さんは、マイスターのスタッフでした。彼自身も一時期はレジデント型研究者でいたわけだから、フィールドも良く分かっています。地域の方も北野さんが来ると大歓迎で、キーマンでした。やっぱり彼も一歩引いたというか、自分のスタンスは持っていたいというので、入りすぎないようには気を使っていたみたいですね。なぜかというと、地域の課題などをちゃんと指摘できなくなってしまうのは怖い、といっていましたよね。過疎地域の撤退論をやっている方が、石川県とか、金沢大学のスタッフと話をすると、「撤退とか言うな」みたいに、結構感情的に批判をしてしまったりすること

があるわけですね。金沢大学の先生には受け入れられないところもある一方で、地元の人々に話をすると、「まあ、それもそうなのかなあ」みたいな反応だったり。やっぱり外の人だからそうやって言えるのだろうし。

寺林：逆に、能登の人たちがどういう問題意識を持っているのかを明らかにするというのも科学者の関わり方としてあると思うのですけれども。

赤石：そうですね、僕らもまさに当事者なのだけれども、世界農業遺産というものが去年1年間で指定されて、「能登や珠洲市の世界農業遺産というものは何なのか」を市民レベルで議論しているという取組みが結構あるのですよね。議論やワークショップをしていく中で、どのように地元の人が「珠洲らしさ」などを見つけていくのか、というプロセスは研究のひとつになるのかな、という気はしています。

清水：そういうプロセスがないと、本当のところはわからないというか、それがあるからストンと落ちるということもあるだろうし。そうあるべきではないかという気がします。

寺林：僕が気になったのは、生物多様性ということで調査している研究員の方々で、能登という環境がどういう社会システムの下で成り立っているのかということを、調査されている方はいるのか、ということです。例えば、ため池であれば必ず管理者の方がいて、そのため池が適切に管理できなくなったことがゲンゴロウに影響することがあると思います。そうなると、ゲンゴロウの保全では、ため池管理の社会システムの有り様を考えていく必要が出てくると。山もそうで、山の所有・利用・管理のあり方が生態系のあり方に関わってきます。その当事者との情報のやり取りがあるのか、というのは非常に気になったところで

す。

赤石：そうですね、残念ながら専門としてやっている人がいなかったので、研究レベルにはなっていないです。ただ、地域の人とコミュニケーションはしていて、情報はそれぞれ把握していますよね。だからそういう情報を研究にできる人がいたらといいなあとは思いますね。

寺林：そういうところを明らかにすることは、ひとつ社会科学ができる仕事だと思います。そして、地域の課題に密着していくと、どんどんと文系と理系とか、生態学と社会学とか、研究者と地域住民とか、境目がなくなっていくのではないかと思うのですよね。役割分担も大事ですけれども。地域環境学ネットワークとしては、そういうところも非常に大事な研究の分野だと思っているので、生態学だからここまでしかできないとか、そういう議論だけではなく、新しい「あいだ」のところの研究のあり方みたいなものも一緒に議論できたら面白いと思いました。

赤石：そうですね。ちょうど今、5年間やってきた節目で、スタッフの間でも、地域でアンケートというか振り返りをして、どのような変化があったかというのがまとめられたらしいなあ、という話は出ています。まあ、地域がどう変わったか、というのは知りたいのだけれども、それをどう調査するのかは僕も良く分からぬのだけれども。

清水：私も、地域の方にインタビューをして「この活動をどう思いますか」ということを聞くことがあります。でも、やっぱりそれなりに聞く側と聞かれる側の関係がないと、わからないのではないかと思ってしまう。当事者との関係性と第三者目線の両方持った人の観察と、マイスターのスタッフの皆さん目ので見

た受講生の変化、本人の自己評価、それらを合わせてやるのが良いのではないかという気がしますね。

寺林：そういう意味で言うと、第三者的な位置にいらっしゃる赤石さんには、非常に重要な役割があるのではないかというふうに思います。

清水：こうした変化の「本当の姿」みたいなものはないと思うのですよね。結局はこの人から見たこの人の変化というものしかわからないので、それはそれでいいのではないかと思っています。

寺林：もう一つ、個々人の変化だけではなくて、社会としての変化も気になっています。農山漁村地域に入っていくと、個人と話をするというよりも、自治会長さんに話を通す、というように、地域組織との関係で物事を進めることが多いですね。

清水：マイスターだと、個人が単位じゃないですか。そうなると、次のステップなのかもしれないんですけど、集落やムラとしての変化みたいなものは、どうでしょう。

赤石：うん、なかなか難しいです。一方で、社会の変化といつていいかは分からないけど、行政がそういう取組みにお金を出してくれるようになってきていますよね。大学も。これまで文科省の振興助成金でやってきたものを、県と大学と市町村で出し合ってやっていこうというのは、僕から言わせればずいぶん大きな変化だなあと思います。

寺林：それは本当にそうだと思います。やっぱり公共性を帯びてくるというか、いろんな人が関わって大事だということになると行政も協力してくれるようになるし、そうなれば予算もつくようになりますよね。ところで、マイスターの卒業生の人たち同士で、ネットワークなんかはできているのですか。

赤石：そうですね。受講期間が2年と長いので、皆さん友達になっていますよね。同窓会もできています。ただ、同窓会で何かやろうというところまで動かない、徐々に関係が切れてしまうという危険もあるかなあと思いますね。今のところは終わったばかりでみんな仲がいいので、つながりはありますよ。僕としては、彼らが大学生と一緒に何かをやっていくような、教育支援者のような形でマイスター卒業生が講義に出てよいし、マイスター卒業生の職場にインターンで大学生が行くということができればよいと思います。

清水：話は尽きないですね。スカイプ会議もなかなかいいですね。

(了)

「ひよこ組」フィールド研究会を受け入れて　—能登からのコメント—



赤石大輔

NPO 法人能登半島おらっしゃの里山里海・研究員（当時）

珠洲市企画財政課自然共生係・自然共生研究員（現在）

平成 24 年 2 月 25、26 日に実施された地域環境学ネットワークひよこ組による能登フィールド研究会では、全国各地から地域環境の研究に携わる若手が能登に集まり、金沢大学をはじめ能登で行われている様々な活動を見学し、またお互いの活動を紹介して交流した。私は研究会の受け入れ側の立場から、今回の研究会で得たもの、また能登で活動する若手研究者として、自分なりに見えてきたことなどを述べたい。

1. 受け入れの準備

前年の 12 月に清水さんから研究会の打診を受けたときは、どのような方が参加されるか判らなかったが、すぐにあれと、あれと、あれを紹介しよう、そこでご飯にしよう、そこに泊まつてもらおう、といった感じで段取りを決めることができた。これまで視察や研修を何度も受け入れてきたことで、時間配分や予算についても把握ができていたし、地元の方々も協力してくれる体制ができていたからだ。地域連携を掲げる研究機関、その現地スタッフの面目躍如といったところか。私の肩書きは一応、研究員であるが、この五年間の能登での仕事の大部分は、こういったコーディネーター的作業が大半であった。ここですこしコーディネーターについて話したい。大学と行政や地域住民の連携を進める上でコーディネーターという立場は大変重要で、コーディネーター養成が地域再生の鍵であるという議論もすでにされ尽くされている。では地域に入って活動をするレジデント型研究者は、自らがコーディネーターであるべきなのか。この問い合わせについて自分は、レジデント型研究者は自らの研究はもちろん、研究

機関と地域、訪問型研究者と地域を繋ぐコーディネーターであるべきだと考える。また仮に専業のコーディネーターがいた場合も、レジデント型研究者のサポートのみならず、自身が何らかのテーマを持って地域と関わる事が必要と考える。しかし実際やってみるとそのバランスをとることが大変難しく、自分は研究が十分にできていないコーディネーター業ばかりやっているレジデント型研究者だ。限られた予算や時間の中で、より分かりやすい成果のための作業を優先すると、自分の専門分野の研究は後回しになってしまった。今後は自分の研究をする時間をより確保したいと考えているが、はたしてどうなるか。このあたりの議論はレジデント型研究者の皆さんとまたじっくりしてみたい。

2. 客観的評価の手法とは

さて、研究会の流れは大体準備できた。しかし、今回は単なる視察、見学旅行ではなく、若手のレジデント型研究者の集まりで、地域環境について議論する場である。自らの活動を客観的に評価し、参加者に伝え、深い議論と新しい発見を提供することができるか。当時、能登

学舎は里山マイスター4期生修了課題発表の直前で、マイスターのスタッフに、議論する時間をとつてもらうことはできなかった。プロジェクトも最終年度の年度末だったので、自分たちの活動を振り返るタイミングとしてもちょっと時間が悪かった。私の中では適当な答えが見つからないまま、研究会当日を迎ってしまった。

活動の評価については、受け入れを終え、後日清水さん、寺林さんと Skype で振り返りをしたときに、お二人からは「活動自体が大変面白い研究テーマだ」、という風におっしゃっていただいたが、自分を含めスタッフの多くは自然科学分野の研究者なので、社会学的な分析の方法を知らないため、自分たちの活動自体を研究テーマと据えて見たことがない。それはたしかにもったいないことだと思うし、こんな活動をしました的な感想文ではなく、自身の活動と他の活動を比較し、分類したり、相対化したりして(社会学的なアプローチってこういう感じ?)、ぜひ学術的にまとめていけたらと思う。

3. 過大評価と過小評価

上で述べた通り、自分たちの活動を十分評価できていない状態だったので、能登学舎の課題などを十分お伝えできなかつたと思う。今回初めて能登地域へ、また能登学舎へお越しの方ばかりだし、こちらからは分かりやすい活動を紹介したので、皆さんから大変良い評価をいただいた。しかし、例えば食堂へんざいもんは、地域のお母さん方が楽しくやってくれているのだが、実はかなり無理をして、色々と持ち出

しでやっていて、ほとんど利益は出でていないし、かといってさらに利用者を増やすための情報発信などは彼女達にはなかなか難しいなど、課題も一杯だ。当事者からはどうしても自分たちの活動の粗ばかり見てしまい、活動を過小評価してしまうパターンに陥ってしまう。繰り返しになるが、客観的な評価が必要だと感じている。

4. 地域課題研究拠点とフィールド研究会の今後

今回の研究会は、能登学舎の主な活動内容と、参加者の皆さんとのそれぞれの活動を聞くことができ、とても有意義だった。参加者の皆さんから色々なコメントをいただき、能登学舎が今後どうあるべきなのかを考えることができた。能登学舎は平成 24 年度から新たなスタートを切り、大学や地域からの要望もさらに増えている。地域に入り活動する我々は、どこまで研究者としていられるのか、どうすれば新しいものを創り出せるのか、議論の最中である。

今回のような研究会は、ひよこ組でぜひ今後も続けていただきたい。レジデント型研究者同士が情報交換し、お互い評価しあったり、課題について議論できる場を持ちたい。それはオンライン、オフラインを併用しながら、わいわいとやれたらと思う。次回の研究会はどこだろうか。楽しいフィールドに皆さんと伺いたいです。

(平成 24 年 6 月 02 日)

小路晋作

金沢大学地域連携推進センター 博士研究員

地域環境学ネットワーク「ひよこ組」の皆様、2月は能登学舎までお越し頂き、また、レポートをお送り頂きありがとうございます。これまで、たくさんの視察をお受けしましたが、こんなに力の入ったフィードバックを下さった方々はいなかつたので感激しています。短い時間ではありましたが学舎での研究会を思い返しながら、私が従事していた『「能登里山マイスター」養成プログラム』のその後について述べます。

「里山マイスター」は、昨年度末に5年間の事業が終了しました。文科省からの資金はいったん切れましたが、金沢大学と自治体（石川県と奥能登の4市町）が資金を拠出し、当面3年間の予定で、大学が主体となって後継事業を実施することが決まっています。能登学舎の存続が不安定である状況は変わりませんが、こうした動きは、能登に大学のサテライト拠点を継続して置きたいという地域自治体や金沢大学の意思を表しています。能登学舎では2人の職員が学舎を離れ、現在3名が金沢大学の非常勤職員（博士研究員と教務補佐員）として、後継事業（10月開講予定）の構想作り等に携わっています。

研究会のテーマであった「地域で暮らす人々が求める『学び』とは？」については、まさにこの数ヶ月、後継事業の内容を検討しながら私たちが議論を続けている点です。後継事業では、金沢大学と自治体に対して、より直接的な形で成果をアピールしていく必要がありますが、経済活性化に直接につながる事業を期待する自治体と、教育研究の成果を求める大学との間に大きなギャップがあるようです。能登学舎に常駐する我々の立場としては、「里山マイスター」修了生に相手になってもらって、これから能登学舎のあり方について意見交換を



重ねてきました。このなかで私が修了生の意見として共通していると感じたのは、受講を通じて幅広い志向や属性の知り合いができた点、幅広い知識を得て視野が広がった点が評価されていることでした。今後も特定の分野（ビジネスとか、ツーリズムとか）に特化するのではなく、様々な立場の人が様々な角度から学べる場所であることが重要であるように思います。一方、反省点としては、個人の成長につながるプログラムとしては良いが、地域へ成果が反映されにくかった点が挙げられそうです。つまり個人レベルの取り組みが卒論という形で終わってしまい、必ずしも地域の中で根付いていかないという反省です。後継事業では、対象を個人からグループへ、点から面へとスケールアップさせて、地域レベルの活動へ発展させることをサポートできないかなと考えています。たとえば「まるやま組」をひとつの核として、当事者や関心をもつ人が集まって様々な角度から学び、合同で卒論をひとつ仕上げるようなイメージです。テーマによっては大学の研究者も参画して、学術成果をあげられるような仕組みを作りたいと考えています。

「レジデント型研究者の役割」については、自分自身、まだ「レジデント」としても「研究者」としても中途半端なので、なんとも面はゆ

かったです。私のような基礎科学(昆虫生態学)の研究者には、「研究のおもしろ話を分かり易く伝える」ことが目指すことの一つだと思いまして、今後も能登での研究を深め、「おもしろく」することが第一かと思っています。先日、地元の住民を対象として水田の生物調査報告会を行いましたが、こういった機会に本気で取り組むというのが重要だと思います。

当日は、「里山マイスター」の卒論前後で、何だったか、とても忙しく、ゆっくりお話でき

なかつたのが残念でした。レポートを拝読して、各地で興味深い活動に携わっておられる方が来られていたことを知り、残念の意を強くしました。また何かの機会で皆様とお会いし、お話しできる機会があれば幸いです。

(平成 24 年 6 月 22 日)

ひよこ組の皆さんへ

去年の2月一面の雪の中、アエノコトにひよこ組のみなさんがやって来て下さったまるやまは、自然栽培の新井さんの田植えもようやくおわり緑濃く、生き物たちで賑わっています。本当にまるやまで全国津々浦々からのいろんな方々と出会い、田の神様に感謝するなど夢にも思っていませんでした。

さて『住む』ということと『研究する』というテーマを抱えたひよこ組のみなさんですが、わたしにとっては『住む』は『生きる』と同じことなのかなとかんじています。あまり先の事は正直考えていません。よく集落の人々に『あんたずっとここに住むつもりか?』と聞かれます。そんな時『家もつくってる最中で(未完成)他に行くところもないから取りあえずは、今日はいますよ。』と答えています。一生ここにいて、骨を埋めるか等と言われても、実際先の事はどうなるか分からぬ。明日死ぬかもしれないし、何か運命的な出会いがあるかもしれないのですから。けれども今、この瞬間ここに居る事は動かしがたい事実で、ここで自分にやれることをやるより仕方ありません。

ここの人間か、外の人間か、いずれここを去る人間か。わたしはどこから来てどこへゆくのか。そんなことをアメリカと日本、東京と能登をいったりきたりしながら探していく、結局どこにも青い鳥はみつけられませんでした。

集落の人の『ずっとここに住むつもりか』という質問の中の『住む』は『責任を持つ』と同じ意味をもつのではないかなと感じています。『おまえはここで一緒に草を刈り、雪をすかし、土を耕し、恵みを祭り、人を送り出すことに責任を持てるか?』ということです。とっても胸はって『はい。』等と言える自信はないのですが、ここから逃げ出して東京に帰ったと

しても、アメリカにいったとしても、もうその責任からは逃れようもない気もします。

何世代かかけて便利さを追い求めつづけた都会人が見ないふりして来たものを、今その代表としてわたしが向き合っている。日々、いろいろ気付いたり、発見したり、感動したりしている事を、ひとりで感じているのはもったいなかつたり、誰かと共有したいから、わたしの後ろにいる、まだ便利な国にいる『昨日のわたし』の友達へ伝えたいと思います。またそんな集落にとっては異物なわたしを見て、わたしの後ろにいる都会の人々をまるやまの周りの人々に感じ取ってもらえればとまるやま組をひらいています。

まるやまのまわりで土地に根ざして暮らすと言う実験をして、ここを内側から見る目を養うことができる。豊かな自然をモニタリングする事で客観的に外側から、まるやまの立ち位置を知ることができる。そのふたつの目ある事で何故だかわたしは、ここに今生きる事にとても自信が持てる様になりました。いえ自信というよりどっしり肝が座ったような気持ちというほうがいいかもしれません。どうしてかなと思うとたぶん、マチに住んでいた頃の『ココはドコ?ワタシはダレ?』状態から『わたし、いま、まるやまにいます。』と断言できるからでしょうか。

とりとめのない話になってしましましたが、ひよこ組のみなさんがそれぞれの場所でかけがえのない今を積み重ねられることをニッポンのはずれからお祈りしています。

2012年 夏至 まるやま組 萩のゆき

編集後記

能登フィールド研究会では、各地のレジデント型研究者の方々に出会うことができましたが、皆さんの立場、動機、役割、成果…どれもが多様で「曖昧」であることを実感させられました。私自身はレジデント型研究者ではありませんが、レジデント型研究者とは何者なのか、地域社会にとってどんな意義があるのかを、今後も皆様の活動から考えさせてもらえた
ら、と思っています。（寺林）

雪景色の田んぼが、もうずっと遠い世界に感じられるような季節になってしまいました。
「ひよこ組」の産声であるこの報告書は、初めての編集作業にまごまごし、少しだけ難産となりましたが、おかげさまで無事に生まれてきてくれました。

迷った時、折れそうになった時に思い返して、もう一度前を向けるような経験が、「ひよこ組」から生まれたらいいなあ。これからも、それぞれの地での奮闘を信じて、学びあい、励ましあえる仲間でありたいと思います。（清水）



発行：2012年6月

発行者：地域環境学ネットワーク 若手WG「ひよこ組」

(〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所内 地域環境学ネットワーク事務局)

この報告書は、JST-RISTEX 研究開発プロジェクト
「地域主導型科学者コミュニティの創生」の支援を受けて作成されました。

